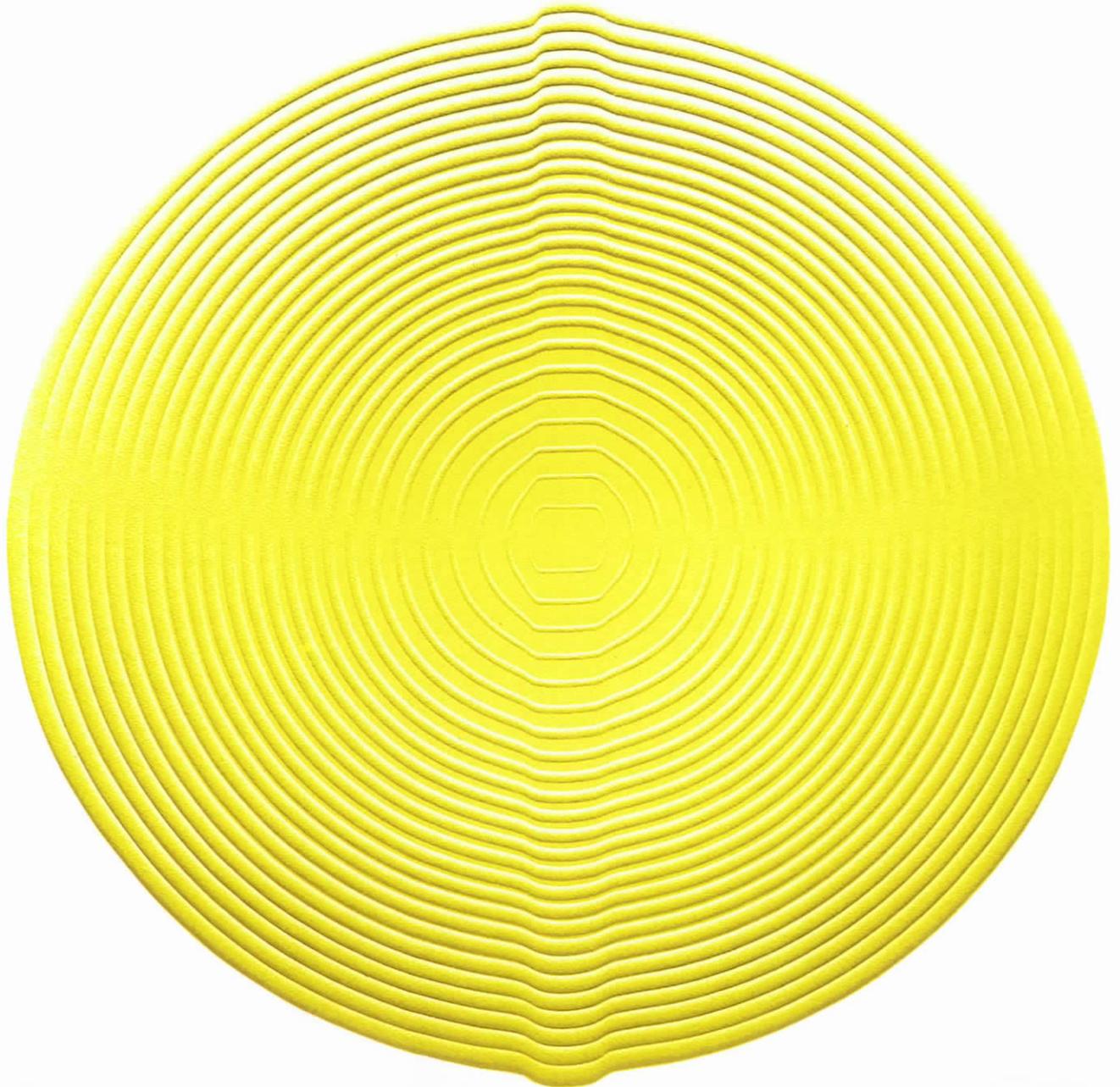
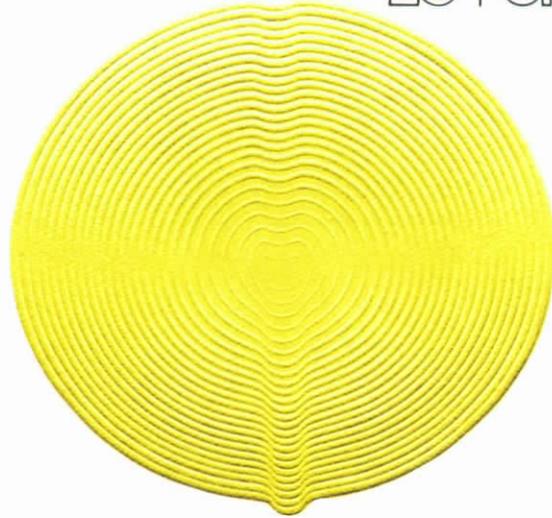


21世紀フォーラム **5**

20+ONE 会報





A POINT OF VIEW

關係

東松照明

有効なインフレ対策

金森久雄

1

・特集・日本人の視野

アメリカはどう変わりうるか

■対談■ 本間長世
松山幸雄

4

アジアの八〇年代危機と日本外交

齊藤志郎

12

太平洋と日本の将来

加藤秀俊

17

なぜ、いまアフリカか

米山俊直

22

難民キャンプで考えたこと

木元教子

28

和魂・洋才・日本人

■対談■ 堤 清二
ミール・J・バロ

32

フォーラムズフォーラム

私の近況

元気でいることはありがたい

加藤芳郎

六年目の初心・初陣です

天地総子

54

日本芸術大賞を受賞

榎 文彦

シンガポール・六月

齊藤志郎

【部会報告】

茅 誠司部会

加藤秀俊部会

松本重治部会

加藤芳郎部会
国際交流研究部会

56

●カラグラフィア

郷音き。

ダーク・ダックス

遠山 哲一

喜早 行哲

佐々木 宏

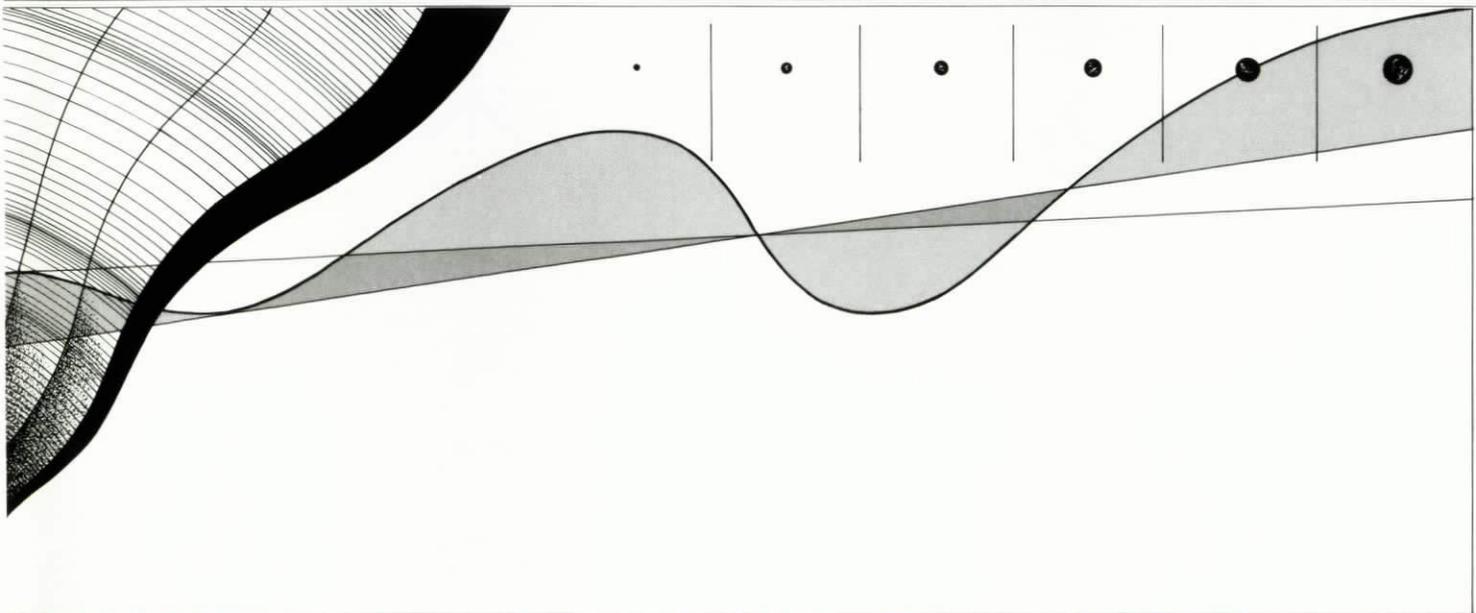
高見沢 宏

■国際交流研究部会発足

歌は国境を越えられるか

■座談会

47



● 民族性と国際性

■ 石井好子
司会
 服部克久

フォーラムズフォーラム
 国際交流研究部会
 メンバーズ・プロフィール

遠山一／喜早哲／佐々木行／高見沢宏／石井好子／
 小林道夫／佐賀和光／佐々木信也／イーデス・ハンソン／
 千宗室／堤清二／富田勲／服部克久／松原秀一／三村忠良／
 村上兵衛／山城祥二／吉川光／ミルトン・L・ラドミルビッチ

39

(ア・ポイント・オブ・ビュー) 関係

東松照明／森山大道／深瀬昌久

新しい交流を生みだすもの ● 農民意識の拡大 宮本常一

61

長江・治・理

中国現代化の実相

■ 鼎談 ■ 松本重治
 茅誠司
 下河辺淳

70

追悼 中山伊知郎先生

巨星墜ちて淋しさひとしお
 かけがえのない人を失う

大来佐武郎

独自の存在

滝田実
 堤清二

中山伊知郎先生に接して

中根千枝

天国で「二十世紀フォーラム」を

松山幸雄

ある秋の午後の口答試験

ロール・J・パロン

中山先生 ゴメンナサイ

笠井章弘

77

燃料アルコール

日本エネルギー経済研究所

66

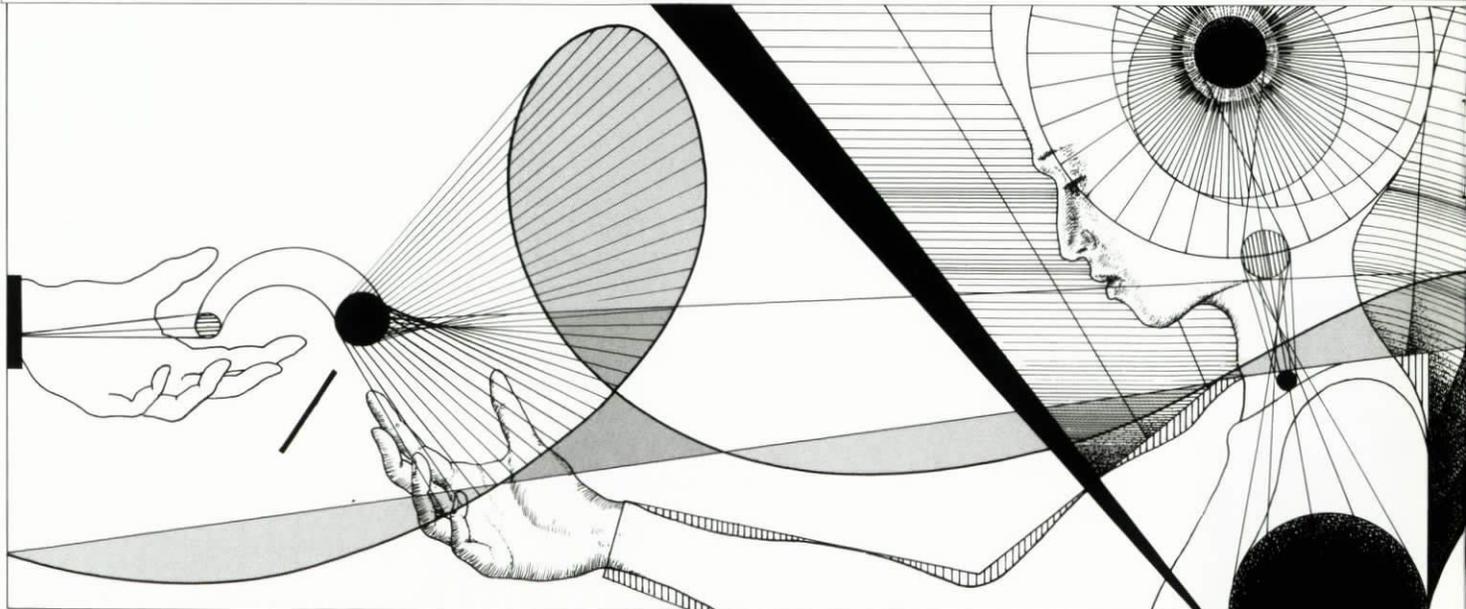
宮城県沖地震研究

政策科学研究所

68

21世紀フォーラム・部会メンバー

88



日本人の



視野

アメリカはどうか変わりうるか

ほんまながよ
本間長世

(東京大学教養学部教授・松本重治部会)

まつやまゆきお
松山幸雄

(朝日新聞論説委員兼編集委員・中山伊知郎部会)



松山幸雄氏



本間長世氏

● 「恋人」アメリカはいま

● **本間** 最近、いろいろな方面の方から、アメリカについての見当がつかなくなつた、ということを言われます。そういう方々の多くは、日米の貿易や経済の問題の最先端に立っているということがありますけれども、これまでは、アメリカ人

の人柄や価値観、アメリカの政治の動きなどについて、一応の見当をつけて、アメリカ人に対処していくことができたと思つていたんです。

ところが最近の一二年、とくにこの半年あたりで、アメリカ人が何を考え、今度何をしようとしているのか、どうもわからなくなってきた、ということを言われるわけです。これには、アメリカの

社会、政治、あるいは経済における変化ということが大きく影響していると思つてすけれど、同じようなことが、アメリカのなかでも言えるのかどうか。つまり、アメリカ人自身が、今日、混迷のなかにあるのかどうかということも、こちらから見て、ぜひ知りたいところではないかと思ひます。

私は、今年、三月の終わりから四月に

かけて、シアトルにだけ行ってきました
が、これはあまりにも忙しい学会で、ア
メリカを見てきたことにならない。ちょ
うど同じ頃とうかがっていますけれども、
松山さんがやはりアメリカにいらつしや
つて、講演をなさったり、いろいろなオ
ピニオン・リーダーの方とお話をなさつ
てこられたということですので、いちば
ん最近のところで、アメリカのオピニオ
ン・リーダー、あるいは有識層、とくに

国際問題に見識をもち、あるいは政策を
動かすような意見をもっておられる方々
の間で、かなり顕著な変化というものが
あるのかどうか、そのへんの感触からう
かがいたいと思います。

松山 私は、ケネディ時代に初めてアメ
リカへ行って以来、出たり入ったり、半
年に一度ぐらゐは行っていまして、最近
も、三週間ほど、いくつかの大学によば
れてまわってきたんですが、残念ながら
行くたびに、アメリカ文化というのは、
いよいよ下り坂だという、大変暗い印象
をもちます。私は、決して小気味よくア
メリカの悪口を言つて楽しむようなタイ
プではなくて、むしろ、昔の恋人がシワ
だらけになつてきたのを悲しむような感
じてしてね、非常に辛い。なにより目立
つのは、アメリカ人が自信をなくし過ぎ
ているということですね。

私は、アメリカがベトナムを教訓とし
て謙虚になること自体はいいと思うし、
それから、あまりにもオーバー・コミッ
トメントだったのが少し内向きになるの

も、歴史の振り子の現象で、ある程度は
やむを得ないとは思いますが、けれども、
あまりにも内向きになり過ぎて、あまり
にも視野が狭くなり、あまりにも自信が
失われていることに対して、多大の不安
を感じざるを得ない。

● ● インフレへの奇立ち

松山 米国人が自信をなくした一つの原
因として、インフレが大きいうてした
ね。日本やドイツは戦敗国だから、悪性イ
ンフレというのにはある意味では慣れてい
る面がありますけれども、アメリカは戦
勝国だから、インフレ処女なんですね。
自分の財産が一年にワツと目減りする、
足元で砂地が崩れるような、あの不安感、
苛立たしさというものは未経験なわけ
です。

ですから大学の先生なんかと会つてい
ても、私は、大統領選挙や日米関係の話
をしたのに、大学の給料は年に六パー
セントきり上がらないのに、一八パーセ
ントのインフレとのギャップをどうして
くれるんだというグチを、三丁四人の先
生から聞かされました。東大の先生が、
アメリカの新聞記者が来たときに、東大
の給料のグチをこぼすかどうか(笑)。
本間 いまおっしゃったなかには、非常
におもしろい点がたくさんあると思うん
です。

アメリカの政治史のなかでは、インフ

レというのはむしろ得になるというよう
な考え方の政治があつただけけれども、
インフレが非常に深刻になつたらどうな
るか、ということは、あまり考えないで
すんできた。それが、今日の社会の不安
定になつている。つまり、国際危機がこ
んなに深刻化しなければ、今年の選挙は、
当然インフレをめぐつて争われるはずだ
つたのだから、という気がするわけです
ね。だからそれは、確かにおっしゃると
おりじゃないかと思えますね。

● ● ● ● D I S S の文化

本間 先ほどの自信をなくし過ぎている
ということについて、松山さんは、ずつ
と昔からのアメリカの友人をたくさん持
つていらつしやるわけですけど、同じ
人が自信がなくなつているのですか。世
代の違いというのでしょうか。

松山 私は両方だと思えますね。自信が
なくなつてい理由としては、アメリカ
人はこの二〇年、私が知っている限りで
もいろいろな点で努力した、その努力が
報われないんですね。

たとえば人種問題についても、アメリ
カ人は、日本人なんかから考えれば、実
によくやったと思います。その結果どう
なつたかという点、部分的には、治安の
悪化や財政の悪化につながつたというケ
ースが非常に多い。

それから対外援助なんかについても、

アメリカはマーシャル・プラン以来、お金をたくさん外国に出しているわけです。本当に気前よく。その結果どうなったかといえば、反米主義者が非常にふえて、第三世界がみんなアメリカにタテつくようなことになった。それから日本や西独も、親米国ではあるけれど、経済面では逆にアメリカを圧迫するというような、跳ね返りとしてはマイナスがくる。

それから、アメリカのなかには、対ソ強硬論で、予防戦争というような意見まであったくらいのを、ともかく歴代政府は、平和共存を大きな前提として、ソ連との緊張緩和に一応努力してきた。しかし、その間にソ連の軍備がどんどん進んで、核バランスからいえば、はるかにアメリカは不利になってきた。

要するに、アメリカとしては、かなり努力はしてきたわけですね。それが全部裏目に出た。右を見ても左を見ても、筋の通らぬ割の合わないことばかりという欲求不満は、大変なものです。

私は、いまアメリカの文化はDISの文化だと言っているんです。ディスプレージャー、ディスコンテント、ディスサティスファクション、ディスイリュージョン、ディスアポイントメントと、みんなDIS。この間、ハンチントンというハーバードの先生が、アメリカはディステンパーにかかっている、と言っていた(笑)。ディステンパーというのは、犬の伝染病という意味と、不気嫌という意味と、社会不安というような意味がある。

要するに、DISになっているわけです。

●●●●● 凝集力を失ったアメリカ

本間 最初に落ち目ということ言われた。それから、やってきたことが裏目に出た。

私も、五〇年代、六〇年代あたりのアメリカというのは、自信もあつたし、一所懸命やつたと思いますが、それが、どこから落ち目になったか。アメリカの時代の終わりということをよく言われますが、イギリスの学者などは、七〇年代の前半あたりがそれではないかと言っている。

確か一〇年ぐらい前に、アンドルー・ハッカーという人が、「アメリカ時代の終り」という本を書いていますね。

あの本では、アメリカは、私的なところ……つまりいったん家の中へ入るとどうん豊かになっているけれども、一歩外へ出ると、さきほどのお話のように、治安が悪くなったりして、公共的なところがどんどん悪くなっている、というような趣旨のことが書いてあつた。

けれどもいまや、公共的だけじゃなくて、私的な、家庭の中もインフレに脅かされるとか、家庭基盤がだんだんバラバラになつていくとか、一種の各々の単位における凝集力みたいなものが、どうもアメリカの社会に欠けてきている。

政治の場合にも、政党という凝集力が

あつた。それが非常にゆるんで、シングル・イツシユール・ポリティックス(単一争点の政治)というふう言われるし、党の統制も効かないようなところもある。

家庭も、父親、母親、子供というようなアメリカの典型的な家庭像というのがあつて、幸せな家族がニコリ笑っているような広告があつたのに、それがいまや映画の「クレイマー・クレイマー」みたいになる。

それから国全体として見た場合も、アメリカ人、星条旗というものがあつて、それが世界のなかで全責任を担っているようなところがあつたのに、いまやアメリカ人は、実は一つの存在じゃないと言われるようになった。「メルティング・ポット(人種のつぼみ)」は、実はなかったんだというふうな、そういうバラバラな感じが、今出てきている。それが問題だろうと思うんです。

●●●●● 不毛の選択へのシラケ

松山 実際問題として、カーター大統領は、とくに対外政策については全く魅力がないというか、ヘマばかりやっている感じですが、それじゃあといって、カーターを叩いて代わりにリーガンが出てきたら、もつとひどくなるんじゃないかと、そういう意見の方が多いですよ。

そういう点で、今度の大統領選挙も、全く出口がないというか、救いのない不

せんと言ったのに、あのニクソン・シヨックから何のレッスンも得ていないじゃないか。

私は、カーターにアメリカをやらせておくことは、西側として非常に迷惑だという気がするんです。

●●●●●●●●●● 不幸を助長したブレインの質

本間 私も同感です。そこで、私が疑問に思うのは、民主党というのは、学者とか政策科学者とか、いわゆるシンクタンク的な人材がまわりにたくさんいて、政策の立案に関しては、さまざまな蓄積があるはずですが、それを、とくに対外政策において、カーター大統領は、なぜ生かさないのか、ということです。

私は、ブレインとか政策科学者とかいうものかなりの部分は、対外関係だと思っんです。アメリカのシンクタンク的な人々は、アメリカの国際関係について専門知識というものをつくり上げてきた。いくら大統領が外交の素人であり、ジョージアから出てきた人であっても、そういう人がついてるはずですよ。

ただ、どんな大統領でも、側近には自分に近い人をもつてくるんですね。それは権力者の場合やむを得ないんですね。最後まで心を許せる人というのが何人か欲しいというのは、あたりまえです。しかし、そのもう少し外側に、専門家というものがいて、側近たちを支えていかな

きやいけない。それが前にはできたのに、今度ではできないのはなぜか。ブレジンスキーみたいな人がいて、なぜできないのか。ブレジンスキーは、シンクタンク的なグループのなかの一員であるはずなんですよ。

松山 キツシンジャーとブレジンスキーを比べた場合に、両方とも敵の多い人ですけれど、敵は多くても、キツシンジャーの場合は、敵側も彼の大戦略については敬意を表する面がありました。

しかし、ブレジンスキーのやった人権外交は失敗したと思います。理念においてはケチをつけることはないんだけど、現実の外交政策としては、人権外交のためにずいぶん裏目に出たことが多かったんじゃないかという気がしますね。

そういう点じゃ、カーターがブレジンスキーを選んだことが不幸だった。

本間 そうですね。私も、ブレジンスキーの個人の問題は大きいと思います。しかし、今こうなってくると、制度の問題もあると思うんです。つまり、安全保障担当の大統領補佐官というあの地位ですね。ホワイトハウスの中にいて、大統領といちばん接触が深くなり得る地位だから、外交について未経験、素人の大統領と二人で外交をやってしまうということになると、国務長官に、非常に視野が広く、粘り強く外交をやろうというふうな、たとえばバンスみたいな人がいたとしても、だんだん疎外されていくんですね。補佐官は、いろいろな政策のための情

報と、それこそ、選択の幅みたくないものをまとめて大統領に出すはずですが、ブレジンスキーのところ、彼の世界観、彼の対外政策案というものにまとめすぎてしまっているんじゃないか、という気がするんですよ。

それからまた、ブレジンスキー自身の政治家としての資質のようなものとの関わりの問題として、アメリカ政府に、これからの国際社会をどういうふうにつくり直していくかについての長期的展望があるのかどうかということが、少しこちらにわからなくなってきたということがあるんじゃないでしょうか。つまり、同盟国とどうしようと思ってるのか、ソ連をどうしようと思ってるのかということが、よくわからないですね。

松山 場当たりになつてきたですね、やることです。アメリカの外交政策を見ると、コンティニューイティというものがなくなりすぎている。

日本のように保守永久政権で、役人というものが終身雇用、年功序列で、三〇年前と同じような流れに乗っている国と違って、アメリカという国は、民主党、共和党でがらがら代わる。それで、政府高官に、ハーバードやブルッキングスの人が入ってくる。世の中が上向きなときには、それが活力の源泉としてうまく機能するわけです。

ところが逆に、落ち目になってきますと、四六時中人事が代わっているというのは、今度裏目に出る。



要するに、ジョンソンやニクソンがあまりにもワシントンの玄人すぎて、それが民衆の反発を買った。その反動で、素人ていいやということとカーターを選んできました。その結果が、今度はこういう難しい時代を処理するには、力のない大統領だということと後悔しているわけですね。

●●●●●●●●●● 23番目に落ちた「宗教」

本間 これまでアメリカの自信喪失ということについてお話ししてきましたが、今日は、21世紀フォーラムの対談でもありますので、それでは、アメリカは自信を回復し得るか、回復し得るとすればいいかにしてか、というような、未来の展望に関わることを、もう少し考えてみてはどうかと思えます。

日本から見たアメリカというのは、確かに自信満々の国であった時代があった。第二次世界大戦後に、こちらの自信がなくなつたせいもあるでしょうけれども、しばらくの間、つまり、今日回顧してアメリカの時代といわれるような時期は、アメリカは、非常にりっぱな国のモデルだったということがあると思うんです。世界でいちばん政治的、経済的、軍事的に強かったし、さらに人類の歴史の進歩の方向を示しているようなところがあって、これはアメリカ人もそう思い、世界の多くの国々の人々もそういうふう



つてきた。それが、アメリカ自身が自信をなくしてきて、今日では、日本から見るとアメリカは頼りなくなつてきた、というふうなことが出てきている。

その場合に、アメリカはもう少ししっかりしてくれなくては困るというふうな議論も、すでに出てきているのではないかとと思うのですが、まず、アメリカの力の回復、自信の回復というものを、望ましいと思うかどうか、それから、望ましいとすれば、どういう方向なら望ましいかというようなことを、今後、日米の間

で、少し話していかなければならないと思ふんですね。

松山 それは非常に大事な問題ですね。二十一世紀にかけてアメリカがどうなるかということを考える場合、まず、過去のことを振り返る必要があると思います。

私は、アメリカの自由とか民主主義というのは、もともとは、メイフラワー号で来た宗教心の厚い人達がスタートしたものであって、歴史的に見ると、アメリカの自由社会のよさであるパーミッシブ、物分かりのよさとか、ジェネラス、寛大とか寛容だとかいうようなことは、自律の精神と背中合わせに発達してきたと解釈しているんです。

ところが世論調査によると、今のアメリカ社会を動かしている力で一番大きいものはホワイトハウスで、二番目が最高裁、三番目がマスコミで、それから労働組合、上院などがあって、宗教というのは三番目あたりなんです(笑)。要するに、宗教の方はガタンと落ちてしまつた。

しかし、自由の方だけは、依然として世界最高の自由で残っているわけですね。そうなりますと、自由社会の締めりとかけじめというものが抜けて、バンドのないうズボンようになって、自由というよりは、やや放縦になつたという感じがします。

その延長の問題として、労働の質が非常に悪くなっている。新車を買えば、一台のうち、二、三台は欠陥がある。今度の



感じだというんです。「ニューヨーク・タイムス」や「ワシントン・ポスト」というのは、確かに非常に質の高い新聞だけれども、日本で一般に読まれている新聞が、非常に密度の濃い記事であることは、確かなんですね。そういう点から言っても、アメリカの一般国民のレベルは、日本に比べてかなりズレているということは、認めざるを得ない。

外交家のジョージ・ケナンなどは、エリートをつくる教育をせよと言っている。彼は、アメリカの未来について非常に悲観的なんですね。しかしなんとかしたいということ、エリートに賭けるというわけでしょう。現状は、社会も文化も縦に流れているというので、彼は絶望しているんだけれど。

松山さんの場合は、エリートもさることながら、アメリカが全体の民度を高める努力をすれば、アメリカの回復につながるのではないかと、ということですね。

● ● ● 日米間で実りある対話を

松山 最近のように日米相互依存関係が深まると、相互によいところを撰取してゆくことが必要になります。

たとえば日本の年功序列、終身雇用だつて、悪い面ばかり言われてきたけれど、今、アメリカなどでは、逆にああいう安定性というものに一種の憧れをもっている。だから、両方の文化のよさを、ミッ

クスしていく必要がある。

その場合、民主主義、自由主義というものを積極的に繁栄させるにはどうしたらよいかという問題について、日米両国がもっと話し合う場をもつべきでしょう。

経済のトラブルを予防するために、「賢人会議」というものができましたが、あの賢人会議というものをもっと拡大して、経済だけではなく、民主主義生き残りの方策を協議するための賢人会議というのがあってもいいのではないかと思います。日本とアメリカの置かれている危機、民主主義の将来について、やや暗い下り坂ということを考えた場合、それに歯止めをかけ、むしろ上向きにするために、日米の知識人が集まって話をする必要がある。それが、私の結論なんですがね。

本間 私も同感です。日本の外交における日米関係の姿勢というものは、いま松山さんがおっしゃったことに尽きるんじゃないかと思えます。防衛問題とか、経済の質の問題とかが出てきますけれども、新聞を読んでいますと、日米間の争点とは、要求とそれに対する対処で、いかにして結論を先へ延ばすかといった話であつて、それを超えた話というのは、なかなかできないですね。一九八〇年代ということなら、あるいは二十一世紀に向けてということなら、何らかの意味で、それを超えた見通しをもたないといけない。そういう意味で、松山さんがおっしゃったことに尽きるところも思いますが、長

期的に、根本的な問題を考えていくための、用意といえるものをつくっていくことが必要だと思ふ。

そういう姿勢は、アメリカの方にも少しずつ出てきていると思うんです。つまり、こちらが何か言ったとき、自分の方が正しいというだけではなく、日本から学びたいという人もあるわけです。

松山 聞く耳を持ち出したですね。

本間 これは、五〇年代、六〇年代に比べて、大変な違いだと思います。

松山 昔は、教えてやろうというようなことでしたけれどね。

本間 そうです。対話つて、なかなかできなかつた。それが、いまや対話ができるということがあるんです。これは、是非伸ばさなきゃいかん。

そのためには、日本もアメリカも、歴史というものを振り返ることが大事だと思ふんですね。これは、自信を回復するひとつの道じやないかと思ふんです。これまでの歴史は、何の役にも立ってこなかつたというふうになっている限りは、将来にとつても自分は何の役にも立たないわけです。ですから、日米関係および世界の歴史においてアメリカが果たしてきた役割、日本が培ってきた文化などを振り返つたうえで、将来に向けて対話していくということが、どうしても必要になつていく。

松山 本間先生のような歴史の専門家が、二十一世紀を論ずる日本の賢人の代表になるべきなんでしょう。

アジアの八〇年代危機と日本外交

齊藤志郎

(日本経済新聞アジア総局長・茅誠司部会)



● はじめに

一九七〇年代末から八〇年代の初めに、アジア地域で起こった、そして起こりつつあるもろもろの危機的現象は、日本とアジア諸国とのかかわり合いに、国家政策のレベルでも、企業の経済進出のレベルあるいは一般の市民交流のレベルでも、深刻かつ重大な「転換」を迫っている。これまでのアジア諸国とのかかわり合いで日本は、もっぱら経済的利益の追及を主眼とし、どの国とも仲良く、どの国をも敵に回さないという、低姿勢の「商人外交」に徹してきた。しかし、インドシナ半島のカンボジア紛争、中央アジアのアフガニスタン、中東のイランなどで

る基本問題は何かといえは、経済利益中心主義の限界に突き当たって、これを克服するため、経済繁栄の前提となる安全保障の分野にまで責任を負うべきか否か、そして危機地帯とその周辺の安全保障に軍事的コミットメントまで負うことはできないとすれば、アジア諸国の政治的安定の基礎となる国民の福祉にいかにか与するか——の問題に集約できよう。

● ● 危機の外縁と内縁

アジアの八〇年代危機と一口でいっても、グローバルな国際政治、米国、ソ連あるいは中国をも含む大国間勢力均衡の次元で起こっている政治的、軍事的緊張

と、その潜在的脅威を受ける周辺地域のリージョナルな危機意識ないし国家単位の経済的、社会的緊張とを区別して考える必要があるように思われる。いわば、危機の外縁と内縁とは、緊張の性質が異なり、それぞれに対する日本外交のアプローチも当然違ってこなければならぬからである。

危機の外縁とは、ユーラシア大陸をインドシナ半島から中央アジアのヒンズークシ山脈、カイバル峠を経てパキスタン、そしてイラン高原まで横断する地域である。危機の内縁は、紛争のカンボジアと国境を接するタイをはじめ、ベトナム難民の流出に悩まされるASEAN(東南アジア諸国連合)、インド、パキスタンなど南西アジア、そしてペルシャ(アラビア)湾岸諸国を含む地域である。

危機の外縁、特に中央アジアのアフガニスタンとその周辺は、歴史的にみても巨大な勢力がヘゲモニー(覇権)争いを

演じた地域で、十九世紀にはインドを支配した大英帝国と帝政ロシアが「グレイト・ゲーム」を展開して倦むことがなかった。大英帝国はその最盛期の威勢もつてしても、カイバル峠を越えて回教国アフガニスタンに侵攻することはついにできなかったが、帝政ロシアもこの地を支配することはできなかった。それが今日、クレムリンはツアアのできなかったことを一挙に成し遂げ、その「版図」をインド亜大陸からペルシヤ湾を臨む戦略拠点にまで広げること成功したのである。

昨七九年のクリスマス明けを期したソ連軍のアフガニスタンへの電撃的侵入は、周辺諸国に駐在するアメリカをはじめ西側外交情報担当部の心胆を寒からしめるものであった、といわれる。イラン危機の発生（七九年初）以来、隣国アフガニスタンへのソ連の軍事介入を予測する情報はかなり確度の高いものとされてきたが、その時期がかくも「早く来たこと」に西側外交筋は衝撃を受けたのであった。それはともかく、ソ連のアフガニスタン支配は八〇年代、二十世紀の残された期間のアジアにおける大国間勢力均衡に決定的な一打を打ち込み、グレート・ゲーム二十世紀版の開幕を告げるものである。

ソ連の膨張主義を封じ込めるのには、アメリカ一国の手に負えるものでないことはいうまでもない。アメリカはパキスタンに軍事的にテコ入れする一方、NATO（北大西洋条約機構）の協力を得て、

ペルシヤ湾、そしてサウジアラビア、ホルムス海峡のオマーン方面に、英海軍力の「回帰」を促すとともに、フランスにはアフガニスタンの角のジブチ軍事基地の強化を求めている。ペルシヤ湾からインド洋マラッカ海峡から南支那海そして極東に至るシー・レーンの防衛には西独の空軍力、日本の海上防備の責任分担が求められている。

こうした西側の共同防衛の努力なくして、危機の内縁の中東石油供給源、東南アジアの安全保障はありえず、カンボジア国境からタイ、ASEANに揺さぶりをかけるベトナム勢力と呼応するソ連膨張主義によって、危機の内縁は逆に封じ込められることになりかねない。

米ソの新冷戦に巻き込まれることを恐れるASEAN諸国は、ベトナムの脅威を幾分でも和らげるため、非同盟・中立外交によってハノイとも対話の道を求めている。また、インドは親ソ的ともいわれるガンジー政権がソ連のアフガニスタン侵攻にもかかわらず、これを真つ向から非難することなく、ソ連覇権主義に對決を挑む中国とは対照的な動きをみせている。

八〇年代アジア危機と大国間グレート・ゲームのカギを握るのはインドであり、ASEAN諸国であるといえる。それだけに日本を含む西側の外交戦略は危機の外縁への対応だけでなく、内縁の地域に對する働きかけも極めて大きなウエイトを占めるものと考えなくてはならない。

● ● ● 点と線の安保外交

インドシナ危機、アフガニスタン危機そしてイラン危機に對応する昨年来の日本外交の展開に、アジア諸国がこれまでにない大きな関心を向けていることは事実である。

七九年六月のインドネシア・バリ島でのASEAN外相会議前後の「難民問題」、カンボジア政治解決をめぐる日本の積極的な行動つまり難民援助の大幅増額、政治解決のための国際会議提案など、それなりの関心を集めた。その反面、ベトナムに對する経済協力の継続が停止かをめぐる日本政府の不鮮明な態度が少なからぬ疑惑を持たれたことは否定できない。

アフガニスタン危機では、米ソ超大国それに中国が中央アジア一円の勢力均衡を賭しての「新冷戦」という事態を迎え、日本が直接関与すべき余地はないにしても、アメリカの要請に応え、ソ連膨張主義封じ込めのための防衛力増強の方向に日本が傾いたことに、アジア諸国の主要な関心が注がれている。アフガニスタンへのソ連軍侵入はパキスタンからイランをおびやかす、ペルシヤ湾岸のアラブ産油国までの征覇の野望を秘めたものであり、これはベトナムのカムラン湾に恒久的海軍基地をつくり、南支那海からマラッカ海峡の制海権を握ろうとするソ連の世界戦略と連動するもの、との見地からすれば、中東石油あるいは東南アジアの

天然資源に依存する日本がその生命線ともいべきシー・レーン（海上航路）の安全保障に無関心でいられるはずはないというのである。

イラン危機については、アメリカの人的質釈放要求と経済制裁を支持し、これに同調して貿易停止や原油価格の引き上げ拒否などの「強硬措置」を日本がとったことを「勇気ある決断」としてアジア諸国が受けとめていることは確かである。人質問題をめぐる米・イラン紛争はその発生原因からして、日本あるいは西欧の全く関知しない性質のものである。にもかかわらず、経済制裁への同調を迫られたことは、経済中心主義の日本外交のこれまで経験したことのない問題である。殊に、わが国最大の海外プロジェクトの一つである石油化学プラント建設がまさに累卵の危機にさらされる状況のもとで、アメリカに義理を果たす一方、産油国イランとの関係も保たなくてはならない、という深刻なジレンマに陥った。アジア諸国とりわけASEANの国々は日本のかかるジレンマに十分理解を示しつつ、対米追随という側面よりは米欧日共同戦線の面を評価しているようだ。

危機の外縁の緊張に対応する一連の日本外交は総じて、経済や利益がある程度犠牲にしても、安全保障の確保に「必分のコスト」を支払う方向に転換しつつあるといえる。その安全保障確保のための具体的な外交手段としては、やはり軍事コミットメントに代わる援助増額ない

し緊張援助の形をとらざるをえない。アフガニスタン危機への対応としては、パキスタンへの一億二千八百万ドルにのぼる緊急援助、カンボジアと国境を接するタイ東北部への開発援助の強化、あるいはペルシヤ湾ホルムズ海峡の安全を期すべくオマーンなどへの援助といった形をとっている。これら特定地域への経済援助は明らかに安全保障に結びつけられたもので、従来の一般的援助政策とは違った性格を帯びたものである。

日本の「安保外交」はまだそれほど鮮明な印象をアジア諸国に与えているわけではない。たとえば、ベトナム難民の救済援助にしても、援助額が大きいわりには、現地の評価はあまり高くないのである。ベトナムに対する経済協力をめぐる「鮮明な態度」が難民救済援助の評価にもかなりマイナスの影を落としたことは否定できない。局地的な経済援助を安全保障に結びつけるにしても、それは現状において「点と線の安保外交」の域を出ず、本格的な安全保障政策を支えるのには、

成熟日本の正念場

“A Testing Ground of Japan's Maturity”
Business Times, Singapore, 8 May, 1980.

日本の投資家たちは、利益追及のみに非常にとらわれているので、受け入れ国の政府と国民の向上心を見過している、との感情がASEAN（東南アジア諸国連合）地域で一般化している。

ASEAN諸国の人々は、日本の投資がこの地域の工業化に重要な寄与をしていることを認めてはいるが、いまや投資家の（現地との）かわり合いの性格を変えるべきときだと感じている。一九六〇年代の産業開発の初期においては、ほとんどすべてのASEAN諸国は経済開発のための民間資本をひどく必要とし、しかもほぼ無条件でそれを受け入れてきたので、外国投資を選び好みする余裕はなかった。

マハティール・マレーシア副首相が労働集約産業の誘致をいましばらくは失業

カブル・ジャシン
マレーシア・ビジネス
タイムズ評論員

を減らすために必要とすると述べたように、ASEAN諸国政府は依然外国投資家の役割を尊重している。しかし、時は変わり、これに伴い外国投資の構造——特に枯渇する資源依存産業への投資——にも転換が求められている。多くの日本の企業経営者と政府高官はASEANの変化を認めるのにやぶさかではないが、彼らは同時に、日本の企業がこれらの変化を受け入れるのが一般に遅い点を指摘する。

一九七四年の日本の経済的支配に対するインドネシアとタイでの田中首相訪問時の大衆抗議は、これらの二国での日本企業の急速な拡大が大衆の反発を招いた事実を浮かび上がらせた。しかし、この警告に対して日本人は積極的にはほとんど対応していない。たとえば、日本の（現

い伸びである。石油危機以後の世界経済環境の悪化にもかかわらず、日本の対ASEAN投資がかくも急速に拡大したことは、他に例を見ない「突出現象」といわなくてはなるまい。さらに、シンガポール、香港を中心とするアジア・ダラー市場の規模の拡大に伴い、日本の国際金融に占める同市場のウエートはニューヨークのそれに匹敵し、ヨーロッパ市場をゆうに上回っている事実を見逃すことはできない。

貿易、投資の分野だけでなく、工業化の分野での技術移転、ハードの機械設備プラント建設だけでなく、ソフトのノウハウの移転が大きな課題となりつつある。ここまてくると、従来の輸出市場・原料供給源としての東南アジアと日本の、いわば「面の関係」を越えてさらに製造工業そのものの相互補完地域としての根をつちかう「立体の関係」にまで進みつつあるとの認識が不可欠になってくる。

最近、ASEANと日本の今後の関係を論じた注目すべき論調（一四―一五頁の下段記事参照）は、日本はすでに確立されたASEANとの経済的基盤に立って、「商業および工業の能力を社会的、政治的コミットメントによって補う必要がある」……「ASEAN諸国の政府と国民は産業開発を国家の総合的・社会的・政治的安定と福祉に結びつける必要のあることをますます痛感するようになっており、それは産業が利益追及のためにのみ存在するのではなく、国家と国民の福祉に最

大限に寄与するために存在するものであることを意味している」と述べている。日本が今後ともつばら経済的考慮に基づいて振る舞うことは可能であろう。しかし、それは長い目でみて日本とASEANの関係を反生産的なものにする恐れがある。

この論調を敷衍すれば、東南アジアあるいはインド亜大陸、中東まで含めた地域への日本の経済進出は貿易、原料調達、現地企業との合弁までの広範な分野で、今後もこれを継続するためには、単なるプロフィット（利益）を追及するだけでなく、現地企業の企業主体、労働者、被雇用者の経済的、社会的福祉の向上にまで責任を負わなくてはならないのである。

第一次商品、原料生産国としてのアジア諸国の間に、西欧および日本の先進工業国に対する資源ナショナリズムが台頭してすでに久しい。しかし、これら諸国が単なる資源供給国としての地位から製造工業国への地位向上に動き出すにつれて、外国投資と現地企業、現地労働者との関係についても、一種のナショナリズムの気運が芽ばえ、現地企業の所有権、経営権、収益と賃金の分配、社会保障費の負担まで含めて、より対等の関係を要求するに至っているのである。日本に對して、「商業および工業の能力を社会的、政治的コミットメントによって補うよう」求めているのはこのことなのである。

これまで資本と技術の導入による工業化の過程で、利益追及の合理主義に走るあまりにとかく無視がちだった、現地

資本のパートナーとして労働者、国民全般の「アスピレーション（向上心）」を十分受けとめ、より対等の立場で事業活動を営むシステムをつくり上げることが、進出企業としての基盤を一層強固にし、現地に根をおろす条件を備えることになる。このことから考えれば、アジア諸国が求める「日本の責任」を果たすことは、要するに進出企業の「現地化」を通じて共存の道を開くことになるのである。

外国の投資事業に、現地国の福祉に貢献する社会的、政治的責任まで求めるのは、牽強附会な議論のようにも思われる。国民の福祉はその国の政府の責任であって、外から口出しすべきものではないはずである。だが、巨額の外国投資あるいは経済援助にしても、アジア諸国の社会変動を引き起こす大きな誘因となっており、伝統社会の破壊と近代化、現代化に伴う社会的緊張要因となっていることは事実である。しかも、西欧的近代技術の導入による、目に見える部分だけの近代化はアジアの固有文化、伝統的精神を荒廃させ、その反動としてイランやアフガニスタンに見られるような政治、経済危機を引き起こすことになりかねない。真の近代化はそれぞれの伝統的価値を破壊することなく、異質文化との接触を通じてこれを革新することであるとすれば、アジアの近代化への日本の貢献は各国の文化、伝統、生活様式をして自国との価値観の相異を認識し、これを尊重することから始めなくてはならないであろう。

太平洋と日本の将来

加藤秀俊

(学習院大学教授・加藤秀俊部会)



● 過渡期にさしかかった楽園

ここ三年ほど、思うところあって、太平洋のあちこちの島を歩くことが多かった。げんに、いまもこの原稿は、クック諸島の中心になっているラロトンガ島のホテルの薄暗い電灯のもとで書いている。ラロトンガ、などといっても、多くの人にとってはその所在がはつきりしないだろう。念のためにいっておくと、この島は南緯二〇度、西経一六〇度あたりのところであり、ここから北東に七〇〇キロほどのところにはタヒチがあり北西に

千キロあまりを飛ばせばサモアに達する。ここからまっすぐ南には、もう島はひとつもない。数千キロ南は、南極である。この島は、えらく小さい。一周道路があるけれども、車でひとまわりして四分ほど。キロ数というと五〇キロあまりであろうか。人口は八千人。それでもちやんとした飛行場があり、ニュー・ジーランド、フィジー、ホノルルなどのあいだにジェット旅客機が週に何便か飛んでいる。産業、といっても、一次産業、つまりココナッツやバナナのような農産物があるだけだ。行政的にはニュー・ジ

ーランド領だから、他の島にくらべると経済はめぐまれているけれども、住民の少なからぬ部分は、自給自足的である。裏庭でバナナやパンの実をとり、海辺で小魚をつかまえる。ときにはブタをつぶす。けつしてゆたかとはいえないけれども、飢える心配はない。現金が必要なら、そんなふうにして手にいれたものを自由に市場にいつて売ったらよい。わたしは、昨日、町（といっても商店が二〇軒ほどあるだけだが）に出かけ、空腹をおぼえたので市場に入り、そこにいたおぼさんからバナナを買った。一本が五セント（二〇円）。三本食べたなら、おなかがいっぱいになった。

かないのである。

これとまったくおなじ情景をわたしはこれまでたくさん島の島でみえた。パラオもそうだった。ニュー・ヘブリデスもそうだった。そして、ソロモンでも事態はおなじであった。それまで、自然とともに生きていた人びとが、突如として工業文明の産物と現金経済にまきこまれてしまったのである。

そればかりではない。かつて、これらの島々では、いくつかの部族が、酋長のもっとで伝統的な社会生活をいとなんでいた。ところが欧米の列強があたらしい政治形態を持ちこんだ。酋長会議のかわりに、選挙制度による議会が形成された。よきにつけあしきにつけ、いま太平洋諸島は大きな過渡期にさしかかっているのである。

もちろん、どんなかたちで島々が変貌してゆくか、についてはそれぞれの島の特殊事情というものがある。ニュー・カレドニアのように、依然としてフランスの植民地であることを余儀なくさせられている島もあるし、ソロモンやパプア・ニューギニアのように、とにかく独立を達成したところもある。さらにミクロネシアの多くの島々のように、一九八一年を期して民族自決権を行使する地域もある。こうした過渡期の設計は、かならずしもうまくいっているとはいえない。いや、正直なところ、太平洋のさまざまな島は、それぞれの将来について、その進路を模索中なのである。一見、楽園とみ

える南太平洋も、大きな苦悩をかかえているのだ。

● ● 列強がシノギを削っている

だが、これらの島々にとって、たいへんに有利な状況が展開してきた。それは二〇〇カイリ水域という、あらたな領有権が国際的にみとめられるようになった、という事実である。島はたしかに小さいが、その島を中心に半径二〇〇カイリの円を描いてみると、それはべらぼうに大きなものになるだろう。島嶼国家のもつ「領海」は、しばしばその「領土」の何万倍、いや何十万倍ものひろさになってゆくのだ。

じつさい、かつてギルバート諸島と呼ばれた島々がツバル共和国、またエリス諸島がキリバチ共和国としてそれぞれに独立したのも、もっぱら、こうして独立することによっておどろくべきひろさの海の領有を宣言できるからなのであった。キリバチ共和国のばあいなどは、中部太平洋を東西に横切るライン諸島をもふくめているから、その領海は何百万平方キロになるかわからないほどの広水域になつてしまうのである。

領海がひろいと、どういう利点があるのか。いうまでもなく、漁業権のおよぶ範囲がひろがる。とにかく、海には魚をはじめ、さまざまな水産資源がゆたかにふくまれている。領海ということは、そ

この島にはテレビはもとよりのこと、日刊新聞もない。二週間にいちど、六ペーじほどのかわいらしい新聞が発行されているだけである。ラジオ局はある。しかし、島の人たちは、ラジオもきくが、じぶんたちで歌をうたったり、おしゃべりをしたりしているほうがたのしいらしい。椰子の実を半分に分けて、そこにベニヤ板で器用に柄をつけたウクレレをひき、丸太の中をくりぬいたドラムをたたいて、たのしい音楽をかなでる。こういうところにいると、イラン情勢がどうであるのか、国際為替相場がどうなっているのか、などはさっぱりわからなくなってしまうし、だいたい、そんなことは、いっこうに気にならなくなるのである。だから、ある意味で、こういう島は、せちがらい世界から完全に切りはなされた楽園とすべきであらう。

しかし、島の生活をじつと眺めてみると、ここにも、文明というものがひしひしと押しよせていることがわかる。たしかに、じぶんたちの生命をささえる、というだけであれば、自給自足でやってゆける。だが、ラジオ放送があれば、受信機が欲しくなるだろう。むかしは、樹皮を根気よくたたきつぶしてタパという布をつくっていたが、繊維品が店頭にならぶようになれば、それが欲しくなる。バイクだの自動車だのといった便利な輸送手段が導入されれば、これも欲しい。とすると、どうしても現金が必要だ。あんまり、のん気にかまえているわけにはゆ

の範囲の水産資源をことごとく領有している、ということだ。ついこのあいだまで、「公海」と呼ばれていた水面と、その下に存在する水産資源が二〇〇カイリ水域の設定によって、それぞれの島の所有物になったのである。いいかえれば、貧乏な島国が、突如としてゆたかな資源国に変貌したのであった。ツバルやキリバチの島々は、ほとんどひとつの例外もなくサンゴの隆起による環礁であって、地上には、資源と呼びうるものは皆無にひしい。それが独立にふみ切ったのは、水産資源国としてやってゆけそうだと、という見当がついたからである。

とはいうものの、いくら資源があっても、それを獲得する技術はこれらの島の人びとにはない。魚をとる高度の技術、それは先進漁業国、つまり、日本やアメリカだけがもっている。魚群探知器、レーダー、そしてときにはヘリコプターまでも動員して、これら漁業国の漁船団は太平洋の海水域で能率よく魚をとる。だから、結局のところ、太平洋の島嶼国家は、漁業権というものを先進漁業国に貸して、その収入で財政をまかなってゆく、という政策をとらざるをえない。われわれは、サケ、マス漁についての日ソ間の漁業交渉については、新聞などをつうじてよく知っているけれども、日本と太平洋のさまざまな島の政府とのあいだでも、たえず、漁業権をめぐる交渉がすすめられている。さいきんでは、日米のほか、ソ連、韓国、台湾などの漁船も

進出しはじめてきた。いわば、漁業を中心にした国際経済戦争がいま、太平洋でくりひろげられているのである。

じつさい、経済戦争、ということでは、このさい、けつして大げさではない。いわゆる先進諸国は、それぞれのしかたで太平洋に進出し、はつきりいつて、利権獲得のためのはげしい競争をつづけている。フランスは、ニッケル鉱山をもつニュー・カレドニア、および太平洋艦隊の基地になっているタヒチを絶対手離さうとはしない。イギリス、オーストラリア、ニュー・ジブラント、という三つのアングロサクソン諸国は、多少のニュアンスのちがいはあるにせよ、フィジー、サモア、トンガ、パプア・ニューギニア、などをゆるやかにその支配下に置くことをかんがえつづけているようである。いっぽうソ連は、トンガやクック諸島に接近しはじめているし、中国はいちはやく、フィジーと大使の交換をはじめた。アメリカは、といえば、ミクロネシアの国連委任統治領を、こんごも、なんらかのかたちでつなぎとめておくための最大の努力をかたむけているかのように見えるし、アメリカ領サモアを手離すこともないだろう。列強は、太平洋でシノギを削っているのである。

じつさい、たとえば英仏共同統治というふしぎな政治形態をもつニュー・ヘブリデスでは、イギリスがわは独立運動を力づけ、フランスは、植民地体制をいよいよ強化するうごきをみせているようだ。

それぞれの島の人びとの利害関係が複雑なうえに、欧米列強の思惑もからまりあっているから、どこの島に行つてみても、政治というものが煮えだぎっている。わたしなどのみるところでは、いま太平洋は急速にその再編成期にさしかかっているらしいのである。

それにくわえて、これまで比較的のんびりと暮らしてきた島の人たちも、じぶんたちがいわゆる「発展途上国」にぞくしているということに気がつきはじめた。アフリカやキューバなどの連帯をかんがえるようになった太平洋諸島の若ものたちも、あちこちで姿をあらわしはじめている。

●●● 二十一世紀への重大な布石

さて、こういう見取図のうえに立つて、日本がいつたいなにをしているのか、また、なにをしようとしているのか、をかんがえてみると、いささか心許ない気がする。もちろん、「太平洋時代」といったようなことばはしよつちゅう耳にするし、大平首相は、「太平洋圏構想」をその政策スローガンのひとつにしていらつしやる。しかし、ほんとうの太平洋のすがたをちやんと見ている人がはたして日本にいるのかどうか、わたしには疑わしくおもえてしかたがない。

じつ、大平首相は、その「太平洋圏」に関する構想をしめすために、さきごろ



オーストラリア、ニュー・ジーランドを訪問させたけれども、どうやら、それは南太平洋のこれらふたつの大国との経済関係を強化するのが目的であったらしく、ミクロネシア、メラネシア、そしてポリネシア、とひろがりをもった小さな島嶼国家にはあんまり興味をお持ちでなかったようである。ニュー・ジーランドのムルドーン首相が、大平首相に、こうした小さな島々を忘れないように、と釘をさしたのも、わたしにいわせれば当然の批判であった。

もとより、これらの島嶼国家をいちいち訪問していたら、一年あつても足りないだろう。べつだん、日本の総理にサモアのソロモンだを訪ねていただきたい、などといっているわけではない。だが、一般的にいつて、日本は太平洋圏の一員でありながら、本気で太平洋をみる事があまりにすくないのである。たとえば、ヌメアにその本部をもつSPC(南太平洋機構)にも日本は正式に参加していないし、ポート・モレスビーにあるパプア・ニューギニア大学、スバにある南太平洋大学、といったあたらしい大学ともかわりをもつことをしていない。太平洋の島々についてのイメージは、せいぜい、パック旅行や化粧品品の広告のポスターといったいどのものであつて、その認識は、きわめて浅薄なのである。

無関心なら無関心であつてよからう。しかし、現実には、日本はすでに太平洋諸国と抜きさしならぬ関係をとります

でしまつているのだ。まず第一に、漁業である。政府間協定によるものもあるし、個別契約によるものもあるけれど、とにかく、どこの島に行つても、近くに日本漁船が出没している。ニュー・ジーランドの南島の沖合には、イカ釣船が夜光虫のように灯火をともして操業しているし、ソロモンでは、ソロモン政府と大洋漁業との合併会社たるソロモン大洋のカツオ釣船が年中無休で活動している。クック諸島のなかのアイツタキという小島でも、沖合に日本漁船をみる事がしばしばだ、という話をきいたし、ニュー・ジーランド北端の小さな漁村を訪ねたら、そこでも日本の漁業会社が試験的に定置網を敷設していることを教えられた。まさしく水産日本である。太平洋での漁業国家ナンバー・ワンは、まぎれもなく日本なのだ。そのことを知るなら、南太平洋についてわれわれが無関心であつていはずがない。

第二に、どこの島に行つても気づくことだけれども、島々にあふれる工業製品はことごとく日本製なのだ。このラロトンガで走っている何百台もの自動車およびバイクは、一台の例外もなく日本製である。ラジオ、テープレコーダーなどもまた日本製。わたしは、島あるきのたびに、車を借りるけれども、これが申しあげたように日本の車なのである。それは、日本の工業製品の品質がよく、世界的に確乎たる定評を獲得していることの証左であつて、ご同慶のいたり、という

べきなのであるけれども、ここにも問題がないわけではない。というのは、これらの製品にたいするサービステルがとのつていないからである。

島は海にかこまれているから、塩をふくんだ風が容赦なく吹きつける。自動車はサビだらけになるし、トランジスタなどもポロポロになる。それはしかたのないことだけれども、それだけに、修理や調整が要求される。ところが、そのサービスがじゅうぶんでないのだ。もちろん、それぞれのメーカーがわずか人口一万人たらずの島に常駐のサービステルを配置していたりしたら、企業の採算はとれないだろう。だが、もしも、巡回サービスといった方法で、たとえば一月に一回ずつでも優秀な技術者がこれらの島をまわってくれたら、島の人たちは、ずいぶん助かるだろう、とおもう。さらにそれは、ほんとうの意味での技術援助にもつながってゆくにちがいない。

それがないから、赤サビだらけの自動車が海辺につみあげられる。工業製品を輸出して、儲ればいい、というだけではこまる。そして、それもこれもふくめて、わたしは、日本が太平洋にとりくむ姿勢が気になってしかたがない。いまのうちに、われわれは、ほんとうの太平洋意識を身につけておくべきなのである。それは日本の二十一世紀にとっての重大な布石なのだ。太平洋に眼をつぶって日本の将来はありえない——わたしはそう信じている。

なぜ、いまアフリカか

よね やま とし なお
米山俊直

(京都大学教養学部助教授・加藤秀俊部会)



表題は、編集者のつけたものである。このテーマで、原稿をという注文である。そのきっかけは、二つあるようだ。

ひとつは、この「会報」が特集で、国際化の問題をとりあげようと企画していること。「日本に何ができるか、あるいは日本人の国際的視野といったことを考えてみたい」と編集者は書いてきた。

もうひとつは、私が以前にこの「会報」の第四号で、「八〇年代・私の三つの関心」というアンケートにこたえて、「アフリカ」をあげていたためらしい。「よくも悪くもテーマ的」また「人類の希望であり救いである」とお述べになっておられますが、アフリカが、世界や日本にとって、一つの鏡の役割を果たすのではないかとというようなことを考えます」といい、私の舌たらずの理由をあらためて開陳せよ、というわけである。

ほかならぬアフリカのことだし、チャ

ーミングなお申し出だと思って安うけあいをしてしまったが、いささか後悔している。

アフリカについて、あるいはアフリカと日本の関わりについて、言いたいことはいっぱいある。ところが、いざ書くとなると、その気持がいちどにあふれてきて、收拾がつかなくなりそうなのだ。

とめどもない話になってしまっは、しょうがない。とはいえ、いま充分なデータをふまえた話をまとめる余裕がない。事を分けて、順序だてて述べてみたいのだが、気持ばかり先にたつて、もどかしいうえに心もとない。ともかく、個人的なことから話をはじめることしよう。

● ウィンター教授と出会って

私のアフリカについての関心は、アメ

リカに留学中に生れている。私は一九五六年にアメリカのイリノイ大学の調査助手ということで渡米したのだが、私の参加した「文化変化の国際比較」のプロジェクトには、E・H・ウィンター、R・マナノズ、S・ダイアモンド、T・バイデルマンなどの、アフリカ研究者が加わっていた。私はウィンター教授から社会人類学とアフリカ研究の手ほどきを受けたといつてよい。毎晩のように、同輩のバイデルマンと一緒にウィンター家を襲っては、酒——オッペンハイマーというラインワインの白を三人とも気に入って、カートンで買いこんでいた——を飲みながら勉強した。

私自身の学問は農村社会学ないし農民史への関心から出発して、世界各地の農民へとその範囲を広げ、一国社会学の狭さから文化人類学へと視野を移していたので、人類学への移行はそれほど抵

抗はなく、アフリカは農耕民研究の原点としてやってみたい、と思うようになったのである。

ウインターはハーバードから英国にわたり、さらに東アフリカのウガンダ西部のアンバ族の調査を終えて新しいモノグラフを世に問うたばかりの、文学通り新進気鋭のアフリカ研究者であった。私の社会人類学、アフリカ研究への開眼は、ウインター先生によって触発された、といつてもいいすぎではない。

● ● 英国アフリカ学の収獲の秋

考えてみるとその頃は、英国風の社会人類学が、およそ四半世紀にわたる展開の結果として、ひとつの収獲の秋をむかえていたといえるのかもしれない。それは、すぐあとに植民地の喪失にともなう凋落（といつて悪ければ変身）への道をたどる直前の時でもあったのだが、かつての英国の栄光は、アフリカでの人類学的研究成果にも豊饒な結果をみせていた。その見本はエバンズ・プリチャードの民族誌の名作『ヌエル族』（一九四〇）をはじめとする三部作であろう（日本では『ヌア族』という訳がついているが、これはウガンダをユガンダと呼ぶのにひとしい）。この仕事を代表とするたぐさんの民族誌が、アフリカ各地の諸部族についてあいついで刊行されている。英国からはその旧植民地を中心に民族誌モノグラフ

を残したが、おなじような成果はフランスで旧仏領について生れている。このあたりが、ヨーロッパ人によるアフリカ研究のひとつの限界をつくったといつてもいかもしれない。

こうした部族・民族別のモノグラフとともに、アフリカの諸部族の比較研究成果も、つぎつぎに生れている。エバンズ・プリチャードとフォーティスの共編である『アフリカの伝統的政治体系』（一九四〇）や、ラドクリフ・ブラウンとフォードの共編である『アフリカの親族と婚姻の体系』（一九五〇）などがその例である。ウインターもミドルトンと共に『東アフリカの呪術と邪術』（一九六三）という論文集を編んでいるが、このような集大成が、つぎつぎと出版されている。

私が講義をきき、演習をのぞき、一緒に飲みあかした欧米のアフリカニストたちは、この戦後期の豊饒さのなかにあつたといつてよい。この時期のアメリカの大学は、この英国風の各派を受入れる余裕をもっていて、私などはその時代にめぐりあつたのだとみてよい。アメリカ独自のアフリカ研究は、G・P・マードックの『アフリカ——諸民族とその文化史』（一九五九）の登場あたりからであるが、この書物もなお、ヨーロッパのみならず豊かな産物の棚卸し作業のようなものであった。

私のアフリカについての知識は、このようなかたちでまず私に近づいてきた。多くの人は、アフリカの自然や動物にロ

マンを感じ、そこからアフリカについて考えはじめたというし、またある人たちは、差別問題や南北問題のような文脈からアフリカに関心を抱きはじめたという。私の場合は、その点すこしちがうのである。

● ● ● 十年後の初体験

私がアメリカにいる頃から、日本でもアフリカへの学問的関心がすこしずつ育ちはじめていた。それには（私に関係ある分野でいえば）二つの動きがあつたといえそうである。ひとつは、京都を中心とする人たち。今西錦司、伊谷純一郎、河合雅雄の各氏らが、ニホンザルの研究をふまえ、その延長線上にアフリカ類人猿を目標とする調査計画がはじまる。一九五八年からの予備調査段階を経て、コング動乱もあつてゴリラからチンパンジーを対象を移して、本格的な調査が一九六一年からはじまる。現地調査には、人類学や医学班も加わり、富川盛道、梅棹忠夫、和崎洋一の各氏などが参加する。

いわば現地調査派。もうひとつは、東京で泉靖一氏を中心とする人たちが、欧米のアフリカ研究成果の学習の仕事をすすめている。アジア経済研究所の委託研究のかたちで、村武精一、高橋統一、山口昌男、川田順造、鈴木満男、長島信弘、阿部年晴、大森元吉の各氏である。その結果は、『ニグロ・アフリカの伝統的社会

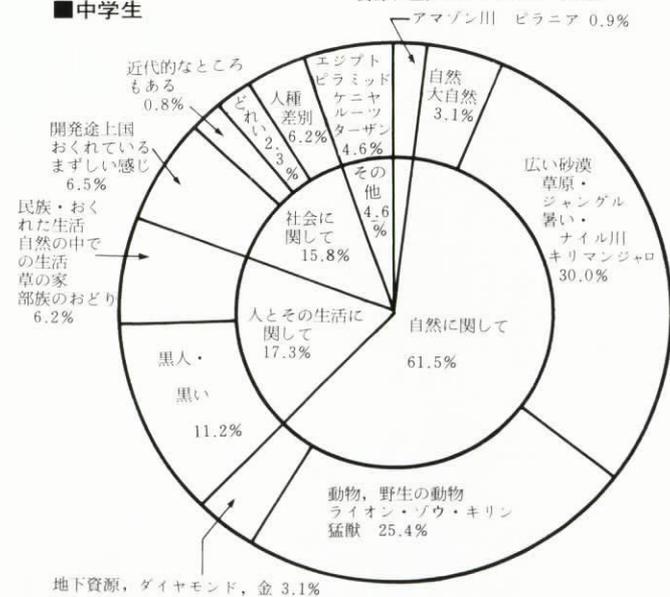


アフリカときくとどんなことが思いうかびますか

■大学生



■中学生



んだんに残っていることも、その一つにちがいないけれど、要はその広さだ。中南米を併せたよりもひろい大陸であることだ。その上をおおうた空もまた広く、高くて、白雲はひとときわ白く、黒雲はひとときわ黒く、そこにかかった虹の橋も、大きすぎて、いつも半分しか見えないから、まるで天に登るためにつくった、ハイウエーのようである。(一九六三) (全集第九卷二六七ページ)

この文章は、アフリカの魅力、あるいはアフリカの毒を、かなりうまくいあてていると私には思われる。たしかにそれは魅力なのだが、私たちはそれに有頂天になってしまつて、そこもまた今日の世界の一部分であり、ついこのあいだま

て植民地支配下にあった人々がいることを、忘れがちなのではないか、という反省も必要である。一般の日本人のアフリカ観、アフリカ認識には、そのような人間不在、歴史不在の部分が大いといわねばならないだろう。

●●●●●

いまアフリカは明治二十年

野生の王国イメージとは別のアフリカ観といえば、アフリカを市場とみて商品売りこもうとする人たちのアフリカイメージか、逆にアフリカの資源に目をつけてそれを手に入れようとする人たちのそれ、ということになるだろう。じつはこれらの人たちがもつとも多くアフリカ

を訪れていて、現地をよく知っているのだが、彼等のアフリカの評判は、一般にたいへん悪い。LLDC(最低開発国)のために商品が売りこめず、資源も簡単に自由にはできない。貿易はひどい出超が多くなって一方的になりやすく、問題が多い。なによりも政治情勢が不安定で、リスクが大きいなどなど、いろいろもつともな理由がある。

十七カ国が一挙に独立したので、コアラの年」と呼ばれた一九六〇年を中心、アフリカ大陸のヨーロッパ列強による分割支配は形の上では一応終止符をうつつ方向にすすんだ。一九七四年のポルトガルのクーデターによって、その植民地だったモザンビーク、アンゴラ、ギニア・ビサウなどが独立し、一九七九年に

はローデシアもジンバブエもローデシアとして出発したので、地図のうえではかなりの程度民族自決——黒人国家が生れたようにみえる。

しかし、独立を達成した後のアフリカ大陸は、政治的にはじつに苦しい歩みを続けてきている。

パンアフリカニズムの旗手だったガーナのエンクルマ大統領の失脚（一九六六）、世界でも有数の伝統をもったエチオピアのハイレ・セラシエ皇帝の退位（一九七四）などに代表されるように、アフリカの多くの国はなおその政治体制が安定していない。過去の十年間、つまり一九七〇年代に、アフリカでは十二カ国でクーデターが十四回起こり、ゲリラ戦が七つの国で今もなお続いている、といわれる（朝日新聞・一九七九年二月二十五日・伊藤正孝記者の記事による）。

一九七九年には、ウガンダのアミン大統領、赤道ギニアのマシアス大統領、中央アフリカのボカサ皇帝の三人が、それぞれ悪名高い恐怖独裁制の権力をうばわれたのは、まだ最近のことである。

一九六八年、私は西アフリカのマリ共和国で、バンバラ族の農村に住みこんだが、当時マリの政権は、モディボ・ケイタ大統領がにぎっていた。中国の影響が強く、首都バマコのニジェル川の川岸では、中国展覧会が開かれていて、北京放送が大きい放送塔をたてるのだという噂も耳にしていた。ケイタ大統領の写真は田舎の村々にもゆきわたり、ケイタ讃歌

を子供たちが歌い、娘たちがそれにあわせて踊っていた。

ところが、私が帰国後間もなく、この大統領はあつけなく追放され、別の軍人が権力をにぎった。あの子供たちや娘たちが、どうそれを受けとめただろう、というのが、私のそのときの印象であった。その後、おなじように元首をナシヨナル・シンボルとして讃美している様子を見るたびに、私はいささかシニカルになってしまう。

しかし、独立以来その力をもち続けている人もいる。タンザニアのニエレレ大統領、ギニアのセク・トーレ大統領などその例である。アフリカに関心を寄せる人たちのあいだで、ケニアのケニヤツタ大統領が死んだら、あの国はどうなるだろう、ということがよく話題になっていく。下手をすると、コンゴ動乱のような状態をまねきかねないと予想されていた。しかし、一九七八年八月、ケニヤツタが八七歳の高齢で亡くなったあと、モイ大統領があとをつぎ、ケニアの政体はゆるがなかった。人々はそこに「アフリカの成熟」を見たのであった。

明治維新のあとの日本も、日清、日露の戦争の頃になって、やっと人々は「坂の上の雲」を見るようになった。アフリカの国々の多くは、なお明治二十年前後の日本だといってよい。それも、江戸三百年の内部蓄積が経済にも文化にもあつての日本とはちがって、植民地として分断され、とり残されてきた時期につづく

二十年なのだ。すべての国にケニアの成熟を期待することは、まだできないのである。

アフリカが「よい意味でもわるい意味でもタチマエ主義」というのは、この独立後の日の浅さがひとつの理由になっている。なおアフリカは官僚制の能率のよさを身につけていない部分が多い。独立国としての体面を保つためには、背のびをしなければならぬ場合もすくなくないだろう。私たちはそれをひやかしてはいけないのである。

●●●●●●●●●● 交流の第三の次元

日本人とアフリカ諸国の人たちとのよい関係を、観光客や商社マンにあまり期待してはならないだろう。観光客はどこでも客人扱いされることを期待し、その尺度でものをみているから、不衛生とかきたないとか平気という人たちだ。商社マンがエコノミックアニマルでなくなつて、相手の要求ばかり入れていたのでは、日本経済が成り立ってゆかないだろう。

外交官も国の利害で行動するほかない。どうしても、これらの人たちとは別の次元で、私たちはアフリカとのよい関係を作りだし、維持してゆくことが必要である。それが世界における日本の地位、日本人の国際評価のために、大きい要素になってゆく傾向は、八〇年代に入りますますます強まると思う。どうすればこの



- 70・1 ビアフラ共和国崩壊（内戦終結）
- 71・1 ウガンダでクーデター、アミン大統領に
- 74・4 ポルトガルでクーデター、40年余のサラザール-カンターノ独裁体制崩壊。旧植民地が独立
- 74・9 ハイレ・セラシエ皇帝廃位
- 75・3 エチオピア軍事委、臨時政権樹立
- 75・11 アンゴラ人民共和国独立。アンゴラ解放人民運動（MPLA）勝利確定（76・2）
- 76・6 南アフリカ共和国で、黒人高校生に警官隊発砲（黒人暴動全国へ拡大）。第二次暴動（76・8）
- 77・3 ザイル南部シャバ州で、コンゴ民族解放戦線（FNLC）反乱、再反乱（78・5）
- 77・11 エチオピア、ソマリア両軍、エチオピア領オガデン地方で戦う
- 78・3 スミス・ローデシア首相、黒人穏健派指導者とソールズベリ協定。ムズレワ氏、白黒暫定連合政府初代首相に（79・4）。ローデシア制憲会議、最終合意（79・12）
- 79・4 タンザニア軍、ウガンダ民族解放戦線、カンパラ制圧。アミン政権崩壊
- 79・8 赤道ギニア共和国のマシアス大統領逮捕され、11年間の恐怖政治終わる
- 79・9 中央アフリカのボカサ皇帝、ダッコ前大統領のクーデターで失脚

●アフリカこの10年（朝日新聞79・12・25による）

第三の次元を開発・拡大してゆけるだろうか。

ひとつは、これまであるパイプ——海外青年協力隊や、海外協力事業団によって派遣され、現地ではほんとうに民衆のなかで働いている人たちの存在を再認識して、それをさらに力づけ、有益なものにしてゆく努力を続けることである。これは、相手ばかりでなく、派遣された日本人ボランティアにとっても、人生の貴重な体験となり、国際的な日本人を作り上げる機会にもなるのだから、もっと重視してよい。

この五月、私たちの日本アフリカ学会は、猪苗代湖畔で学術大会をもった。その主催校は福島医大。野口英世博士のゆかりで、ガーナ大学とふかい関係がある。そのリーダーの南安守教授は、学会をす

ませるとすぐアクラに飛んだ。新設された野口記念医学研究所で、二年間働くためにである。

こうしたレベルの国際協力が地道に続いてゆけば、日本の、また日本人の評価は着実に変わってゆくだろう。

アフリカ？ そんな野蛮なところのことなど知らん、という日本人のいるかぎり、なお日本は一人前の国際的地位を得ているとはとてもいえないのである。アフリカが地理的に遠いために、私たちの知りうる情報はひどくかぎられ、ときにはゆがんでいる。先年、アフリカ支局発の朝日新聞の記事に、ザイルの経済の衰弱の話があり、人々が飢え、市場にサルが食用に売られている、というのがあった。ごていねいにも写真入りである。ザイルのある部族の人たちには、む

かしからサルを食用にする習慣があることを、この記事は無視している。知っていて故意に無視したとすれば、センセーショナルリズムというほかない。なお日本では、大新聞にもこうした記事がまかり通るのである。

そこで、第二の提案として、アフリカ諸国の文化と社会、経済についての情報を組織的、系統的に蓄積する研究——地域研究の機構がほしい、ということになる。石油ショックによって日本人の中東についての知識の不足・欠除がいやおうなしに気付かされたが、アフリカについてもまったくおなじことがいえるのである。このまま放置すればいつかはひどい、とりかえしのつかないことになりかねない。私たちもいま、その研究センターを作る努力を続けているところだ。

アフリカの専門家も必要だが、他方若い日にアフリカを訪れたことのある日本人が、上級官僚やビジネス・エリートの人々に一人でも増えれば、それが大きい意味をもつにちがいない。そう思っただけで、京都・大阪の識者の支援を得て順調に準備が進んでいる。こうした動きを大切に、長期的な展望のなかで日本とアフリカ諸国との関係を考え、また行動してゆきたい。私がアフリカとのリエゾンでありつづけたいというのは、そういう意味である。

難民キャンプで考えたいこと

きもと のりこ
木元教子

(放送キャスター・茅誠司部会)

● タイの難民キャンプにて

三月二十日からわずか二週間程度の取材だったし、難民の問題は流動的だから、どの程度断定的なことをいえるか判りませんが、今度政府の難民調査に参加して感じたことをいくつかお話ししたいと思います。

一口に「難民」といっても、ベトナムの難民、ラオスの難民、カンボジアの難民といろいろあるし、同じカンボジアの難民でも、ポルポト系、反ポルポト系と分かれていて、難民の中でもそれぞれがかかえている問題はさまざまです。ある人は政治に賭け、ある人は早く国に帰りたいと希い、またある人は私たち日本人には想像もつかないほど簡単に国を捨てる。さまざまな動機を持った人達のさまざまな生きざまがそこにはある。

私が今度回ったタイの難民キャンプはソンクラ(ベトナム系)、サケオ(カンボジア、ポルポト系)、カオ・イダン(カンボジア、反ポルポト系)など、いずれもタイ政府管掌下の、したがってUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の管理

下にある三つの大きな難民キャンプと、タイとカンボジア国境にある政府の公認していない十幾つかの中小難民キャンプ、それに帰途香港で立寄った難民キャンプなどです。そのうち政府の保障下にあるソンクラ、サケオ、カオ・イダンの三キャンプは規模も大きく、サケオは二万五千人、カオ・イダンは十一万数千人いますからこれはもうそれだけで立派な一つの都市。政府の保障下にあるから医療や食料も豊富で、一口に言って「豊かだな」って感じ。ベトナム系のソンクラなどはマーケットが立って活気すら感じた。これにくらべると国境地帯にある政府未公認の不法占拠とみなしている中小キャンプは悲惨で、その対比ぶりにまず胸をつかれた。

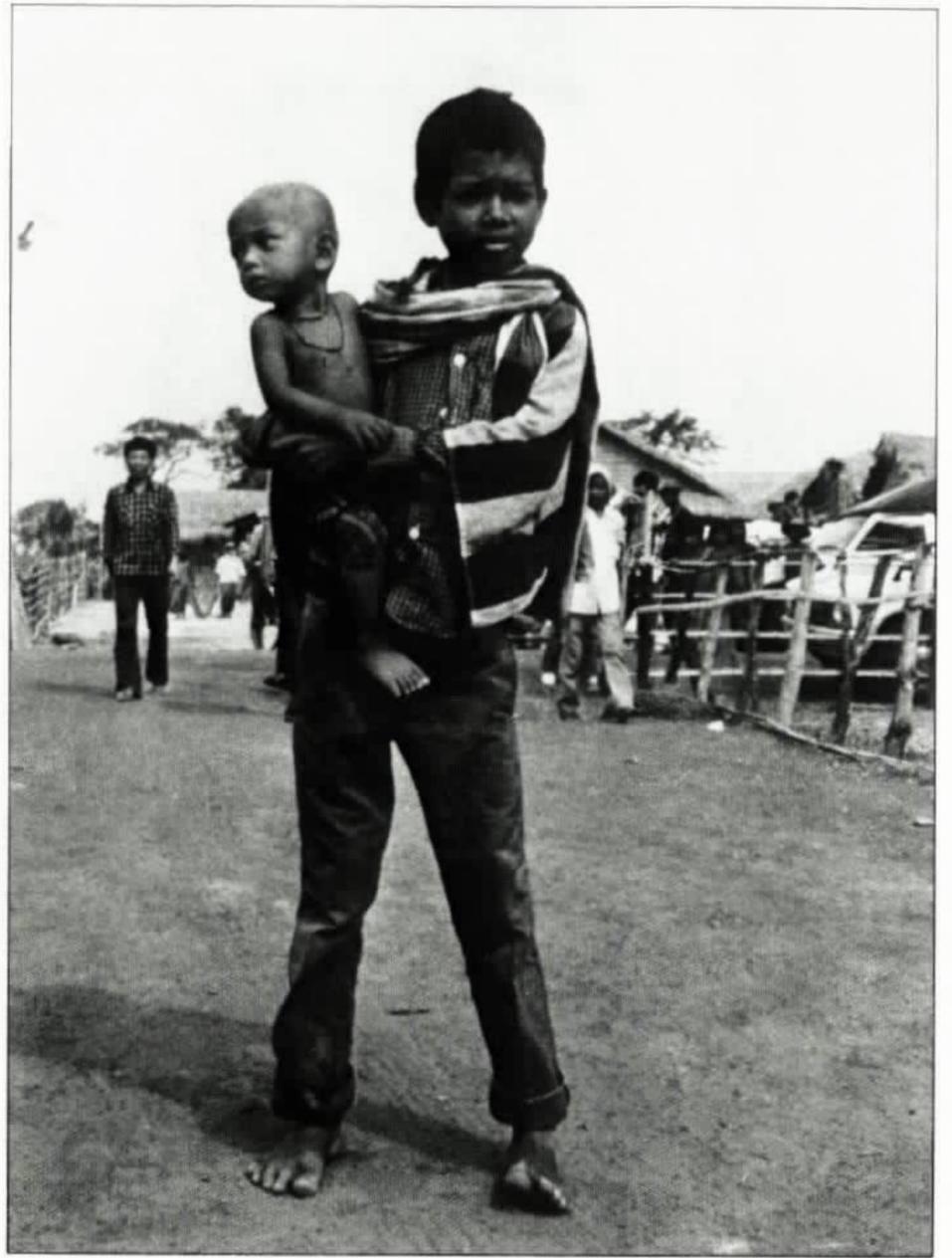
それでも私たちの行った段階では、少なくとも「緊急医療」の時期は過ぎ去り、事実、医師団のなかには引き揚げる人もいた。また新聞でみた、骨と皮ばかりの子供たちという姿もみあたらず、むしろ悲惨といえば、保障されている難民キャンプのまわりにある昔ながらのタイの貧しい村々の姿だった。サケオでボランティア活動をしている、日本人医師団のI

さんの話では、サケオの難民キャンプにいて二万五千人に対して医者十六名。最初それを聞いたときは「少ないなあ」って思ったけれど、周囲の農村では住民九万人に対して医者一人と聞いて二度びっくり。そんなところにも難民問題の複雑さがあるな、と感じました。

● ● カンボジアって何だろう

今、またベトナムからの難民がふえてくるようですが、さつきも申しあげたようにベトナム系、カンボジア系、さらに同じカンボジア系でもポルポト系、反ポルポト系とそれぞれキャンプが分かれていて、これが絶対にまぜこぜにならない。もともとベトナム系の人には華僑も多く、新しい天地を求めてどこの国だって行くという国民性が強いようです。

ベトナム系の難民キャンプ、ソンクラは中がととも組織的で、キャンプチームの下に保安、福祉、教育、郵便、総務など十二の係があつてキビキビ動いています。これも国民性でしょう。そして長期滞在でも六カ月程度の回転で次の土地へ



ら、米を作る、農業をするというわけですね。これにくらべてベトナム系、とくに南ベトナムからやってきた人の心底には、あの国はもう北にとられてしまった国だ、だから自分たちの国ではないという意識がありますね。

ポルポト系のキャンプ、サケオにくらべて、反ポルポト系のキャンプ、カオ・イダンには活発で生き生きしている。なにしろ人口十一万余と大都市なみです。歌や踊りの講習会があるかと思うと、銀座なみのにぎやかな商店街がある。そのカオ・イダンから四十分ほど国境地帯に入ったところにある不法キャンプ、〇〇七はクメール・ルージュとは別の白いクメール、クメール・セリ（自由クメール）などの有力な拠点地になっている。自分たちの思想をこうして大事にする反面、生きるという点でもたくましく、白いクメール同士の〇〇七、二〇四、〇〇八（キャンプの名前）が、利権をめぐって内ゲバを展開する。

では、カンボジア系はどうかというと、自分たちはもともとカンボジア人だ、いずれは国へ帰るんだという気持ち強いようです。「難民」のことを私たちはふううREFUGEE（亡命者）と呼んでいますが、カンボジア系のキャンプではDISPLACED・PERSON、つまり自分たちは今やむなく土地を失ってここに居留しているが、いずれ事態が好転すればカンボジアに戻るんだ、だから難民ではないという意識です。それでカンボジアに帰って何をするんだって聞いた

あり、なおかつ素朴な農民は早く帰って米を作りたいという。カンボジアって何だろうとふと考えてしまいましたね。

●●● 送ればいいというものではない

日本からカンボジアへ品物を送ることはできるが、そこから国境地帯にいる本当に困っている人々にその品物を届ける手立てがない。バンコクにJVC（ジャパン・ボランティア・センター）というのができて、そこから細々と子供たちのノートを送ったり、衣料品を送ったりしているが、保障されたルートでないかぎり、今のところそれは細々としたものに終わっている。

だから、カンボジアの港でも、沢山の品物がねむっている。それにこういう問題もある。サケオとかカオ・イダンなど正式に保障された難民キャンプに、何か品物を送ったとしても、バンコクの倉庫で滞貨してしまう。なぜか、関税がかからずだ。

物を送るのはいい。しかし関税がかかることを忘れてもらっては困る。JVCその他の機関が払い切れるかっていうとそうもいかない。そうするとせっかく送っても、タイの港の倉庫でそれはずっとねむっている。私が三月の終りにたずねたとき、昨年送られたものの一部がやっと仕分けることができるようになったというところだった。ただ送ればいいっても



のじゃない。このことは口を酸っぱくしていっています。残念ながらもなかなか理解が届かない。

それと必ずしも難民が欲しいと思っ
ているものと一致しない。だから、日本は
お金を出すばかりで人を出さないという
批判があるが、私はお金でいいと思う。
そのお金で本当に欲しいものを難民が手
に入れる方がはるかに役立つからだ。

●●●●● ボランティアと難民

ボランティアにも問題がある。問題が
あるというよりも、ボランティアのあり
方にこそ難民問題の基本があるような気
がしてならない。

ボランティアについて、たとえば「二
週間程度来てもらっても迷惑だ」という
声が現地にある。なぜか。最初の一日は
まず「時差ボケ」ならぬ「温度ボケ」が
ある。それに言葉も慣れていない。タイ
語、カンボジア語など話せる人は少ない。
せいぜい英語だが、英語でできる仕事と
いうと限られてくる。トランジット・セ
ンター（一時滞在所）などでたとえばア
メリカへ行く人に、アメリカ式マナーを
教えたり、トイレの使い方を教えたり、
着衣についての知識を教えたり。現にこ
ういう仕事はバンコクの在留日本夫人が
やっている。それをわざわざ日本からき
たボランティアがやる仕事かという批判
も当然ある。しかし、それでもいい、や

つと仕事に慣れたと思ったらもう十日経
ち、帰り仕度の日がくる。いやな言葉だ
が向うでは「観光ボランティア」という
言葉がある。

十日や二週間で帰るボランティアはそ
れでいいが、一年がかりで来た（最低三
カ月というのが多い）長期のボランティ
アにとって、いったん「過保護」に慣れ
てしまった難民をどうしてくれる、とい
うきびしい批判がある。事実、私もカン
ボジアのキャンプで目撃したことが、
物資がくるとベトナム系の場合はそれを
運んだり、分配したり、ときはきと手伝
っているが、カンボジア系の場合は数人
のボランティアが物資を分けるのを、た
だ見ているだけ。国民性だけの問題では
ない。私が「なぜ行かないの」と問うと
「あれはボランティアの仕事、俺たちは
難民だ」という声が冷ややかに戻ってき
た。すべてを短期のボランティアの「過
保護」「過干渉」のせいにするのも酷な話
だが、それがいいとはいえない。

ある大使館の壁にこういう大きな貼り
紙がしてあった——「難民よ甘えるな、
感謝しろ」と。ほんとうにボランティア
ってむずかしいなあと思った。難民にと
って何が本当に必要で、何をしてはなら
ないのか。同情があの人達を救うこと
は少しもならない。そのことを痛感した
し、そのことしか難民問題については今
いえないと思う。

そして、あの人達が、自分達の望む場
所で、どうやって自分達の力で生きてい



80 3

けるかを考えなくてはいけないのではないか。そのために外から私達が何をどう手助けできるのか。安易なヒューマニズムはセンチメンタルにすぎないので

●●●●● 日本に求められるもの

私たちの今度の調査には、難民の中で日本に来たいという人に面接していろいろ今後の参考にするという仕事も含まれていました。

インタビューで、日本に来たいかって聞くと、大抵は日本は豊かだから行きたいとかそういう儀礼的な言葉が最初返ってくるのですが、つきつめていくと、結局「行かない」という答になる。

その理由の一つには、たしかに日本の難民受入れ条件のきびしさという問題があります。人数は五百人を今度千人にしましたが、たとえば日本の企業にかかわりのある人とか、日本に留学したことがある人とか、そういうものを重視する。

日本に来たいという人を何人が面接していて、そういう「きびしさ」の噂が伝わると、もう次の日は面接にこない。そして「日本は本当に受け入れる気はないのではないか」という声が出てくる。

またこれはベトナム系のインテリのお医者さんで、「面接でこういうことを言う人がいた。「日本に定住したい。しかし日本の受け入れ条件はきびしい。そして

し受け入れてもらえたとしても、日本は単一民族で、外との交流が少ない。同じアジア人といっても、私の時代はいいが、私の孫の代になっても、あの人のお祖父さんはベトナム難民だったと、日本人はいうのではないか。それだったらもつと人種的にミックスしたところを選びたい」と。

そういうふうな決めつけるところにも問題は一つあるかもしれない。しかし、彼の指摘する点も現実にはある。しかも、それを变えることは至難のわざである。

受入れ枠をふやすこともいい。条件をゆるめることもいい。しかし私はもっと現実的な日本の行き方として、それぞれ行きたいところに行かせる、日本はそのための一時施設であつてもいいのではないかと思う。一時滞在を希望する人に便宜を与えるような方途をどんどん考えて、お金も必要ならそのために出すべきでしょう。その過程で永住を考える人も出てくるかもしれない。無理をしないで寄与できる方向を考えたいと思う。

お金を出すことは少しもはずかしいことではない。たとえばタイの人を雇ってその人にお金を出して難民キャンプで働いてもらうとか、そういう方策だって難民対策として恥ずかしいやり方ではない。タイの人達も犠牲を払っているわけで、その人達もともに潤うというやり方を考えることが、アジアの中で生きる日本の生き方として案外必要なことではないのだろうか。

和魂・洋才・日本人

日本型ビジネスの行方

対談

堤清二

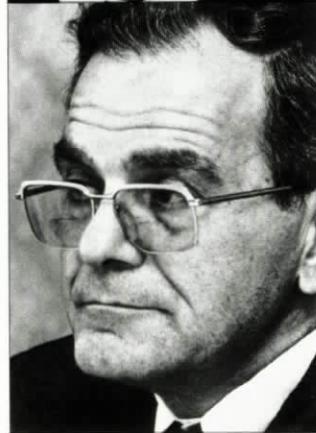
(西武百貨店会長・中山伊知郎部会・国際交流研究部会)

ロベール・J・バロン

(上智大学経済学部教授・中山伊知郎部会)



堤清二氏



ロベール・J・バロン氏

「国際化」をどう考えるか

——先日の国際交流研究部会で堤さんは「国内で地方化ができなくて、海外で十分な国際化などできないではないかと、問題提起されたと同じです。そのあたりを手がかりに、現在の日本の国際化についてお話し合いの願いたいと思います。

堤 日本が国際的に通用するようにならないといけないということがいわれ、「国際化」って何だということがはっきりしないままにスローガンが先行し、いま

や手垢にまみれているというのが現状だと思います。

いま編集部から、国際交流研究部会での私の発言が紹介されましたが、たしかに私そう申し上げました。というのは、たとえば東京から鹿児島へビジネスマンが転勤になり、そこで仕事をしようというとき、しばしば見受けられるのは、鹿児島に住んでいる人の生活習慣なり言葉、あるいはそれに象徴される文化体系を十分理解しようとしていないで、ただ自分は○株式会社代表で東京からやってきた、そういう意識で仕事をやる人が多い。そ

ういう人は、おそらく同じ姿勢で外国でもやるだろう。バロンさんは『日本型ビジネスの研究』の中で、日本のビジネスマンは東南アジアで評判がわるいと指摘しておられる。実際私なども回ってみて、同じような感想を持ちます。たとえばインドネシアに勤務する日本のビジネスマンで、はたして何人がインドネシアの生活習慣、文化に行き届いた目を持っているか。

ヨーロッパの企業の場合だと、たとえばドイツのゲーテ・インスティテュートでも、英国のブリテイッシュ・カウンセ



ルでも、あるいはオランダの熱帯病研究所などもそうですが、企業がその国を知ろうとする、その熱意のあらわれが、一つの文化活動として結実しているように思われます。やや図式的な見方もかもしれませんが、日本の場合それがなくて、資本だけが持っている。技術だけが持っている。ビジネスマンだけが持っている。それでは不評を蒙るのは当たり前です。そういう意味で、国内で地方の時代といわれていることと、国際化は一脈通ずるものがありはしないかというのが、私の発言の本意なのです。

バロン 堤さんからユニークなひとつのヒントが出されましたが、私はまず「概念」としての国際化と「スローガン」としての国際化を分けて考えたいのです。スローガンとしての国際化というのは、比較的容易に理解できると思います。ただその場合でも、堤さんが国際化の説明に、日本のローカリズム、東京から鹿児島に転動になった会社社員を例にとられたことに、ヨーロッパ人として、少しとまどいを感じました。これは、日本人としての発想だと思えます。ヨーロッパの場合、他の国との関係が国際化であり、ローカルなことを例にとるような発想は出てこないと思います。アメリカは、東部と西部とはかなり違いますが、それでもアメリカ人が国際化というときは、やはりヨーロッパなりイングランドに行くことよって起こってくる。そうした差異があると思われま

じゃ「概念」としての国際化はどうか。言い換えれば、「国際化」という概念は日本でのみ妥当性を持ちうるのか、海外でも妥当性を持ちうるのか。

実際的な意味では、「国際化」というようなものは存在しません。現実にはすべての人間がそれぞれ異なった国籍を持つて生きています。ある人間がある国籍をとり、それで国際人になったというよなことはありません。そうではなくて、ある特定の人間のグループにメンバーとして属していて、その人が他のグループに対してオープンマインド、つまり開かれた心を示すときに、彼らは国際人的な特質を持つわけです。

ここでグループというのは、ある特定の国籍ではなくて、ある「民族的なグループ」と言い換えてもよいと思います。たとえば私はワルーン人、またはフラマン人であって、ベルギー人になったのはそれら二つの民族を統合して、ベルギーという国ができたわずか百五十年前からのことです。それは歴史的な一種の偶然の結果といってもいい。イタリアについても同じことがいえるし、歴史をたどればアメリカ人もとはヨーロッパ人だっただけです。

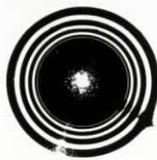
そういう意味では日本人にとって、日本は「ネイション」ではないし、日本人がいなければ日本という国は存在しない。同様に、国際化していくということは、本来の日本の特質を失わせるといふことでは少しもなく、むしろ日本人であり

続けるために、国際化せざるを得ないということだと思います。

● ● 日本国籍をとつても

私の顔は変わらない

堤 バロンさんの話を伺っていて感じたことのひとつは、日本人が「国際化」というとき、自分を日本「国」と同じレベルにおいて発想するところがある。たとえば日本の国が門戸開放すると同じ次元で、日本人が国際人になると同じことを考えている。ところがヨーロッパ、あるいはアメリカの場合は個人個人が異質の文化体系に遭遇したときに、それを理解しようとする姿勢をとるか、拒否しようとする姿勢をとるか——そのあたりが基底になって、オープンマインドつまり「国際化」ということが出てきている。そのあたり物の考え方の違い、言葉の違いをもう少し詰めてみる必要がありますね。バロン 賛成(笑)。別の例をとって説明してみたいのですが、いま堤さんがおっしゃった「オープンマインド」、日本語では開かれた心というふうに訳されていますが、「心」というのは「マインド」と違わうわけです。日本人にとって心を開くということとは、彼のハートを開くということですね。これは単に日本人の側からみて違いがあるというだけではなくて、西欧人の側からみても違ってくるわけです。つまり両方向から食い違いが生じてくる。



日本人の態度に西欧信仰があったということ。発達した資本主義国である西欧に追いつかねばならないという意識から、単純に図式化していえば、国際化＝西欧化という意識が生まれた。

実はそこでもひとつ問題があつて、バロンさんも著書の中で紹介されていますが、当時「和魂洋才」ということがよくいわれました。だからその場合でも、西欧に向かつて開かれたものは、技術を導入しようという経済的意欲ではあつても心ではなかつたのではないかと疑念が生じます。つまり「侵入」ということでいいと、明治維新によつて、文化インベージョンは起こらなかつた。科学技術と人文科学的なものがどこまで切り離し可能なものか、原理論的には問題が残りますが、明治維新によつて日本人の心は海外に向かつて開かれなかつたのではないかと思えるフシがあります。

ところが、いまおっしゃる通りに、一九四五年に日本は戦争に負け、アメリカの占領下に入った。嫌でも応でも「国際化」を意識せざるを得なくなつた。デモクラシーという政治体系が入つてきたその段階でいわれた「国際化」と、その後経済が非常に発展して、経済交流を密接にやらなければならなくなつたときにいわれた「国際化」と、言葉は同じでも、中身はずいぶん違つてきたと思う。その結果として、私たちは現在、国際化についていわば第三段階に入つていると思うのですが、そこで冒頭にのべたように、

国際化概念についてある種の「風化」が起こつていのではないか。その点についてのバロンさんのお考えも伺いたい。バロン まず最初の「和魂洋才」ですが、明治維新のときのスローガンであるこの言葉を私はとても好きです(笑)。非常に多くのものが含まれています。そして日本について多くのことを語ってくれるからです。

この言葉についての私の解釈は、和魂を維持する目的をもつて、明治政府は洋才を必要としたのだと思います。だから「心」ではなく気持ちの上で、つまり、腹芸的に洋才を必要とした。西洋技術が日本を変えたのではなくて、日本人が新しい世界環境の下で、日本人であり続けるために西洋技術を必要とした。その新しい環境というのが、黒船であり明治維新だということに考えます。「文明開花」という言葉も、当時の日本人が日本人であることをやめて、西洋人になろうとした象徴的な言葉ですが、実際そういうことは非現実的なことだつた。日本人は日本人であり続ける以外になかつた。

一九四五年という時点には、黒船ではなくて、現実には米軍の占領という事実となつてあらわれました。しかしこれに対する日本人の対応は、明治維新のときとまったく同じだつたと思います。それに続く十年、十五年の混乱の中で、日本人はある程度日本的なものを失いましたが、それも一時的で、やはり日本人であり続けたと思います。堤さんがいま「デ

モクラシー」とおっしゃいましたが、デモクラシーという言葉が現在そのまま使われていること自体が、この概念が本当に日本人の概念として深く定着化していないということではないかと思ひます。

ですから、たしかにアメリカの影響は強かつた。しかし日本人の心の奥底、腹の底で、はたしてどれだけ日本人がアメリカ化したかを考えますと、もしそうならたとしても、非常に少ないのではないかと。ひとつには言葉の問題があります。言葉と価値体系とは切つても切れない密接なかわりがあるわけですが、日本人は英語を喋れなかつた。戦前の日本のインテリの多くは外国語を考へるとき、これはドイツ語だつた。ドイツ語を通じて、ドイツ的な世界観、価値観に対して親しんだ。戦後それが英語——ひとつは占領軍がきたこと、ひとつは英語が国際語であるというこの二つの理由によつて——に代わつたわけですが、それに伴う価値観の変化は表面的なものにとどまらざるを得なかつたと思ひます。

ここでビジネスの社会で使われる言葉の一例を紹介したいのですが、たとえば堤さんは日本のビジネスマンと話される場合、「競争」という言葉が使われることが多いか、それとも「過当競争」という言葉が使われることが多いか? 競争という言葉はもともと日本語ではなかつた。福沢諭吉がはじめて作つて使つた言葉です。日本語でなかつた言葉が使われにくいのはある意味で当然ですが、私の見る

しか存在しない。日本人はそういう問題にかかずに合わないというのが、西欧世界にくらべて非常に強みではないかと思えます。

しかし同時に、日本人が腹だけで生きていくということであれば、これは徳川時代や鎖国時代と変わらないことで、現代では不可能であると思います。これは堤さんの危惧でもありません(笑)。そして実際、日本人がもともと日本人を知ることが必要であり、そして西歐を知ることによって「頭」を「腹」につけ加えていくということが、近代化の過程にあつたわけですね。これに対して西歐では、排他的といっているくらい、頭ばかり使って腹を使わなかった。そういう意味で西歐人はもともと日本から腹というものを学ぶべきだと思います。

ただ、私は日本と西歐とが高い相互依存性を持つようになって、両方が同質的なものになっていくとは思いません。日本人はあまりにも腹に依存し、西歐人は頭に依存するからです。しかしお互いの欠点を補完し合い、交配されて、クロスファテライゼーションというものが起こることを期待しています。その意味でインターナショナルビジネスというものが非常に大きな貢献をするのではないかと考えます。国際政治がこの種の貢献ができるかどうかは疑問ですが……。

堤 お話を伺っていて、これは多分三日間ぐらい泊まりこんでやたらとても面白いと思うんですよ。

パロン ひどい喧嘩になるかもしれませんがね(笑)。

堤 三つほど、私が現在の時点で、今後とも日本人としてあり続けるために必要と思われる要素を提出させていたと思いますが、ひとつは、環境の修復というか再建——これには風景とか地理的条件も含めて——をはかって、それに適合した技術体系を開発することですね。それから二番目には、日本人の個性化——これには個人個人の個性化も内包しますが——を見直していくこと。それには近代的な工場生産の画一主義に対するアンチテーゼが必要だろうと思います。

そこから出てくるのは、三番目に歴史意識の復活です。私は日本の近代主義の中には歴史意識を否定する要素が含まれていると思います。少くとも明治以後はそうだった。また、パロンさんが先ほどおっしゃった日本人の時間感覚は、たしかに日本人の特質の一面をいい当てるとは思いますが、それは明治以後の百年に醸成された、きわめて近代日本の発想であって、明治以前の長い歴史をたどりますと、日本人には歴史意識が色濃くあつたように思います。その意味で今日以後、日本人が日本人であるためには、それこそ時間を明治以前にさかのぼって、日本人の歴史意識の復活をはからねばならないだろうと思います。

以上の三つ、結論だけを急いで説得性を欠くと自分でも思いますが、あえてもう一つ付け加えれば、日本人が日本的な

文化体系の相対性を常に忘れないことだと思えます。それは地球上の一方地方である日本列島で成立している文化体系にすぎないわけで、これも一つの地方である西歐の文化体系とも、アメリカの文化体系とも違う。違う文化体系同士がお互いの良さを認め合うことによってグローバルな新しい文化体系を作る。それを一つの歯止めとして、排他的な民族主義に陥らない前提を作った上で、いま申し上げた環境と個性と歴史意識をより明確にしていく作業に、これから日本人は取り組まなければいけないのではないかとこのように考えます。これを経営の中ではどう実現するか、と考えますとそれだけでまた三日かかる。

パロン そうそう、喧嘩もまたあるしね(笑)。そこで簡単に答えたいんです。堤さんはやはりアイデアリストだと思います。私はもう少しリアリストに考えるんですが、現在の世界で、日本人は自分のことを他人に説明できません。

堤 そうでしょうね。

パロン そこが問題だと思います。堤さんの三点、大賛成です。しかしそれを全部絞って、一つのことになると、日本人は自分のことを認識しながらそれを他人にどうやって説明できるかということになりませんか。それをブッシュすることがどうしても必要だと思います。

堤 賛成です。しかし、それも時間がかかることですね(笑)。

プロフィール



め、「眠れる魂」が「ガラスのうさぎ」など、いくつかのオリジナル組曲を発表している。リサイタルは今年で二十四回目。五月末に行われた。グループ結成のいきさつを聞くと、

ダーク・ダックスを中心に、国際

交流研究部会が発足した。音楽、スポーツ、文学、建築など、さまざまな分野から二〇名の方にお集りいただき、21世紀フォーラムの新たな地平が拓かれた。すでに二回の部会が開かれ、第一回「国際文化交流」(講師・村上兵衛氏)、第二回「人はなぜ



歌をうたうか」(講師・小泉文夫氏)をそれぞれテーマに、活発な討論の輪が広がっている。メンバーの横顔をご紹介します。

● ●
ダーク・ダックスは、来年五月が結成三十年。慶応の学生コーラス「ワグネル」で四人が出会って以来、今や合わせて二百歳も真近という、息の長いグループである。ロシア民謡や山の歌など、誰でもが懐かしに誘われる歌や、今ではスタンダードな合唱曲となった「山に祈る」をはじめ



遠山一氏



喜早哲氏



佐々木行氏



高見沢宏氏

「星ができるときのよう、何となくもやもやとした存在があつて、それが結晶したのがダーク・ダックス」というゾウさんの答え。ニックネームの由来は四人四様だが、最も古い

のがマンガ(佐々木行)さんで、高校時代。大学に入ってすぐがゾウ(遠山一)さんで、体が大きいから。パク(高見沢宏)さんも大学時代。夢を食う糞が変じたものらしい。ゲタ(喜早哲)さんが一番新しい。

趣味は四人ともスキーとゴルフ。

ゴルフはかなりの熱の入れよう。東京や地方に「あひるの会」というゴルフ仲間のがつくりられている。

海外への演奏旅行は、昭和三千五百のソ連をはじめとして、南米、カナダ、フィリピン等、世界各地にわたっている。当時モスクワにいたことも部会メンバーの吉川光さんは、ダーク・ダックスの都会的に洗練されたハーモニーは、「日本人がヨーロッパ的センスを持っている」ということを理解させる功績があつた」と、文化交流への貢献を語っている。

21世紀フォーラムへの期待は、「いろいろな世界の人と接し視野を広めたい。特殊な職業であればあるほど、専門に埋没しやすいから」(ゾウさん)。

「いろいろな人の、いろいろな話が聞ける」(ゲタさん)。
「いい会だ。楽しいし、知的好奇心を満たしてくれる」(マンガさん)。

「自由闊達に議論し合つて、その結果、皆が興味を持てるものに、シューと議論が絞られてくればすばらしい」(パクさん)。

四人の生まれば、ゾウさん、昭和五年。ゲタさん、昭和五年。マンガさん、昭和七年。パクさん、昭和八年。三千周年記念の準備に忙しい最近だ。

● ●
石井好子さんといえば、シャンソン歌手。しかし、学生時代は東京芸術大学でドイツリードに専念し、戦後はジャズに転向。シャンソン歌手としては、一九五二年にパリでデビューした。パリを中心に、ヨーロッパの舞台で活躍された後、帰国。日本シャンソン友の会をつくり、その会長でもある。石井さんはまた、随筆家としてもよく知られている。「パリ

の空の下オムレツのにおいは流れる」で、エッセイスト・クラブ賞を受賞。



石井好子氏

随筆集「想い出のパリ・想い出のサンフランシスコ」のほか、水森亜土さんのイラスト入りで子供向けの料理の本も出版。今年の秋には、もう一冊随筆集を上梓する。リサイタルも聞く予定。

21世紀フォーラムに対して「皆さんと話し合う機会が持てることは嬉しい」。大正十一年生まれ。

● ●
チェンバロ奏者の小林道夫さんは、一九六五年から六六年のドイツ留学の折に、バロック音楽に魅かれピアノからチェンバロに転向された。「今

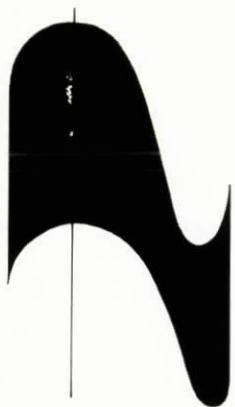
だに古い音楽に心が動く」とか。
ピアノとチェンバロの違いは、「ピアノ（の演奏）は身体の使い方。チェンバロは楽器の中にヒントがある（制



小林道夫氏

約が多いから」。ダーク・ダックスとの縁は「ワグネル」。

趣味といえば「地方公演のとき、ブラブラと本屋を回ることぐらい」。今やってみたいことは「針葉樹の



においのするところに居たい」。

二回の部会は、あいにくご都合が悪く出席いただけなかったが、「これからは時間の余裕を持って、21世紀フォーラムへも積極的に参加していきたい」。四十七歳。

● ● ●
建築家の佐賀和光さんは、日本のサーフィンの開祖として、その道では「ちと有名」な方でもある。サーフィンの歴史は二十年。何歳までやれるか挑戦中とのこと。ジャズピアノも

玄人。バンドを組んでサパークラブ出演の経験もある。もう一つの肩書きは、「日本ラジコン模型グライダー協会理事」こちらも十年のキャリア。本業の建築では、特に住宅建築に意欲を燃やし、「小規模で、隅々まで



佐賀和光氏

自分のデザインが目が行き届いた建築をやりたい」。自宅は「晴々ハウス」と名付け、雨戸もカーテンもなく、夜明けとともに湘南の太陽がさし込む。「原っぱで昼寝するでしょう。あの気分ですよ」。

21世紀フォーラムへの期待は、「新しい見方が自分のなかに生まれること」。昭和十四年生まれ。

● ● ●
夜十一時十五分、8チャンネルの

スポーツニュースといえば、すぐ浮かぶのが「今晚は」という佐々木信也さんの顔。四年間のプロ野球選手生活の後、解説者としても十五年。最近ではスポーツ番組のほか、CFやポスターにも登場される。アメリカと日本の選手気質の違いは「アメリカはショーマン。楽しむ気持ち強い。日本は真面目で一所懸命、楽しみ方が足りない」。

21世紀フォーラムへの期待は「今は発想の時代だと思うんです。それ



佐々木信也氏

● ● ●
に実行力をもっていることも大切。テーマについて考えるなかで、そういうものが生まれてくるのではないが。ほかにフランチャイズのうどん店「木屋」を経営。銀座七丁目、資生堂裏。

● ● ●
テレビ・ラジオ出演執筆活動に多忙をきわめるイーデス・ハンソンさんは昭和十四年、インドのヒマラヤマスリーの生まれ。お父さんが宣教師だった関係で九歳までインドに住む。オクラホマ大学フランス語科を

中退して、昭和三十五年、阪大留学中のお兄さんと一緒に初来日、以来二十年間、そのシャープな頭脳とさわやかな弁舌で日本のハンソン・フアンを魅了している。お母さん、お兄さんは現在アメリカ、コネチカット州に住んでおられ、ハンソンさんも時々帰省されるようだ。

● ● ●
週刊文春の「ハンソン対談」をはじめ、テレビ出演多数、著書は七冊に



イーデス・ハンソン氏

のぼる。

● ● ●
千宗室さんは、裏千家家元である。日本文化の精髓の一つである茶道を通して、国際文化交流に貢献されている。21世紀フォーラムへの参加にあたり、次のような言葉を寄せてくださった。



千宗室氏

私の願い

「一盃からピースフルネスを」というラターゲットをもって二十数年間、海外に茶道を普及してきたが、物質文明から逃れ本来の心を見出そうとする人々が茶道を学び出してきている。肝心の日本では未だ茶道を単なる稽古ごとのように又、面倒くさいことをしているなどと本当の茶道の文化的意義を理解して貰っていない向がある。私は内外において茶道の真の価値をこれからもどしどし広げていきたいと念じている。

● ● ●
中山伊知郎部会のメンバーでもある堤清二さんは、西武百貨店、パルコ、西友ストアーなど、西武市民産業グループを束ねる総帥でもある。ダーク・ダックスや芸能山城組の山城祥二さんと公私にわたる相談相



堤清二氏

手。「辻井喬」のペンネームで小説を発表したり詩作をするのはつとに有名だが、そのほか東京大学で一年間、流通産業論を講義したり、最近ではアメリカの経営学者ピーター・ドラッカーの『乱気流時代の経営』を監訳したり。とにかく多彩な活動人間である。昭和二年生まれ。



●●

日本のシンセサイザーミュージシャンの第一人者であり、世界的にも名を知られた富田勲さん。「展覧会の絵」や「宇宙幻想」など数多くのレコードを発表され、一九七五年にはアメリカ・クラシカル・アーティスト賞を受賞。宇宙的ムード溢れる音楽は、まさにクラシックに新境地を開いた



富田勲氏

といっても過言ではない。

実はあの壮大なオーケストレーションは、一人で演奏しているのだ。合成器の名のごとく、自然音から楽器音まで幅広い音色が出せるが、パネルを見ると、VCO・VCF…? 「でも使いこなすのは人間です。機械に使われてはいけません。やはりテクニクよりイメージの豊富さが重要ですね」という言葉に実感がこもる。音響プロデューサーもこなす。昭和七年生まれ。

●●

作曲家の服部克久さんは、テーマ音楽の作曲、音楽監督、ときには司会と、テレビやラジオなど多方面に活躍されている。NHKニュースのテーマも服部さんの作曲である。ダーク・ダックスとは、オリジナル組曲「花と愛」「ガラスのうさぎ」などの作曲や編曲をするなど、仕事を通じての親しい間柄である。

一九五五年から五八年までパリ国立音楽院に学んだ。当時まだ、日本の



服部克久氏

への関心や理解は極めて低く、自動車博覧会が開かれた折の新聞評などは、「日本人はあの繊細な手でもって車をつくった」と、ベルトコンベアの近代工場が日本にあるなどとは思

われていなかった。だから「日本のことを向こうに知らせる方法をテーマとして取りあげていったらいいのではないか」。こういうことを考えるのも一人ではむずかしい。「皆と一緒になら…」と21世紀フォーラムへ期待している。昭和十一年生まれ。

●●

松原秀一さんは、ダーク・ダックスにとつては「ワグネル」の先輩である。一九五六年から六一年までフランスに留学。六九年から七一年の二年間、パリ大学日本語学科で日本語を教えた。現在慶応大学文学部教授。21世紀フォーラムへの期待は、「日本はたこ壺。フランスでは、サロン



松原秀一氏

的な場があつて知識を社会へ還元していく。そういう場としたい。」

専門は中世フランス語で、東西の説話の比較研究をされている。「どこかで聞いたことのある筋だなあと、うと、釈迦がカトリックの聖者になつていたりするんです。大学では国際センターで留学生の世話をし、また昨年慶応国際シンポジウムでは、コーディネーターを務めた。昭和五

●●

年生まれ。国鉄職員局労働課長というお堅い

肩書きの三村忠良さん。ダーク・ダックスとは、三村さんがパリ事務所に勤務していた時以来、十年のつきあいである。ご自身も音楽は好きで、クラシック・レコードの蒐集は四



三村忠良氏

五〇〇枚。ブラームスやショパンのファン。フランスでは合理主義的精神にギャップを感じたようだが、「人情は変わらないですね」。アパートの上の階に住んでいたおばあさんが、今でも、末のお嬢さんへクリスマス・プレゼントを送り続けてくれるという。21世紀フォーラムに対しては「閉鎖的、進歩的でないという国鉄のイメージを、少しでも変えるのに役立つは…」昭和十一年生まれ。

●●

松本重治部会のメンバーでもある村上兵衛さんは、第一回部会の講師をお願いしたのがきっかけとなり、出席メンバーの要望で、この部会に加わっていただいた。昭和四十八年に「日本文化研究所」を設立し、世界的な視野で日本文化を探る仕事や、『百の日本の事物誌』『日本文化提要』等英文版の本を出版し、日本文化を紹介する仕事をされている。研究所設立の動機は、初めての海外旅行体験とのこと。ヨーロッパを歩き、「本

郷音き。

国際交流研究部会発足

私どもダーク・ダックスは、国際交流をテーマにした研究会を設け、21世紀フォーラムの一員として活動させていただくことになりました。

今日、国際化の時代のなかで、文化交流の果たす意味と役割は以前にもまして重要な度を加えてきていると思います。私どもも、ソ連をはじめ各国への演奏旅行を行い、国際交流のささやかな一翼を担って参りました。

このような経験を生かしながら、研究会のメンバー共々、今後の国際交流のあり方について討論し、理解を深めていきたいと考えております。(呼びかけから)

国際交流研究部会

ダーク・ダックス

遠山 一

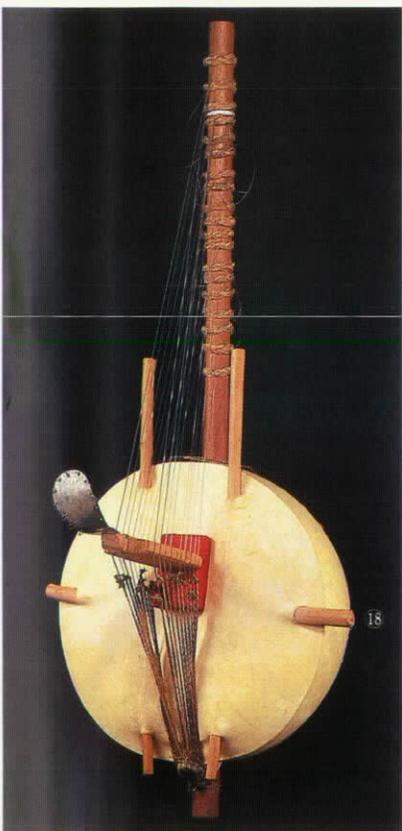
喜草 哲

佐々木 行

高見沢 宏



郷音き。



- ①サルンガンディ フィリピン
ミンダナオ島の民俗楽器。竹筒の表面を縦に切り出し、下にフレットをかませて、弦をはじく。音は小さいが、東アジアの箏類の原型と考えられる。
- ②バンジュ ウガンダ
舟型ハープ。5本の弦をはじきながら、主として歌の伴奏に用いる。
- ③ワージ アフガニスタン
共鳴箱のついた弓型ハープ。かつて広く分布したハープ属の貴重な生き残り、ヌーリスタン地方にだけある。
- ④⑤ンビラ ケニア
アフリカに広く分布する総指ピアノの俗名をもつ体鳴楽器。サンサ、カリンバなど、いろいろな名がある。
- ⑥ハッシャビーヤ イラク
イラク特有の片面鼓。奏者は肩からひもでつるし、両手で打つ。
- ⑦コモック インド
ベンガル地方のバウルという大道芸人の楽器で、太鼓の皮の中心に取付けられたひもを引きながらはじくもの。
- ⑧ウドウっカイ インド
南インドのつづみ。民俗楽器で、主として農民や大道芸人がつかう。肩からひもでつるしてたたく。
- ⑨単皮鼓 中国

- 京劇で用いられる片面鼓。中心部を二本の棒でたたく。
- ⑩ハンド・ドラム カナダ
西北部のアメリカ・インディアンが用いる手太鼓。
- ⑪ラットル アメリカ
アメリカ・インディアンが踊りの時に用いるガラガラ。
- ⑫びんざさら 日本
日本の農民が用いる体鳴楽器で、農耕儀礼の代表的な楽器。
- ⑬⑭⑮カンリン ネパール
チベット人が宗教儀礼に用いる人骨製のラッパ。主に大人の尺骨や大腿骨を用いる。
- ⑯⑰ダマル ネパール
チベット人が宗教儀礼に用いる人骨製の太鼓。頭骸骨を二つ背中合わせにし、人間の皮を張る。ひもに取付けられた豆状の撥を振って打つ。
- ⑱コーラ セネガル
西アフリカに広く分布する撥打楽器。主として職業音楽家のグリョが各地を回って歩くときに用いる。右左の手で短かき把手をもち、親指と人差指で二面に張られた弦をはじく。
- ⑲インドの蛇使いの笛
- ⑳ブルガリアの笛
- ㉑バリ島の笛
尺八に似ている。尺八と篠笛のあいだのよう

- な音色。
- ㉒タイ国の笛 中頃の向かって左から吹くと、和音がでる。
- ㉓②④ネイ イラン
箏で作られた縦笛。
- ㉔トガリ フィリピン
ルソン島北部の山岳民族イゴロットの鼻笛。トガリ(ガはガの鼻濁音)と発音する。鼻で吹くため音は弱々しいが、美しい音色である。
- ㉕ソベル ソビエト
ロシア共和国の民俗楽器。レコーダー式の縦笛。
- ㉖ドザレ イラン
双管クラリネット。歌の伴奏や踊りの音楽に用いられる。
- ㉗フルヤ ハンガリ
レコーダー式の縦笛。
- ㉘アナタ ポリビア
インディオの縦笛。木製。
- ㉙ホラネク スリランカ
オーボエ属の縦笛。
- ㉚唢呐 中国
オーボエ属の縦笛。
- ㉛クルイ タイ
竹製の縦笛。
- ㉜能官 日本
能に用いられる横笛。
- ㉝バンスリ インド
横笛。
- ㉞縦笛 アメリカ
アメリカ・インディアン製の縦笛。名称不明。



群芸「鳴神」 芸能山城組
1980年公演
歌舞伎十八番「鳴神」をもとに、日本の祭り、仏教音楽、ロック、モダンダンス、東南アジアの表現などを盛り込んだ、群衆的表現による全く新しい劇場用芸能。

ラバナ王ランカ国王
ガルダ 神の使い鳥



「ケチャ」とは、バリ島古来の呪術的習俗「サンギヤン」とヒンドウの叙事詩「ラーマヤナ物語」とが結合して芸能化されたもの。アヨタ国の王子ラーマの妃シータに横恋慕した魔王ラバナは奸計によりシータを略奪するが、ラーマは猿軍の支援を受けこれを奪還する。音楽・美術・舞踊・呪術などの要素が渾然一体となった異色かつ驚くべき芸能で、世界的に注目を集めている。バリ島以外では上演不可能といわれていたものを芸能山城組が世界に先がけて上演に成功した。

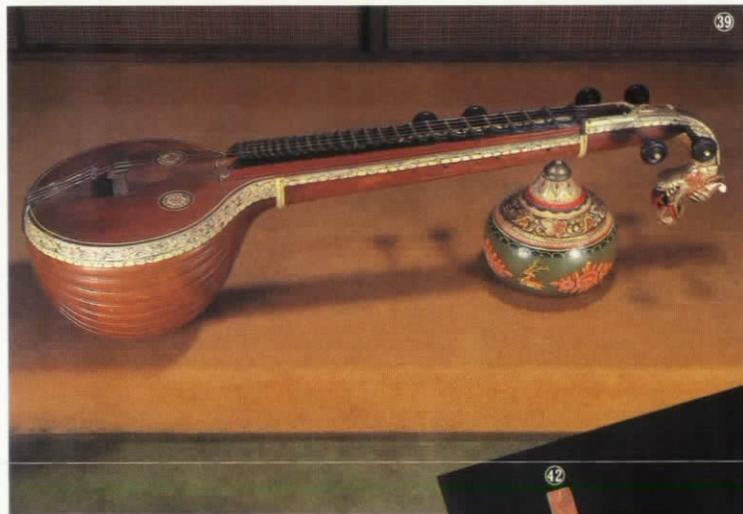
郷音き。



③7



③6



③9



③8

③9 ヴィーナ インド

南インドで用いられる代表的な撥弦楽器。右手の人差指と中指にはめた金属性の義甲(つめ)ではじく。奏者は球状の共鳴器を左ひざの上のせて楽器をかかえる。

④0 ラバープ アフガニスタン

アフガニスタンのほか、パキスタンにも、またインドのカシミールでも用いられる撥弦楽器。

④1 チカーラー インド

北インドの農民が用いる撥弦(弓奏)楽器。

④2 トウグナ ネパール

ネパールの農民が用いる撥弦楽器。



③6 カマヨナ トルコ

アラブ諸国やトルコで用いられる撥弦楽器。左右の人差指にはめた義甲(つめ)で引掻くように弦をはじく。

③7 サントウル イラン

イランを中心とする西アジアで用いられる打弦楽器。軽い木で作ったミズラープ(棒)で交互に連続的に音をたたく。

③8 ウード エジプト

アラブ諸国やトルコで用いられる代表的な撥弦楽器。右手に持った鳥の羽の翹ではじく。指盤にはフレットがないので、微少音程を自由に使うことができる。

歌は国境を越えられるか 民族性と国際性



●出席者

遠山 一 (ダーク・ダックス・国際交流研究部会)

喜早 哲 (ダーク・ダックス・国際交流研究部会)

佐々木 行 (ダーク・ダックス・国際交流研究部会)

高見 沢宏 (ダーク・ダックス・国際交流研究部会)

石井 好子 (歌手・国際交流研究部会)

【司会】服部 克久 (作編曲家・国際交流研究部会)

服部 21世紀フォーラムで、「ダーク・ダックスを中心とした「国際交流研究部会」

自分達の歌を強いて歌わせるかどうか」という質問を小泉先生にしたんです。そ

が、いろいろな分野の方に入っていたので、できまして、これまで二回ミーティングをやったわけです。第一回は村上兵衛

うしたら「そういうことはない」と。でも、骸骨に対しては敬意を表して丁寧に申う。「ではその時、相手方の歌を歌うか」と聞いたら、「そういうこともない」。マンガ(佐々木)とさっき話したんだけど

衛さんを講師に迎えて、「国際文化交流」という大きなテーマでお話いただき、

も、マンガは、相手の歌を歌うのは、かなり、ゴマスリ精神がなければできないことだと

第二回は小泉文夫さんをお迎えし、「人なぜ歌をうたうか」というテーマで、大

変おもしろいお話を伺いました。

今日ご出席の皆さんは、みな外国で演奏した体験を持つ方ばかりです。今日

は、そのあたりの体験から、音楽を中心に国際交流について話し合いたいと思います。

首狩り族が歌うのは

佐々木 歌って聞かせるというのは、やはりゴマスリの精神がなければだめなんだよ。首狩り族にはそういう発想がないとすれば、ある程度文明が芽生えてきて、ゴマスリは少し利益があるという段階になれば、原始的ではあるにせよ経済関係などが発達してくると、相手の歌を歌うということがあるんじゃないかという

遠山 第二回の部会で、「首狩り族の侵略した方の部族が、侵略された方の部族に、

高見沢 文明が発達してきたら、むしろそういう関係は成り立たなくなってくるんじゃないかなと思うんですけどね。

首狩り族が歌うのは

遠山 だけど交流というものが、ギブ・アンド・テイクであるならば、何らかのメリットが自分になれば……。

話。

高見沢 文明が発達してきたら、むしろそういう関係は成り立たなくなってくるんじゃないかなと思うんですけどね。

喜早 だから真剣になって、汗みどろになつてハーモニイさせている。

遠山 だけど交流というものが、ギブ・アンド・テイクであるならば、何らかのメリットが自分になれば……。

佐々木 相手の顔を見て、車座になつて、汗かきながらウウウと言っているんだって。

高見沢 この間の会に石井さんはいらつしやらなかつたから、若干説明させていただく、首狩り族が首狩りに行く前に歌を歌う。これは、西洋音楽の影響を受けていないのに、とてもきれいなハーモニーを出すわけ。ハーモニイが合わなかつたら首狩りに行けない。というのは、攻めて行く側の人心がそろっていないから絶対にはけると。だから、死ぬか生きるかの音楽なわけよ。

高見沢 商売だったらともかく、民衆はそういうことはしないでしょう。

高見沢 原始的ではあるにせよ経済関係などが発達してくると、相手の歌を歌うということがあるんじゃないかという

石井 でも、向こうが強そうだから、やつつけられないために、歌でも歌って機

高見沢 原始的ではあるにせよ経済関係などが発達してくると、相手の歌を歌うということがあるんじゃないかという

石井 でも、向こうが強そうだから、やつつけられないために、歌でも歌って機

高見沢 原始的ではあるにせよ経済関係などが発達してくると、相手の歌を歌うということがあるんじゃないかという

石井 でも、向こうが強そうだから、やつつけられないために、歌でも歌って機

高見沢 原始的ではあるにせよ経済関係などが発達してくると、相手の歌を歌うということがあるんじゃないかという

石井 でも、向こうが強そうだから、やつつけられないために、歌でも歌って機

佐々木 団結の手段ですよ。

嫌だろうと……。

佐々木 長安あたりで非常に胡姫がもてはやされたのは、憧れもあっただろうけど、一つには自分達の勢力範囲にあるイランの娘を連れてきて、踊らせたり、歌わせたりして喜んでいただということがあったわけでしょう。漢民族はあの旋律はできないんで、当時はおそらく歌わなかっただろうと思う。これはやはり、文明がかなり発達してからのことでしょう。

喜草 首狩り族の段階においては、相手が出来たから、相手の歌を歌おうなんていう知恵はないんじゃないかね。

服部 首狩り族である以上は、交流は必要ないんだな。

喜草 孤獨な民族だからね。

「芸」を通じて感銘を与える

服部 ソ連に演奏旅行に行ったとき、毎



服部克久

日「ともしび」を歌ったでしょう。僕は、

この歌の時はピアノを弾かないで、じつと座って聞いていたんだけど、細かいところまで分かるわけね。あつ、ここがまたハモらなかったとか、ここはよくハモッたとか。ある日、どこもミスなく終って、ああ今日は何もなかったなと思っていたら、すごい拍手が来た。あの時、こういう積み重ねみたいなのが、一つの

「芸」で、毎日同じことばかりやってたのが、積み重なって完成されて、それが向こうに分かるという、そういうことを非常に感じた。特にあの時は、初めて外国人の前で歌うんで、みんな凄く緊張していたでしょう。

佐々木 緊張もしていたし、ソ連の端から端まで行ったり来たりすると、時差もあるし、それと、食いのものが急に変わると、コンディションがなかなかそろわないということがあつた。

喜草 歌は国境を越えられるか、音楽は国境を越えられるか、これは非常に微妙だね。言葉があるのが歌でしょう。

佐々木 音楽はほとんど越えているわけでしょう。たとえば今日本は、ベートーヴェンやバッハ、モーツァルトは受け入れられているわけなんだから。

服部 その分においては、大多数がテクニクとしてしか越えていない。たとえば、或る人がオーケストラで、バイオリンのコンサート・マスターになったとかいう形。それはテクニクでしょう。

佐々木 でも、聞くことの好きな人は多いじゃない。

高見沢 ゲタさん(喜草)が言ったのは、それ以前の問題だよ。日本が西洋音楽を急に取り入れた明治維新から共通の場ができたんであつて、そういう共通の場がない時に、果してやれるかどうかを考えた方がいいんじゃないかと思うんだ。

ゲタさんが言いたかったのは、たとえば日本の民謡を西洋に持って行って聞かせ

て、果して共感を呼ぶかどうかということ。これは疑問だと思っただけね。

遠山 だけど僕は根本的に言つて、相手に通じるものは何かという疑問をソ連で感じた。われわれがソ連に行つて成功し、じゃあわれわれの歌は、そこに通じる、それだけの水準があるかと自負した点もある。しかしもう一つ、あそこでおかしかったのは、ベニー・グッドマンのバンドと、渡辺弘とスターダスターズがちょうど一緒に公演して、スターダスターズの方が評判が良かった。あの時点でとても疑問を感じただけだね。

服部 何に疑問を感じたの。

遠山 やはりジャズとしては、ベニー・グッドマンの方が上であろうと。常識的に考えてもね。だから、芸術性なり芸域が、高度であるとか低いとか、そういう問題じゃない、違うものがそこに存在する。ハートというか何と言うか分からないけれども、それが「芸」を通じて相手に感銘を与える方が強いのではないか、という考えを持ったわけだね。だから、全く分らない民謡であつたにしても、その演奏を通じて、あるいはそのメロディを通じて、相手に何らかのものを与えれば、感銘を与えることは不可能ではないんじゃないか、という気がするんだけど。

高見沢 でもそれはすごく微妙な点で、エスキモーの歌を聞いても、エキゾチックには感じるけど、音楽として共感を得ることは、僕はないわけだよ。

遠山 それは、録音で聞くことと、生で

聞くこととの違いだろうと思うね。

高見沢 そのへんは僕はまだ疑問を持っている。

喜草 ベニー・グッドマンと渡辺弘の差は、音楽ではなくて、一つのショーとして、エンターテイメントとしてウケたというふうには僕はある。

石井 大部分の人達は楽しみに行っているんだから、楽しく一晩を過ごして、楽しかったからたくさん拍手したということよね。感激したかどうかは分らない。みんなそれまでは、あまりジャズを聞き慣れていないわけ。そうすると、高度なジャズは、かえって心のなかに受け入れにくい。シャンソンの場合でも、同じだと思ふ。ある種の歌は、少し聞かないと受け入れにくいものがあるわけでしょう。そういうことであつて、音楽の本質の話じゃないと思う。

佐々木 僕もそう思う。僕らも、ヨーデルの歌を三つぐらいやって、その間に仕種が入るといふ、スイス・メドレーをやつたんですよ、初めの頃。とてもウケましてね。誰でも分ると。

エキゾチズムを逆手にとる

石井 私が初めてパリで歌い出した頃は、日本人は珍しいし、東洋の歌姫って感じで受けとりたがる。やはりエキゾチズムを求められるわけね。私はフランス人のなかに入つて、フランス人と互角でいきなたいと望むんですけど、ところが向こうは違う。そういうところに非常にギャップを感じて、辛くなるんだけどね。

仕方がないから、フランス語の歌も歌いますけれども、日本の歌も歌わないわけにはいかない。プログラムの組み方などいろいろ悩むわけです。私が歌っていた日本の歌は、「中国地方の子守唄」とか、橋本国彦さんの「田植え唄」とか……。

服部 ある程度日本の香りがするけれど、西洋音楽の形をとっているというものでしょう。

遠山 「田植え唄」なんかは、嫌でも手を叩きたくなるような詩。

服部 その時どういう格好で歌ったんですか。

石井 初めは着物を着たんです。そのうちにレビュウなどではいろいろ着ましたね。フランス風になったり、人魚やエジプト、インドのお姫様になったりね。でも、いつも日本の舞台みたいなのをつくられるから、日本的にならなければいけない。やはりエキゾチズムからなかなか離れられない。

佐々木 袴を着て歌ったらウケるんじゃないかと、そういうことをよく言われましたがね。こっちは、そうじゃなくって勝負したいわけですよ。

服部 外国の芸能人が来た時に、やはりわれわれもそういう見方をしているんじゃないかな。

高見沢 日本人は特に寛容だからな。

服部 たとえば、フランスから来たジャズマンというと、何となく信用できない。シャンソンを歌えというようなことを言うでしょ。僕らが芸を見せる時も一般性

を見せるわけでしょう。これは抜け切れないし、それを拒否する必要はないという気もするんです。

高見沢 でも、僕らの目で見て、非常にくだらないことをやっている外国のタレントが来て、それが大ウケするということがあると、僕は日本人が信用できないんだけど。

喜早 くだらんというのは、バク(高見沢)の価値判断だ。

佐々木 やはり音だけじゃない要素がた

くさんあるからね、ファッションとか、若さとか。

服部 特定の国の国民が音楽を理解でき

て、ある国ができないということは、僕はないと思う。嗜好性の問題はあるでしょう。ある種の音楽が非常に好きだから

こそ、聞く耳も肥えるし、好きな人が多

いということだと思ふんだ。ジャズ志向

の曲は、どうしても日本では受け入れら

れないんだよね。高級、低級じゃなくて。

高見沢 僕が言っているのは、高級、低

紙じゃなくて、精神構造の問題なわけ。

要するに日本人は本質的に音楽趣味がな

いんじゃないか。西洋音楽の趣味は、教

育によって徐々に芽生えつつあるかもし

逆にいえばあるんじゃないか。

石井 ただそれは少ないと思ふのね。たと

えばソ連の歌手がくるわね。私達はソ

連の民族衣装を着てもらう気もないわけ

よ。普通の格好をして歌ってくれても、

その歌が良かったらそれでいいと思ふん

だけだね。

高見沢 舶来志向というか、そういう意

識は日本人にはあるからね。外国から来

た者に対しては割と寛容だと思ふ。

石井 それと同時に、日本の方がたくさ

んいろんな人を見ているから受け入れま

すよね。向こうの人は日本をよく知らな

いし、日本の音楽は聞いていないから。

喜早 西洋文明への憧憬が、明治からず

つとあったわけでしょう。今でも僕らに

はある。日本人一般にもあると思ふ。だ

うんで、もう嬉しくて拍手し続けている

わけ。トニー・ベネットだからうまいと

決めたわけよ、その人は。だから名前に

よって惑わされることもある。たとえそ

の人が歌手として問題があっても、良か

った人はいんだと決めている。

服部 フランス人でもあるよ。僕がパリ

へ行った時、バンベルグ交響楽団という

ドイツのオーケストラを聞きに行ったら、

すごい拍手でね。ところが、最後にアン

コールでラベルをやったら、みんなウォ

ーと。あくる日の新聞にも、あのラベル

はひどかった、つまりドイツのオーケス

トラだから、ラベルはひどかった。僕

はそんなにひどいとは思わなかった。フ

ランス人は、先入観が半分はあると思ふ。

もしコンセルコロンヌとか、コンセル

バトワールのオーケストラだったら、多

少ミスがあっても、ああ良かった、絶

対に言ったと思うんだ。それは逃れられ

ないことならば、それをうまく使う。た

とえば、イーストという日本のロックグ

ループが、アメリカに行った時に尺八を

使ってウケた。それを元にして何かやる

とか。つまり逆手にとっていくことがエ

キゾチズム。有名になってから、好きな

ことをやればいじやないかという方法

もある。

高見沢 それは音楽とは違う部分だよ。

服部 大衆音楽ということを、僕は言

たいのね。

高見沢 大衆音楽とか、芸術音楽とか民

謡とかに分けるのが、おかしいんじゃない

いかな。

服部 クラシックは、テクニックが先でしょう。大衆音楽の場合は、見せる要素

がかなりあるんじゃないかなと思う。

喜草 それに大衆音楽は、今はフアッシュンなしには考えられない。

高見沢 それは、音楽ではないと把えなきゃいけないことだね。

喜草 音楽は音を楽しむことと言うなら、やっぱり音楽かもしれないと思うんだよ。フアッシュンも楽しんでいる。たとえば、「リサイタルをやります」と言うし、「じゃあ見に行くわ」と言う。音楽だけでは

ないけど、音を楽しんでいることは事実。**石井** 会えるという感じも一つあるのね。

喜草 生に会えるというのは、恐ろしいもんですよね。

歌にも言葉の壁がある

服部 もし大衆芸能というような言葉、あるいはそういう要素があるとすると、あるいはそういう要素があるとすると、ば、われわれが日本人であるという背景は逃れられないよね。

喜草 非常に中途半端だと思っただけです。明治時代に西洋音楽がとり入れられて、僕らは西洋音楽で育てられてしまっただけ。だから日本音楽を聞いても、浪花節か、常磐津か、小唄かさっぱり分らない。そういう教育をされちゃっている。それでいて言葉は日本語でもって教育されてきている。音楽は日本的な音楽を受けつけないくせに、言葉は日本語であるというギャップがある。フランスの歌手やアメリカの歌手は、自分の国の言葉で世界

を席捲できるわけだよ。日本語で世界を

席捲しようたつてできないわけだね、今は。大変なハンディキャップがあるわけ

だ。ところが私達の心のなかのメロディ

とか、言葉のない部分においては、全部西洋音楽なんだ。だから非常に悲劇だと思

います。

石井 私達は外国人に、今の日本人達が作曲しているものを聞いて欲しいわけ

でしょう。ところが、何だ、フランスのと同じじゃないかと言われちゃう。仕方がないから、「田植え唄」とか「中国地方の子守唄」ぐらいの、妥協できる線で、自分の好きな歌を選んで歌う。

喜草 それだったら、完全に日本音楽で育ててくれて、小唄や常磐津を教えてくれた方がよかったですよ、思うことがある。

歌舞伎を見たつて、言葉が全然分らないもの。日本の音楽を知らなければ国際交流にならない、と聞いた時には、ああ俺は駄目だなと、家に帰って非常に悩んでね……よく寝ましたけどね(笑い)。

石井 やっぱ外国を相手にしなければ、あまり悩まないわよね。日本のなかで歌っている分には悩みはないと思う。日本のなかにいけば、演歌であろうと、タンゴであろうと、それなりの形で、ファン層は違っても受け入れられますよ。ダーク・ダックスといったら、ああいう歌を歌う人というのがみんなの頭の中にあって、ソ連の歌を歌ったとか、アメリカの歌を歌ったとは言わないもの。

服部 だから交流する時に、自分達の音

楽は何かということ認識することが必

要だと思っただ、それが非常にむずかしい。

遠山 相手が分るだろう、ということ

を基盤に置くよりしようがないんだよ。

服部 現在自分がやっている音楽をもとにして、という意味?

喜草 僕らが教わっている西洋音楽は、とりあえず西洋の人には分るわけだよ。

でもそのままやったら、フランスの音楽と一緒にやると言われる。仕方がないから、微かにある日本の知識を西洋音楽の上へ振りかけてやって、エキゾチックだと思わせる以外に手はないんだよね。

遠山 あるいは日本の民謡のなかで、こ



遠山 一氏

れなら分るだろうという期待をもつてやるしかしようがないと思う。

喜草 克久さんは、国際音楽祭にいろいろな女性歌手を連れていくね。そういう場合どうかしら。

服部 とりあえず着物を着てもらいたいたんだね、向こうは。ただし、ああいう場合は特殊だと思っただ。というのは、いろんな国の人に来て、いろんな国の人がある一つの標準の音楽を歌うわけね。インターナショナル・ポップスというよう

すと、あぶといという評価を受ける。だから、そういう一つの了解が成り立って

うえて音楽祭をやっているわけだから、あそこが今のところ、いちおう音楽の世

界ではフェアな……。

高見沢 それはやはり、西洋音楽の音楽祭なんだよね。

服部 インターナショナルという場合、

いい悪いじゃなくて、現在の状態として、それが一つの標準になっちゃっているわけだ。その方向へ行ったらいいの、それとも自分達でもっと日本のいいものを見つけて、たとえばタンゴみたいに、国際的に認められていく方向に行けばいいの、むずかしいね。結局、誰も認め

てくれなかったらあり得ないんだから。

喜草 西洋音楽の教育を受けた僕達は、西洋音楽のメロディを聞けば、いいメロディだな、美しいハーモニーだなと分るけど、言葉が入ったら分らなくなっちゃう。だから言葉を使わない演奏家、バイオリニストとか、ほとんど海外へ出て活躍しているのはよく分りますよ。と

いうことは、国際交流で音楽家が向こうの歌手になるためには、たとえばドイツなら、ドイツ人と一緒に生活し、ドイツ人と同じようにドイツ語を喋り、そして歌う言葉もドイツ人と同じように、よく分るドイツ語で歌った人が成功しているわけですね。僕らが日本にいて、突然ドイツに行つて、うる覚えのドイツ語でやろうとしても、なかなか無理だと思っただすよね。言葉の壁は、国際交流すべて

において大問題だと思ふ。言葉じゃないという人は言葉を良くできる人だと思ふ。歌が国境を越えるとき

遠山 僕は人種というより、個人個人の問題になってきちゃうと思ふ。日本にA、Bという二人の人間がいて、これが全く相容れないならば、国境を越えた相手のA、Bのうち、AとAの方がより緊密であるかもしれない。

高見沢 それはあり得るね。知識や感情の問題があるからね。

喜草 音楽でさえも、国の力は強いという感じがするの、僕は。

石井 日本の場合は、西洋音楽が入ってくるのが遅れているから、結局こちら側もいいものが出てこない。その間に向こうからいいものが入ってきて、それを消化しちやつて、ロシア民謡を聞いた方が日本の歌を聞くより懐かしがったりするような、不思議な感じが出てきたりしているんですよ、私達のなかには。

佐々木 音楽は、好き嫌いというのは完全



佐々木行氏

全に個人的な趣味だから、全く世界中個人的なものじゃないかしら。

服部 ただ、種によってパーセンテージが変わってくることはあるね。

佐々木 偏向はあるけれども、たとえば

ガムラン（ジャワやバリ島に伝わる民族古典音楽）を聞いて感激する人もいるだろうし、なんだ同じことばかりやっていてつまんねえじゃないか、と言う人もいるだろうと思ふ。

高見沢 音楽に対して、どういうものだろうかなと考える余裕のある人と、ただ音があつて楽しむのと、違うと思ふんだね。ガムランを聞いて好きになる人は、多分、全然聞いたことがない人よりも、音楽的な知識は余分にもっている人じゃないかなと思ふ。

喜草 国際交流をする時に、一般的な人と音楽交流するのか、お互いに音楽を下地に持っている人同士で交流するのか、これは非常に違いますね。

佐々木 この間中国へ行つて、音楽関係者だけに聞かせたけど、あれが一般大衆だったらどうかかなあ。

喜草 鎖国が解かれたときの物珍らしさが入つて、音楽ではなく、物珍らしさでウケたと思いますよ。新しいものを知つてやろうという、民衆の欲求もあるかもしれない。ソビエトでも最初はそうでもないね。最初のうちは、素晴らしいじゃない、おもしろいな、という感覚で聞いていると思ふ。そういう時は、一〇分いたら出るでしょうね、僕は。そことこの問題だよな。

服部 そしたら音楽は、勉強しなくては分らないものばかりが多くなる。

高見沢 でも、絵もそうだし、字だって習わなければ読めないわけですからね。

だから音楽をより楽しみたいと思つたら、やはり音楽の勉強をするべきだと思ふんだよね。

石井 私がシャンソンをいちばん初めに聞いたのは、リュシエンヌ・ボワイエが歌つた「パーレ・ムア・ダムール」なんです。きれいなメロディをきれいな声で歌つたから、シャンソンていい曲だなと思つて大急ぎでレコードを買いに行ったの。その頃はシャンソンなんて人が知らない頃で、「これが素晴らしいですよ」とくれたのが、イボンヌ・ジョルジュの「ナントの鐘」だったんです。牢屋で死ぬの生きていると、シヤガレ声で大騒ぎな歌でしよう。それを聞いて、シャンソンてこんな嫌らしい歌かと思つて、一度聞いただけでしまつちやつた。その後アルバムが出たから、いろいろな人の歌を、何度も何度も聞いていた。そして三、四カ月して、そう言えば変なものがあつたつて思つて出してきたら、ああ、この人はこう歌っているからこうなんだ、というのが分つて、ゾツとした声の一つの魅力だということも分りかけて、それでシャンソンに入つていったわけ。取りつきにくい歌がある。だから、頭からつまらないもの、むずかしいものですと決めてしまわないうで、少し分ろうと努力して欲しい。好きな音楽が、たくさんある方が幸せだからね。

遠山 国際交流の質と云つていいかどうか分らないけど、大勢の人間に浅く喜ばれるか、あるいは、少数でもいいから、

心のなままで深く理解してもらえるか、ずいぶん違うと思ふんだね。

実績の積み重ねが交流を生む

服部 国際交流は、自分が持っているものが、別の国に受け入れられることとするならば、自分の持っているものは……。
高見沢 もっと真剣に、持つていくものを考えなくてはいけないわけだね。



高見沢宏氏

服部 現実に、じゃあどういふものを持つていくかというのを考えるよりも、

何べんも受け入れられていくというか、実績を積み重ねていくことが、国際交流のとりあえずの形になっていく。どういふ形を持つて行くかは別にしても。たとえばダークのパリ講演が、十回とか二十回とかになりましたと言つたら、成功なわけ。とりあえずダークの歌っている音楽が受け入れられたと。それが、十回が二回になつたら失敗なんだよ。

喜草 現実的にはそうだと思う。

服部 そういう形が積み重なつていくのが歴史であり、それが結果なんだよね。
高見沢 それじゃ突然理想論になつちゃうじゃない？

石井 結局ね、「これなんだ」という持つていくものがないところの淋しさね。手探りみたいなものを、いくらぶつてたつ

てしようがないという気があるのね。自分が納得して、自信を持って、さあ聞いてくれ、というものがあって行くなりくいけど、おたおたしながら行くんじや気合いもかからないですよ。

佐々木 僕らも一ぺんそういう経験がある。現代の日本の歌を一部持っていたんですけど、一晩でプログラムを変えた。

喜早 日本でそのままコンサートをやっても恥ずかしくない、というプログラムをソ連へ持つていくことにしているんです。アテンションするために、途中にロシア民謡を入れる。これは絶対必要なことだと思っておりますよ。

石井 それは私にも良く分るのよ。私自身、ドービルのコンクールに出た時に、フランス人がフランス語で書いた歌を、私が歌ったのね。ところがそのフランス人は、非常に日本的な雰囲気を書いているのよ、私のために書いたんだから。がぜん夜の塔、五重の塔なんかが出てくるような感じなのよね(笑)。そこすると私はしようがないから着物を着ちやうわけ。もう仕方がないと思ったの。みんな喜んでくれるばいんだ、自分は日本人なんだからいいじゃないか、というふうに居直るわけだけど、結局いつも、日本というイメージで向こうは見たがる。

そうでないときは、外国風のものをつくって歌ったって、こっちの真似したってしようがないでしょう、と言われちやいな感じだね。

遠山 でもそれは、あまり意識する必要

がないような気がするんですけどね。**石井** だんだん意識しないようになってきていると思う、私は。

喜早 僕らがソ連へ行つて、ロシア民謡を歌う場合、ロシア人の歌うのと全然違う解釈で歌っているでしょう。だからいいんだと思いますよ。



喜早哲氏

遠山 石井好子であり、ダーク・ダックスが外国へ行くんであって、日本の音楽

が行くわけではない。だからそこに、自分なりの日本の音楽を加味したものが入っている、それでいいんじゃないかね。**石井** 私がシャンソンに深く入っている

て、フランスのものを好きになつて、ということ、フランスにとつて、私は交流家なわけよ。でもフランスから日本に来て、小唄や清元に凝っている人は、数から言っても少ないわけでしょう。

服部 小唄だったら、伝統文化の研究会になつちやうものね。

津軽三味線も世界に通ずる

喜早 さつき僕は、言葉の壁は取り除き得ないものであると言つたけど、ただ一つ微かな希望はある。外国の演奏家が日本にきて、その国の言葉で歌う。フランスとかアメリカは、こっちが向こうの音楽を習つたわけだから、理解しようとする

力している。しかし、ベラ・フォンテが小さなベネズエラという国からきて、彼が舞台で、さっぱり分らない言葉で歌っているけれど、シヨリのな部分が加わっているものだから、感激する。全然分らないことを言っているんだけど、興奮してくるんだよね。それと同じ方法を、日本人がほかの先進国へ向かつてとれないかと思うんだ。

遠山 だけど、それを何でもって表現するかというのがとても問題だと思つよ。

声にしても、日本人は決していい声の民族ではないしね。体のバランスから言つても、踊れる民族とは……。

服部 これからは、声がいい人が売れるわけでもないし、世界的にも、声がいい人がうまいという評価ではない。そう考えれば、生活が多様化すれば、いろんなところへ入り込めると思う。

石井 私達の父や母の時代は、英語ができる人は少なかったわけでしょう。今は、都会では英語をできない人の方が少ないくらいじゃない。風習のうえでも、ナイフとフォークを持って、どうしようかと考え込んだりはしないように、すべてが変わつてきているわけよ。少しづつ、少しづつインターナショナルになつてきているんだから、このなかから、インターナショナルな歌手が出てくる。これから国際交流ということにならないかしら。

高見沢 西洋人に近づいているというだけであつてね。

服部 そうも言えるけど、一面、今さら

われわれから西洋のものを全部とれないものね。文明というか、血になりつつあるんだね。

高見沢 だけど、西洋人そのものじやないものね。

服部 メディアだよ。一つの文化ではない。

喜早 ソ連へ行つた時に、地方へ行つて、ロシア民謡の歌い手ですという、有名なおばあさんが歌つてくれたんです。まるで日本の民謡を、こぶしを入れて歌っているのと同じで、僕は理解できないんですよ。今のロシア民謡は、それを分るようにして演奏している。ベラ・フォンテの田舎へ行つたら、やっぱり僕は分らないものがあるんじゃないかと思う。それを今のようにして、彼は日本へきて演奏していると思うんだ。だから、日本のどこか奥地にあるものを、うまくアレンジして持つて行くことは、一つも悪いことじゃない。そういう方法を、これから探つたらおもしろいんじゃないかなと思う。たとえば「津軽三味線」だって非常に興奮しますよ。あれをもつと洗練させたら、きつと世界に通じるものになると思う。

服部 国際文化交流という意味は分つても、じゃあ何を交流するか、われわれがこれから日本人として、何を世界に誇れるものとして持つかということが問題になる。そういう意味では、二回のミーティングは非常にいいところからスタートしていますね。



A POINT OF VIEW

關係

森山大道

私の近況

加藤芳郎さん



■元気でいることはありがたい

大手術二回という二年間の闘病生活から復調、人生五十年にして、生きていくことが、改めて初々しく感じられる毎日を送っておられるようだ。めまぐるしい日々を過ごしている現代人のために、「加藤健康語録」を編纂してみると――

「毎日が感謝の気持。元気でいることはありがたい」

「おもしろいことって、あるのかなあという感じだったけど、おもしろいことは自分で探すもんだ」

「毎晩、二十分くらいのコースを歩いたり、軽く走ったりしているけど、真冬などね、玄関を出るとき（加藤さんの家の玄関は北向き）、イキがかりつていうか、北風の中でも一人でできる、一人で歩ける、という喜びなんか感じたりして……」

「風呂へ入ると、ふくらはぎが固くなっていくのが分かる。ベッドで寝ていて、プラプラになった筋肉が」

「二十一世紀のサバイバルは、健康

が一つ。一病息災の時代になるのかな……」ある映画評論家曰く「世界の巨頭はすべて病氣もち」

三〇年間、新聞、週刊誌とスケジュールに追い回されるような毎日、「何でこんなじ」という気分になるときもあったというが――

「仕事部屋に入るにしても、さあ、やるか。シヤバに戻って仕事をすれば、社会に伝達するんだなあ、サア描くぞ、という気持になれる」

「白紙に向かうのが楽しみになった。やってやろう、という若いときの嬉しさが戻ってきた」

「えっと、今日なに描いたかなあ」と忘れてしまうのは、納得のいく作品ができた証拠だという。散歩のあと、風呂あがりのビールを一杯。爽やかな閃きに活躍を期待！

（加藤芳郎部会会）

天地総子さん



■六年目の初心・初陣です

「独身最後のリサイクルから数えて六年目の六月、妻・母の体験を加えて

の初陣を果たす事と相成りました。

母は強しの言葉通り、足腰は益々鍛えられ、胸は一層ふくらみ（希望にです）、片時も目を離せない娘によって、反射神経と声量よりは更に磨きをかけられています。どうか鋭くも暖かい目でごらん下さい。お聞き下さい……」という案内状をいただいたのが五月末。六月十二日から十五日までの四日間、銀座八丁目の博



品館で、天地さんの「フーコ」の気まぐれコンサート」が開かれた。

ミニミュージカル「タップダンス」をはじめ、歌、踊りそしてお喋りとバラエティーに富んだ舞台に、「あなた、どこからあのエネルギー出てるの」と友達にも感心されたとか。やはり、「母は強し」なのかもしれない。

片時も目を離せないという、お嬢さんの希衣子ちゃんも二歳四カ月。

「甘えんぼうなんてですよ」とはいうものの、お母さん思いのおしゃま振りを見せているようだ。家で稽古をしていて、歌いながら涙を流すと、「お母さんやめなさい、泣くからやめ

なさい」と心配顔。コンサートでは初日に、その場で譜面を見せられてぶつつけ本番、「キエコマイラブ」を歌った。この曲は、「夢はかなうビビ

ダイバビデブ」という、これもコンサートで歌ったオリジナル曲とともに、レコード化される予定である。

「終わったらポケットとして、余韻に浸っていたんですけど……」なかなかそうもいかず、コンサート以後は希衣子ちゃんと一緒にいられる時間もあまりない。「もうコンサートやらないでしょう」「やって欲しい」「ううん」という入話だが、希衣子ちゃんとの間にあったよすがだが、「毎年コンサートを続けて行きたい」と前にも増して、歌に踊りに意欲を燃やしている天地さんだ。（加藤芳郎部会会）

榎文彦さん



■日本芸術大賞を受賞

東横線代官山駅から数分。旧山手通りがゆるやかに曲り、デンマーク大使館やエジプト大使館が立ち並ぶ緑の多い静かな街に、「ヒルサイド

テラス」と呼ばれる五棟の集合住宅が建っている。これが代官山集合住宅で、隣りのデンマーク大使館とともに、横さんがおよそ十二年間をかけて完成し、今回、新潮社の「日本芸術大賞」(絵画・彫刻をはじめ造形芸術全般を対象)を受賞した。建築家としては初めての受賞である。

集合住宅は昭和四十二年から五十二年まで、三期に分けて建設された。デンマーク大使館は五十四年に完成した。第一期に植樹された櫟がいまでは、こんもりと傘のように葉を茂らせるほどに成長している。

「この辺は、広い道路が街の骨格を作っている。東京の街はふつう狭い道路と高い塀が多くて、道路の広いところは大方高層建築で占められている。そういう意味ではこの辺は西欧的な骨格をもった街なんです。」

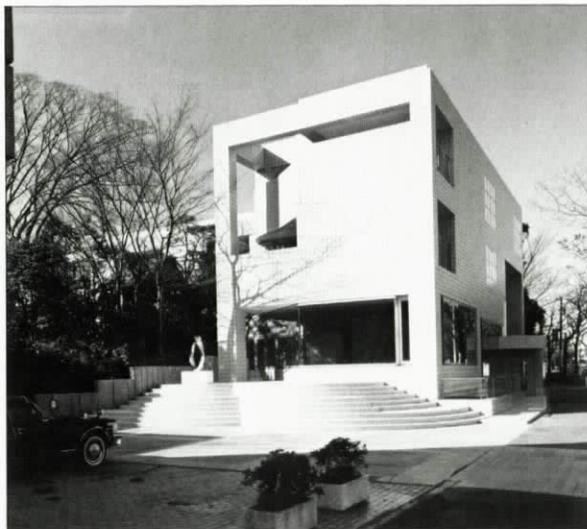
しかし、西欧的な面だけかというのと、そうじゃない。武蔵野台地の一部だし、土地の起伏や樹の植え方、道路の曲り方など、非常に日本的な姿をもっている。西

欧的な良さと日本的な良さが混在しているのがこの街です。」

そうした特性を生かし、建物自体は西欧的でも、建物の配置や間とり方、植樹の仕方は日本的——「その点がユニークといえればユニークかもしれない」と横さんは謙遜した口調で話された。

ここは高度制限十メートルの土地である。「十メートルが親しみやすい高さというところは、建築家は誰でも知っているんですが、地価や都市計画と絡んで、なかなかそういう条件のところは少ない。……基本的な条件をつくるような街づくりが必要ですね」と横さんは結んだ。

(松本重治部会)



代官山集合住宅第3期D棟 撮影/田中宏明

斉藤志郎さん

■シンガポール・六月

昨年三月、中国大陸経由でシンガポールに入り、アジア報道の「ベース」をこの地に定めてから、はや一年数カ月たちました。この間、マニラでのUNCTAD(国連貿易開発会議)総会、インドネシア・バリ島のASEAN外相拡大会議、スリランカのコロナボでのSID(国際開発協会)年次会議から転じて、英オックフォード近郊のデイチレーでの「南部アフリカ資源セミナー」、その帰途アラビア半島のオマーン、ドバイ、対岸のイランを回りました。今年は一月初めにアフガニスタン危機発生直後のカブールに公式ビザが入国、米ソ新冷戦の冷気を肌で感じました。その後、六月に中東のサウジアラビアとエジプトに足を踏み入れ、昨年のイラン訪問と合わせて回教パワールの種々相に触れて帰ったところです。

シンガポール空港を出入りするごと十数回。アジア・中東一円を駆け回ることはいいとしても、関心領域と問題意識が拡散してばかりいては困りますので、やはりなんらかの方向に収斂せねばと考えています。東京を出るときの自らに課したテーマ

は「アジアの近代化」への視点をつかむこととしたが、これは巨象の体を触れるようなものでなかなか容易な問題ではありません。

一つの手がかりは、シヌーマツハの西欧型近代主義批判の視点ですが、アジア諸国の政府の政策レベルでは大きなギャップを感じざるをえません。シンガポールのような「スモール・イズ・ビューティフル」にかっこうと思われる国でさえ、西欧



型近代化の夢につかわれているように見えるからです。

もともと、西欧モデルのネーション・ステートの次元で「スモールの世界」を求めるとが無理とすれば、やはり民衆レベルのいま一つのアジアに目を向ける以外に道はないのかもしれない。

(シヌーマツハ)『人間復興の経済』および近刊『混迷の時代を超えて』はいずれも斉藤さんたちの翻訳で紹介された)

(茅誠司部会・在シンガポール)

茅誠司部会

●昭和54年10月25日

テーマ「核融合について」

スピーカー「内田岱二郎（東京大学工学部原子力工学科教授）」

出席者「茅誠司、尾関通允、金森久雄、高原須美子、中村貞、永井陽之助、橋口収、深海博明」

核融合の原理、歴史、問題点などについて内田氏から興味深い解説があった。

「核融合とは原子力であり、原子力とは、物質のなかの原子核を構成する粒子間の結合エネルギーを解放して、そのエネルギーを使うことである。しかし核融合を行うには物質の第四状態といわれる「プラズマ」をいかに安定させて閉じ込めるかにかかっており、その技術として磁力線方式とレーザー方式の二種類が研究された」

「核融合の研究は、まずソ連で着手されたがなかなか思い通りの成果が得られなかった。その後ソ連のトカマク、米国のステラレータ、英国のZETA等が相次いで開発され、特にトカマクの性能が優秀であったため世界中で同型のプラズマ試験装置が研究され始めた」

「核融合の進展度の規準は、プラズマの温度およびプラズマ密度×閉じ込め時間がどの位かということ、

今では温度は八千万度、時間は一分の一秒程度を達成し、また、自己着火をめざすプラズマ試験装置INTORを米国、ソ連、日本、EC共同で建設しようという話が進んでいる。そして「核融合技術は今はまだ生まれていない子供の様なもので、育てるのに努力や年月やお金が必要だ。だが研究者達は熱意を持って開発にあたっており、長期的な視野にたつた研究が望まれる」。そのために「自主開発の芽をいかにはぐくんでいったらよいだろうか」と結んだ。

この後討論に入り、レーザー核融合の現状と問題点、特にレーザーは軍事利用の研究が先行しており、日本との技術格差が大きいことや、日米欧の研究者人口の比較、INTORの現状、核分裂・核融合混成炉、合成燃料などについて質疑応答が行われた。内田氏は特に「今後の核融合の研究には若い研究者の養成が重要課題である」と発言、地道な努力が何よりも大切であることがうかがわれた。

最後に茅氏が「かつて学術振興会が核融合研究を推進すべきか否かが議論され、結論としてやはりやるべきであると。そして今やプラズマ温度が八千万度にまでなったわけ、そこで次の見学会はJT60（日本の臨界プラズマ試験装置）を見学したい」としめくくった。

茅誠司部会

●昭和55年2月26日

テーマ「長期エネルギー需給見通しにおける新エネルギー開発の位置づけ」

スピーカー「山中正美（工業技術院技術審議官）・本間琢也（筑波大学構造工学系教授）」

出席者「茅誠司、有澤廣巳、生田豊朗、尾関通允、金森久雄、木元教子、五代利矢子、中村貞、永井陽之助、橋口収、深海博明、伏見康治」

オブザーバー「林雄一郎、藜目良、ロベール・J・パロン」

山中氏がまず新エネルギーと石炭液化化について解説を行った。「新エネルギーの中には全く新しいものと、存在が長年意識されていたりすでに使われなくなったものを再び掘り起こしたものの二種類がある。それらの実用化にはテクノロジ・パリアを突破できるか、経済的に引合うか、住民の合意をどうとりつけるか、にかかっている。特に新しいものに対する漠然とした不安、既存システムとの調整がネックとなろう。次に石炭液化化については「なぜ液化化を推進するかという点、①石油は代替の物に対して等価という考えがOPEC内にある。②現代のエネルギー利用形態が液体中心である。③石炭そ

のものでは環境に悪影響を及ぼす」等の理由からであること指摘した。

続いて本間氏から風力・波力を中心としたソフト・エネルギーについての解説があり、「太陽からは一平方メートル当り一・三九五キロワット、地球断面では一七三×10¹²キロワット、大気圏反射や気象エネルギーの分を引くと一二×10¹²キロワットという量をわれわれは熱として受けとっており、それが自然エネルギーの元になっていく。このエネルギーは、①無尽蔵であり、②クリーンだが、③エネルギー密度が低く、④変動性があり、⑤立地に制限がある等の問題点がある」。

次に風力について、スミス・パトナムの風車、垂直軸風車・水平軸風車の比較、風力発電のコスト計算、立地地点の選定と問題点、予想電力の確保の状況、環境への影響などバラエティーに富んだ指摘がなされた。そして波力発電についても、波というものはきれいな正弦波ではないこと、共振の問題と変動性の大きさ、特に波のデーターが充分でないことがあげられた。

続いて出席者から、石炭の液化・ガス化、灰の処理、イオウの処理から本四架橋脚の潮夕発電利用・コストの算出等についての質問が出され、幅広くかつ真剣な討論が交された。

茅誠司部会

●昭和55年3月11日

テーマー水素エネルギーについて
スピーカー太田時男（横浜国立大
学工学部教授）

出席者 茅誠司、尾関通允、金森久
雄、高原須美子、永井陽之助、松
根宗一、村田浩

人間が誕生してからおよそ一八五〇年まで、利用していたエネルギーの九割は木材であった。しかしこれは中に水分が含まれており、かつ規格化できないため炭の形で利用してきたのである。そして資源としての石炭が産業革命の原動力となり、続いて中東で石油が発見されるとエネルギーの主役は石炭から石油に移った。石油というものは原油から精製されるが、初期の頃は重油、近年は軽油、ケロシン、ナフサ等々軽質化してゆく傾向にある。そして、ガソリン、ブタン、エタンも利用されるようになったがこれは石油中の相対的な水素量の増加と一致している。しかし、この化石燃料というものは限られた量しか存在しない。その究極的なものがメタンガスであるが、これは資源といっても技術的なものの占める割合が大きい。加えて、石油などと違い再生が可能である。メタンは炭素が一個であるから、この先にいくと炭素の全く無い水素

だけのものになる。これが水素燃料と呼ばれるものだ。

水素燃料というものは今まで使われたことがなく、そもそも天然資源ですらない。これはすべて人間自らつくるものである。この特徴は、燃えると水になり有害な排気ガス等が出ない、そのまま化学合成ができることや重量当りカロリイが高いなど魅力あるエネルギーだ。水素を取り出すため水を分解する方法として、強力な酸化剤と還元剤を水の中に入れて加熱し、それぞれを酸化剤と水素化物としてとり出す触媒方式が有望視されている。この触媒として考えられているのがヨードで、これは世界生産量の八割五分が日本で作られている。また、電気分解による方法も研究されている。というのは現在の発電所というのは揚水発電以外は電力の貯蔵ができないため、エネルギーを水素の形で貯めておくからだ。

太田氏の興味深い解説の後、参加者の真剣な討論が行われた。チタン鉄を使った貯蔵方法、安全性、他のエネルギーとの関係、特に海水脱塩の時の重水素・リチウムを核融合に利用することによるエネルギー自給の展望などが論議され、水素プラントの設置方法、環境問題から交通機関への利用、そしてバクテリアによる水素タンパクの合成まで幅広い話題が交された。

加藤秀俊部会

●昭和55年6月6日

テーマーカツオ漁村の調査報告

報告者 高柳栄、若林良和

出席者 加藤秀俊、宮本常一、米山俊直、磯貝肥男、渡辺勤

鹿児島県枕崎市と高知県土佐清水市におけるカツオ一本釣漁法の調査報告のあと、討論が行われた。

一本釣漁法は、自動釣獲機が導入されても少しの時間で大量に釣るためには、やはり人が釣るしかない。マキ網を使えば、乗務員は半分で済むが、網から逃れるカツオがいると餌を与えても釣れなくなる。加えて大量に獲ることが資源の枯渇をまねき、魚道を変え、以後の漁に重大な影響をおよぼすであろう。

一本釣の餌は主にカタクチイワシである。土佐清水の場合は四国で餌をとるところがなく、水揚げ港と餌補給用の港がいつしよになつてほしいというのが漁民の望みである。

魚群の発見はメガネと呼ばれる船員が当たる。近年魚群探知機が導入されてきたが、近距離はともかく、遠くのものには探知できず、音波を発するためカツオが逃げるという欠点をもっている。

漁船や漁具の変遷とともに操業海域も拡大されてきた。枕崎では、明治期は帆船で、トカラ列島を中心に

操業をしていたのが、明治末期に動力船が導入されて、沖繩からフィリピン、セレベスまで出漁するようになり、昭和三十年代に鉄鋼船が出現すると南洋全域で活躍し始めたのである。また、強制換水装置により、餌を多く長く生かすことができるようになり、竿もグラスファイバーに変つて効率が良くなった。もちろん、冷凍技術の進歩も見逃すことはできない。

現在の漁業の大きな問題として、石油価格の上昇が与える影響は無視できない。社会全般にいえることだが、漁業もやはりエネルギー多消費型産業であり、三倍もの石油の値上りをいかに吸収するかが重要課題となろう。カツオ漁でも、餌一四キロに対しカツオを一トン獲っているが、そのために油が一・五トン位いるというのは案外知られていない。

もうひとつの問題は資源の浪費である。例えばサバ漁では餌のカタクチイワシの撒き餌の投入量は、漁獲高の約一〇倍にもおぼり、魚価の差によって採算がとれてはいるものの、そうしたことが漁業資源の激減と生態系を破壊する原因となろう。

さらにカツオが回遊魚であるところから、二〇〇カイリ問題ともからんで、国際協力による資源保護、共同開発という課題もある。カツオ漁の将来は国際的にも国内的にも一つの転換期をむかえているといえる。

第5回

松本重治部会

●昭和54年11月12日

テーマⅡ日本の教育と世界的変化

スピーカーⅡ永井道雄(朝日新聞客

員論説委員)

出席者Ⅱ松本重治、前田陽一、横文

彦、村上兵衛、柳瀬睦男

一九七四年、発展途上国が「新

際経済秩序」を国連総会に上程し、

満場一致で可決された時の前後から

情報についても自分のものとして統

御したいとの要望が始めていた。

第三世界側から見れば世界のニュー

ズのみならず自国内のニューズまで

が事実上先進諸国の通信社によって

握られているわけで、加えてテレビ

による影響や先進諸国のデータ・パ

ンクを利用できない等不満が多い。

一方、その様な不均衡を是正する上

で国家が情報に介入すると今度はマ

スメディアの大原則である自由が制

限される恐れが出てくる。そこで一

九七八年ユネスコで全会一致で採決

された「新世界情報秩序」の中には

国家の介入という語は出てこない。

そこでなぜこの様な議論が結実した

かという点、米国にしろソ連にしろ

一時期とは違って限られた世界であ

るという認識が広まってきたことと

無関係ではないと考えられる。

一方この会議は発展途上国による

ものであるため、「開発」という事に

ついて議論が重ねられた。しかし、

開発というものはひとつには公害の

様なものを生み出し、その影響は当

然ながら先進諸国の方が大きい。い

うなれば「科学とか技術というもの

が非常に単線的な歩き方をしてきた

のを、ヒューマンコントロールがで

きなかった」ことが自然環境のみな

らず、文化的環境をも破壊しつつあ

る原因の一つといえよう。つまり、

新世界情報秩序というものはその様

なコントロールを行う上で途上国以

上に先進諸国が考えねばならぬ問題

である。

その様な状況の中で大学で教鞭を

とっていると、先進国と途上国の学

生の間には違いがあることがわかる。

「発展途上国と先進国に関する社会の

発展と人間の発展」の様なテーマに

は日本や米国の学生はあまり関心を

示さない。というのは先進工業国で

はいわゆるアフルメント・ソサエテ

イが形成されていて皆が中流意識を

持ち、自己の生活の安定と幸福が最

大関心事であって自国の政治はもと

より、世界の情報秩序をいかにすべ

きかという議論は別世界の話なので

あって全く興味を持たないのである。

このような状況の中で、部会では、

これから中国はどうなるといった討

論が始まった。日本の開国パターン

が中国にもあてはまるか。教育はど

うかなどの意見が交された。

第6回

松本重治部会

●昭和55年3月25日

テーマⅡ東洋哲学の今後―イスラム

と日本

スピーカーⅡ井筒俊彦(哲学者)

出席者Ⅱ松本重治、川喜田二郎、本

間長世、前田陽一、柳瀬睦男

われわれは現在、生活の上でも地

球的規模で思考しなくてはならない

場面にしばしば直面する。この思考

の地球化の過程というのは、起源的

には西洋から発生してきたものだが、

現在ではもはや巨大な世界文明として

非西洋的地域においても科学化・工

業化の途をたどりつつあり、日本は

その典型的な例であろう。しかし、

その様な状況下では生活様式や存在

形態が均質化し、疎外感が拡大して

くることは否めない。自然を失った

日本人はまさに精神的故郷を失うこ

とになったのである。

しかし個々の問題とは別に、哲学

的な重要点として、異文化間の衝突

があげられる。ポパーは「民族は自

分自身の特殊な意味分節の網目構造

を通して現実を眺め、それがその民

族の世界観を決定する」とし、これ

を文化的枠組と呼んだ。地球化プロ

セス段階において、異文化がひしめ

き合い、文化破壊の様相を呈してき

つつある。その様な衝突における哲

学の対立項は基本的に東洋哲学と西

洋哲学の二軸であろう。その中で日

本の占める位置はユニークである。

日本は歴史的宿命として内部的セル

フ・アイデンティティの問題として

東西が対立しているが、強大な文化

圏の周辺に身を置き、外国文化の撰

取にかけて伝統があり、欧化の際に

も下地ができていた。しかしイスラ

ム諸国では西洋化に対して宗教的理

念に基づくイスラム主義が台頭し、

アンリ・コールマン教授が「東洋意

識の悲劇」と呼んでいるものに国民

を追いこんだのである。といっても

意識内的な東西ディアローグを成立

させる事は容易ではない。なぜなら

西洋思想はすでに全世界的地球化フ

ロセスの主導的要素になっており、

日本人の意識構造内においても東洋

は深層的事態になっている。加えて、

西洋哲学はひとつの有機的統一体で

あるが、東洋哲学はさまざまな思想

伝統と思想潮流が交錯し、統一性が

ない。そのため、複数形で与えられ

ている東洋哲学を、単数形の東洋哲

学に作り直す操作を行わなければ成

立てできないからである。その可能性は

われわれの東洋意識、いわば東洋的

阿頼耶識に見い出せる。日本人の場

合、意識の表層、深層に複雑な形で

混在している東洋と西洋を哲学的に

反省し直し：その第一歩として、東

洋思想の伝統の重みを、もって生き

た現代的関心において反省し、検討

し直してみる必要があろう。

加藤芳郎部会

●昭和55年2月21日

テーマⅡ米・イラン問題と日本への影響

スピーカーⅡ深海博明(慶応義塾大学経済学部教授・茅誠司部会)

出席者Ⅱ加藤芳郎、青空うれし、天地総子、大山のぶ代、大和田英

川野一宇、砂川啓介、壇ふみ、坪内ミキ子、富田純孝、藤目良、水沢アキ、三橋達也、ロミ山田、渡辺文雄

アメリカとイランというのは、かつて大変うまくいっていたが、パレヴィ国王が七九年一月に出国し、ホメイニ師が帰国し共和制に移行してのち、関係が悪化した。特に、ホメイニ師は旧権力者やそれに連なる者に反発を強め、パレヴィが入院のため米国に入国したのを契機として、アメリカ大使館占拠事件が起った。現段階での判断として、バニサドル氏はより現実的な路線をとる可能性がある。イランはソ連との間に二五〇〇キロメートルもの国境を有し、アフガニスタン進攻に際して危機感を抱いたが、米国との断交によって軍備を維持できなくなっている。その様な現状を改善するためには、ある程度欧米とも妥協しなくてはならなくなるだろう。

一方なぜソ連がアフガニスタンに

加藤芳郎部会

●昭和55年6月26日

テーマⅡ異常気象

スピーカーⅡ根本順吉(埼玉大学講師)

出席者Ⅱ加藤芳郎、大山のぶ代、川野一宇、砂川啓介、富田純孝、水沢アキ、ロミ山田、渡辺文雄

異常気象というのは国際的に定義されており、三〇年以上に一度しか起こらない気象現象のことをいう。ところが最近問題になってくる異常気象はそれと少しは異なる。それは実に数千年から数万年に一度しかあらわれない現象がここ数年多発しているからだ。一九六八年、アフリカのチュニジアで年間降雨量七〇ミリ位のところに秋の二週間に二〇〇ミリ雨がふった。その時にはじめてカルタゴ時代の橋が流された。一九六三年一月に日本で一カ月間平均気圧が極端に低くなった。これは一〇万年に一回の現象である。この頃は気候学が発達し、氷河期の気圧配置もわかるようになったが、六三年のもわかるようになったが、六三年のこの気圧配置はまさにそれであった。これは地球の気象システムが、古い体制から新しい体制に移行する過渡期に起こる状況だと考えられる。実は二十世紀前半は気候的に最も恵まれていた時代であったのである。

長期予報というのはひじょうに難

しい。一九七九年は二月が暖冬であった。これを過去と照合すると六月は低温となるはずなのである。しかし実際は何百年ぶりの異常高温であった。これはどうしてか。それは予想外のことが起ったからである。火山の爆発、太陽活動が活発になったこと、特に黒点が多い時は北半球に影響が出る。また北極の上にヘイズがかかっており、その中にバナジウムが検出された。この原因は人間である。加えて原因不明の北太平洋水温の上昇、東シベリアの山火事等によって長期予報がはずれた。

気象への人為的影響も見がせない。炭酸ガスの発生の原因も人間である。炭酸ガスは温室効果を生み、いままでに〇・六度、今世紀の終りまでに〇・六度上昇するであろう。そして数十年先には年平均気温が五〜六度あがる。

それでは異常気象がすぐに飢饉と結びつくかというところではない。食糧危機は社会システムに負うところが大きい。穀物の世界生産量一四億トンの内、半分は飼料だが、現在飢餓状態の人、四億六千二百万人に一人一日五〇〇カロリーを与えても二千五百万トンにすぎない。毎年栄養失調で五千万人が死ぬというのである。日本にも大きな無駄がある。毎年外食産業から出るくずは一千万トンを超える。七九年の米の収穫は一千三百万トンであった。

■ 第1回

国際交流研究部会

● 昭和55年4月23日

テーマⅡ 国際文化交流

スピーカーⅡ 村上兵衛（日本文化研

究所専務理事・松本重治部会）

出席者Ⅱ ダークダックス（喜喜哲、

佐々木行、高見沢宏、遠山一）、

佐賀和光、佐々木信也、堤清一、

服部克久、松原秀一、山城祥一、

吉川光、ミルトン・L・ラドミル

ビッチ

交流というものが、人間と人間との関係であり、ギブ・アンド・テイクの関係であるのと同様に、国際交流も「与えるもの」として、広い意味での「自分の国の文化」を知るところから始まる。

ところが、大学を例にとると、日本の大学というのは、西欧で教えていることは何でも教えているが、逆に、近隣諸国の言葉や事物については冷遇されていた。また、日本のことを外国人はもとより、日本人にさえ教えていないのである。勿論それは民間レベルでも同じだ。今までのわが国の国際交流は、いわば「出島方式」つまり、外人が来れば出島の様な所に留め、通辞が出向くという方法をとっていた。

ジャルパックも、いうなれば、出島が出張した様なもので、日本語だけで用が済み、外国との直接の接触

■ 第2回

国際交流研究部会

● 昭和55年6月10日

テーマⅡ 人はなぜ歌をうたうか

スピーカーⅡ 小泉文夫（東京芸術大

学教授）

出席者Ⅱ ダークダックス（喜喜哲、

佐々木行、高見沢宏、遠山一）、佐

賀和光、佐々木信也、服部克久、

松原秀一、三村忠良、村上兵衛、

山城祥一、吉川光、ミルトン・L

・ラドミルビッチ

人はなぜ歌をうたうか。この問題について小泉氏がテープを使い立体的な解説を行った。

動物が鳴くということは、人が歌をうたうということのひとつの鍵になる。バリ島のカエルはボンボンという鳴き声をだすが、ほかのカエルが鳴きだすまで声をださない。また、犬も同様にそろえて鳴くこともない。だが鈴虫は何匹いてもみごとに音をそろえる。ところが、人間のなかにもカエルのように拍子をそろえられない集団が存在する。それは「ドーナット岬文化」に属するカナダエスキモーだ。このカリブーを食べる人は合奏・合唱ができず、自分の歌に伴奏もつけられない。ところが同じエスキモーでも、「チュール文化」と呼ばれるクジラを食べるグループはリズム感がよく、夫婦や集団でうたうことも多い。この差はなぜ生じ

るかというところ、カリブーは一人でも捕えられるが、クジラは集団で協力しないと獲ることができないという点が一因といえよう。つまり、共同作業の必要性が、よいリズム感を養ったのである。それは同様のことが他の文化にあてはまるかというところと比較的あてはまっている。スリランカのヴェツダ族も共同で狩猟を行わないため、リズムが不ぞろいだ。次の段階として首狩り族を調査した。彼等はなぜ首を狩るかという、本来の精神は、自分達の獵場を守る自衛の手段なのである。一般に、首狩りがうまい部族は歌がうまく、そうでないグループは歌が下手だという。ブスン族という部族がいる。彼等は首狩りに出かける前に合唱をするが、そこでハーモニーが合わない」と首狩りに行くのを中止する。というの、首狩りはチームワークが大切で合わないといふ恐れがある。

つまり「リズム」というものは、人間は共同で動かなくてはならない条件下でのみさろうが、ハーモニーも格好の良し悪しとかいう理由ではない、生命がかかっている状況で発生する。歌の原点というものは、生きるといふ本能的な生存に関係があり、歌が下手な民族は必然的に減っていくのである。

首狩り族についての小泉仮説をめぐって、活発な意見の応酬がくりひろげられた。

新しい交流を生みだすもの

みやもと つねいち
宮本 常一

(日本観光文化研究所 所長・加藤秀俊部会)

農民意識の拡大



中部アフリカを歩いて

私は日本の国の中はずいぶん歩きまわったが、国外を歩いたことはほとんどなかった。しかし昭和五十一年にはじめて四〇日ほど、アフリカのケニアとタンザニアを歩いた。ケニアは一九六三年、タンザニアはまず一九六一年、タンガニカが独立し、一九六四年ザンジバルと連合して、タンザニア共和国を形成した。いずれも若い国である。

私はタンザニアに強い興味をもって、この国は独立戦争をおこなわないで

独立した国である。一八八五年にドイツ領になり、第一次世界大戦後はイギリスの委任統治領になったが、そこに住む一三〇種に達する部族はそのまま古くからの生活を続けて来ていたといっている。

そして産業としてはサイザル、棉、コーヒー、トウモロコシなどの栽培があるが、それは白人、インド人によるものが多い。農業を主とした低開発社会と規定されていた。しかし白人による強制支配のほとんどおこなわれることのない地域であった。しかもこの国からは、世界でもっとも古い人骨が出ている。タンザニア人がその子孫であるというのではないが、極めて古い国土である。そしてヨーロッパ風な強力な武力によって征服されたこともなかった。かつてドイツ軍に攻撃されたとき、サバンナに住むフェフェ族たちはドイツ軍と戦って勝っている。低開発社会ではあるだろうが、その原因となっているものは言葉の異なる多くの部族がそこに共存しているからであり、

一つの部族が他の多くの部族を武力征服して統一国家を作った経験をもっていないことであった。しかし、武力を持たなければ国家統一も独立もできないものだろうか。

タンザニアはどのようにして国家統一の目的をはたしつつあるのだろうか。まず国語を統一した。各部族の持つ部族語のほかに、スワヒリ語を国語にし、学校ではすべてスワヒリ語を用いている。われわれも片言のスワヒリ語をおぼえていることで、この国の国民とある程度の意思を通ずることができた。いま一つ、この国では食料の統一がおこなわれはじめていた。トウモロコシを栽培し、これを主食とするようになりつつあることであつた。乾燥の強いこの国に適した食用作物はトウモロコシであつた。土のやせたところではキャッサバも作っていた。これはケニアもおなじであつた。食用作物を一つにし、国語を一つにすることに、よって共通意識は生れて来るものである。

水の乏しいこの国で、農耕に成功するには多くの困難があると思うが、人びとは真剣にそれと取組んでいるように思えた。毎週木曜日の午後は各ムラで学校に学んだことのない人びとを集めてスワヒリ語と文字を教えている。私もたまたまあ

るムラの、バオバブという大木の下でひらかれているこの野外学校にぶつかって授業をうけたことがある。年長は七十歳、年少は十八歳、男女ともにいたが、二十歳あまりの女先生の授業を熱心に学習していた。このようにして一〇年もたせば国内に文盲の人はいなくなってしまうはずである。ケニアという国も私には興味が深かつた。この国はタンザニアよりも文化は進んでいるかも知れない。そして英語も国民の間にかなり広く普及していたが、独立した後、まず食料の自給に力をそそぎ、トウモロコシの栽培が進みつつあつた。部族社会から国民社会への展開を見、国民もまた、真剣に農業に取組もうとし



っている。原野に緑があると見ればそれはかならずユーカリであり、緑のあるところには他の木も育っている。時間はかかるけれども、時間のかかる計画をたててゆくことの中で文化は進んでいくものであり、計画が進められ実行されていくためにもっとも重大な動力になるものは連帯感であると思う。

ていた。もともとこの国には白人の数も多く、白人によるプランテーションも少なくなかった。しかしケニア人は農業には熱心でありつつ、プランテーションではなく家族経営の農業を営み、トウモロコシのほかにはコーヒーなどもかなりひろく栽培しており、アバデア山脈の東麓では個人経営のコーヒー畑をずいぶん広く見かけ、農民が結束して農協を作り、コーヒー製造の工場を持ち、そのコーヒー豆の多くは日本の横浜へ輸出しているとのことであった。家族を単位とする農業経営は日本の農業経営と大差ないものであると思つた。

日本では稲作を中心にして、日本語を使い、天皇を統一のシンボルとした国づくりに二〇〇〇年近い年数をかけた。ケニアは若い国であるが、国語を統一し、食料を自給し、さらには国民が共通した感覚を持つような工夫をすることによって、安定した社会を作ることができているのではなからうか。それにはいまおこなわれている各地の市場がもっと強化されるばかりでなく、そこが文化交流の場になるような工夫もなされなければならないのではないか。幸にしてみな正直であり陽気であり、生活をたのしむことをよく心得ていて、お互いが仲よく交流しあうことはそれほどむずかしいことではないように思う。

熱心にメモしていた。私達は旅先でそのような熱心でしかもその生活を高めるために考え、努力している若い人びとに何人もあうことができた。第二次世界大戦の終つたあと、私は日本の農村を何回となくあるさまわつて、夜を徹して百姓たちと話しあつたが、その雰囲気とほとんどかわらないものであつた。ただ日本では多くの百姓と話しあつたが、アフリカでは行きずりの一人一人と話しあつたにすぎない。にもかかわらず、そこで得た感想は日本もケニアもほとんど差がなかったということである。

タンザニアの方の農業組織は違つていて、タヌーという政党が中心になつて共同農場の経営が進みつつあつた。そしてそれがどのような効果をあげつつあるかについては聞くことができなかった。しかし、どこを歩いても敵意にみちた眼や、警戒心の強い眼を意識することは少なかつた。

民衆が民衆に接する旅

それは中部アフリカだけの現象ではなはずである。最近の多くの低開発国の紀行や調査に関するレポートを読んでも、民衆の多くは親切であり協力的である。と同時に自分たちの生活をよくし、眼をひらいてゆこうとする意欲を強く持つてゐる。

なこのような道があるにきたのであつた。この一五年あまりの間豊富な生活物資にめぐまれ、いわゆる文明生活を営み大國意識を持つようになつてきたが、それでもなお低開発国の民衆と同様な素朴にして明るく、明日を信ずる意識を持つた人たちは少なくない。そしてそれはまた洋の内外を問わずお互いに通じあうものを持つてゐる。

権力の座にあるものはかならずしもそうではない。権力と権力の衝突があり、時に仮想敵国を作る。しかし一般民衆はできるだけ安定した生活を求めている。安定した生活は他人を押しつけてそこに自分たちの生活をたてることではなく、できることなら、その住んでいる場所生活で充実させようとするを願う。たとえば台湾の東部を歩いて思つたことだが、台東平野や東海岸の沿岸に比較的早く定住したプユマ族やアミ族は、異つた部族との争いを早くやめて農耕や漁労生活に力をそそぎ、安定した生活をたてて来た。そしてわれわれのような者が訪れても、快く迎え入れて心おきなく話しあうことができるばかりでなく、お互いがいろいろのことをわかりあおうとする。

私たちの旅はリュックサックを背負い、あるいはカバンを肩にかけたごく普通の旅支度をしているにすぎない。そして誰とでも話しあうことにしている。日本人の旅の拡大はこのようありふれた姿でありふれた態度で見知らぬ世界を見聞す

ることからはじまっているのではなからうか。

国内においても戦後あらたに観光地となったところを見ると、そのはじめは、リュックサックを背負った学生たちがその地方へ出かけていくようになったことから始まっている。昭和三十五年すぎまでは田舎の宿屋には宿帳というものがあって、泊り客はそれに住所氏名を書いた。私はその帳簿を見せてもらい、時にそれを数字にしたこともあり、実際にそれを教えられた。学生たちは山へのぼるか何かを調査するために出かけていったのであるが、やがて多くの人たちが観光のためにそこへ出かけていくようになる。

海外への旅行も同様な道すじをたどって発達していったのではなかったか。サンフランシスコ条約が結ばれ、海外渡航が比較的自由になり、在外正貨もふえてから、まず海外へ公用、商用以外で出かけていくようになったのは学術調査ではなかったか。とくに文化人類学的な調査では異民族社会へは行って、そこで寝食を共にしての調査がおこなわれた。これは敵意があつては絶対におこなえないことである。しかも対象とする社会の文化や生活を調査するだけでなく、その生活上に寄与するものがあれば寄与したいという意欲もその中に芽生えて来る。

戦後東京農業大学に拓殖科が設置され、そこに学んだ者の中には開発途上国に出かけて行って農業調査などに従ったばかりでなく、農業開発のために努めている

者も少なくない。

そのほか海外協力隊の活動もあり、日本の若い人たちの開発途上国との交流や協力体制は次第に進みつつあると思うが、一方ではおおむねの問題をはらんでいる。海外の文化に興味を持ち、これを理解しようとしている若者の仲間は決して少なくない。そして今もリュックサック一つで海外へ出てゆく若者は少なくない。これはいわゆる調査というような名を持つての旅行者ではない。そしてそれらは時に現地にとどまって何年も年をすごす者も少なからず居るのであるが、その多くはある自己満足を得るだけで、その知識は国へ持ちかえっても利用されることもなく、ましてそういう旅で得たものが、その生活を支える力になることはきわめて少ない。旅をした者にとっては、それは単なる個人の体験にとどまっている例がきわめて多いのである。

私の周囲には開発途上国を旅行した若者がたくさんいる。旅行の動機となったものは昭和四十四年に起った大学騒動である。授業がストップし、しかも騒動にまきこまれることを快しとしなかった者の中で海外へ脱出した者が少なくなかつたし、海外放浪の風潮に乗って出ていった者も多かった。その中には大した目的も持たずに出ていった者もあつたが、いったい学ぶということはどういうことが、生きるということの意味は何なのかを真剣に考えようとした人が多かった。そしてその多くが素朴にして明るく、

それぞれ自分の生活を充実して生きていく世界各地の民衆に接し、日本の民衆社会に共通する多くのものを発見し、幸福が人間の相互信頼の上に成り立つものであることを教えられ、文明生活とは何であるかということについて考える機会を持った。しかし、その体験は日本へ帰つて来ても、就職や社会的地位の位置づけにほとんど役にたたなかつた。そのことが、そういう旅行を次第に萎縮させていったのではなからうか。一方で海外への観光旅行がのびて来る。だが、それは開発途上国への旅ではなく、文明国家への旅が主になっていったのである。

民衆が民衆を裏切らない社会

いま、人間にとつてもっとも大きな課題は何であろうかということになると、それは戦争のない社会を作っていくことではないかと思う。われわれは敗戦の時点で、そのことを誓い、世界に宣言したのである。どうすれば戦争を回避することができるか、世界中の人間が人間を信頼する社会を作り得るか、そのことに人間の間ですべての善意と英知がそがれてもよいのではなからうか。しかしわれわれはたしてその努力を続けていると言えることができるであらうか。

私は日本の農民だけは過去の社会において、その努力を続けて来たのではないかと考えている。戦国争乱の世の中に見て、すべての人が争っていたように見

えなければ、農民だけは争っていたのではない。黙々として食料や生活用品の生産のために働いていた。そうでなければ武士は戦争を続けることはできなかったであろう。武士の多くは権力闘争と権謀術数に明け暮れていた。しかし農民たちはその闘争の外に立って自分たちの生活を守り続けたのではなかつたであろうか。そのことを物語るのは戦国時代の終頃日本を訪れたキリシタン宗の神父たちの記録である。神父たちは武士に護衛されることなく旅を続けており、しかも危害を加えられることはなかつた。

この人たちに危害を加えたのは、世の中がやや落着いた後、武士によってキリシタン禁制の名のもとにおこなわれたのであつて、それは民衆の裏切りによるのではなく、民衆も共に被害者になっていくのである。もとよりこれは一国の中でのことであるから、農民は農民の世界を作り得たと言えるのであるが、日本の民衆の根底にある考え方は人間が人間を見捨てないことであつた。と同時に日本の民衆社会では長い間英雄は認められなかつた。

日本の民衆社会では強い者は悪い者だと見られて来たのである。平清盛も源頼朝も足利尊氏も織田信長も決して英雄ではなかつた。民衆の中から出た豊臣秀吉は人気があつたが、徳川家康は正史が普及してもなお狸親爺で通つて来たのであつた。しかし戦に敗れ、非業の死をとげた者に対しては長くその霊をとむらつて



来た。それにはそれなりの民俗的な慣習があつたわけだが、そのような考え方や物の見方を、民族間の境をこえて拡大できないものであろうか。

日本人は過去の長い歴史の中で、異民族に接する機会のもつとも少なかった民族であるが、そのために異民族に対して敵視するような事件に出あうことも少なかった。したがって異民族に容易に同化する一面も持っていたのではなかったが、皮膚の色がちがう白人に対しては劣等感も強く、その社会に容易にとけこみ得なかったが、東南アジアの諸民族の間へどれほど多くの人がとけ込んでいったことであろう。その多くは原地人と結婚し、混血し、その中へ消えていつている。しかしただ消えていったのではなくて、その社会の生活を少しずつ向上させ、かえりいつているようである。そしてそれは十六世紀以来のことであつたのではなからうか。このようにして多くの日本人が異民族の間に消えていったのは、本国との間に交流の少なかったことが原因していると考ええる。もし本国との間に交流の道がひらかれていたら、出先の社会

へより大きく貢献することもできたのではなかつたかと考える。明治・大正時代に南方諸地域へのおびただしい出稼者も、その初は大日本帝国国民の意識を持ち、肩を張って出かけていった者が多かったであろうが、周囲の原住民と接触するようになるやがてその社会へとけ込んでいく者が少なくなつたようである。

民衆の社会には民族の如何を問わず、共通する意識が広く存在するものであると思う。人間が人間であるということによつて。しかしこれまでの学問は民族文化の持つ差異の研究や調査にもつとも目を注いで来た。そしてそれは人間が如何に生きて来たか、文化がどのように形成されて来たかを知る上に重要な方法であり手段であつたと思つのであるが、各民族の間に、どれほど共通する意識が存在するかを問題にすべきであらうと思つ。共に人間であり、しかも相手が自分に危害を加えるものでないと意識するとき、共存しようとする意識と行為が働く。しかもそれは階級により職業により、あるいはいろいろの条件によつて、それぞれ差異があるのではなからうか。民衆同士の間には深い友情があり共通意識があつても、支配者の間には敵対意識の存在することもあり得るし、民族意識といわれるものも支配者の教育や指導によつて形成されたものも少なくない。特に日本人の国民意識は江戸時代の武家思想と、その拡大された明治大正の教育に左右されたところが大きかつたのではないか。

しかし、国民の大半は昭和の初まではただの農民として生活して来たのである。農民生活の基本になるものは生物を育てることである。年々それをくりかえして来た。そこにはごまかしはゆるされない。生物に対する観察と育成の工夫と努力が物を実らせ、生活をゆたかにして来たことを皆理解している。そしてしかも農民は地球上にみちみちている。人間の共通意識は、そうした育成行為の中から生れて来たものではなかつたであろうか。アフリカではじめて異民族社会に接したとき、私自身もつとも感動したのは農民の営みであつた。ビクトリア湖の東方一帯の丘や谷を埋める農地はいずれも短冊形に割られ、その農地の一隅に農家があり、農地のところどころに牧野が広い面積を占めている。そのことと、中国の揚子江流域の水田地帯の地割との共通性、それは日本の農民と農地のあり方にも見られる現象である。ともに相通する意識や生活行動が、これを生み出したものであろうか、この共通したものは何によつて生じたのであろうか。

農耕文明にはごく大ざっぱに見て二つの型があつたのではなからうか。地中海及び西欧社会には早くから異民族征服のための戦争がくりかえされ、そこでは奴隷を使用する農園農業が発達した。そしてその伝統はなお今日にも続いており、農園農業はさらにプランテーション農場をも発達させて来るのであるが、いま一つ、一般民衆が異民族に奴隷として使役

されることの少かつた社会では家族経営による小規模の農業がいとまれ、そこには農園経営というようなものはないと見られなかつた。アフリカ内部の原住民社会も東南アジアや太平洋に散在する島々の住民もヨーロッパ的経営の色に染まることは少かつた。そしてそれは村落共同体を発達させていつた。

日本のように西欧文明の大きな影響を百年あまりも前から強く受けている国でも、農民は農業経営の形態を家族経営から企業の経営にまだ切換えていない。共同経営が政府によつてすすめられても、農民は容易にその方に振向こうとはしない。そういう農業社会はそれなりに存在の意義があつたばかりでなく、農民一人一人の意識の高さ、技術の高さが、社会全体の発展に大きく寄与したのではなかつたであらうか。今日開発途上国といわれる国々の農村農業経営も、ある意味ではわれわれ日本農民の歩いて来た道を歩きつつあるといつてよいのではなからうか。

つまり多くの民衆が単なる労力提供者であるまゝに、経営者としての経験を持つことが、民族としての英知を高めてゆく上の一つの重要なポイントになるのではないかと思つ。とすればわれわれの持つて来た体験は、開発途上国の人びとにとつてもいろいろの示唆を与えることになるであらうし、民族共存への道をさがしあてる一つの方法にもなるのではないか。



A POINT OF VIEW

関係

深瀬昌久

燃料アルコール

期待されるリバイバルエネルギー

日本エネルギー経済研究所

古くて新しい 燃料アルコール

世界的な景気の後退と消費節約の奨励によってエネルギー需要、とりわけ石油消費の伸びは、このところ急速に鈍化してきている。

それにもかかわらず国際的な原油価格の水準は、三〇ドル／バレルのラインを越えてさらに上昇する気配を示している。こうしたなかで各国とも石油代替エネルギーの開発、導入に一段と熱が入っており、去る六月のベネチアサミットにおいて代替エネルギー開発の促進が確認されたのは記憶に新しいところである。

ところで、代替エネルギーという場合その範囲は極めて広く、石炭（生炭）、天然ガス、原子力、水力、地熱といったすでに商業化され大規模な供給がおこなわれているものと、石炭の液化、ガス化、あるいはオイルシエール、タールサンドからの石油の抽出、バイオマス、風力、太陽熱、太陽光、さらに海洋温度差を利用した発電など技術開発の途上にあるものとに区別される。このうち後者の方は、いわゆる新エネルギーと呼ばれるものであり、これらが世界のエネルギー供給に影響力を与える程の供給量を確保できるのは、九〇年代後半から今世紀末というのが、大方の一致した見方であろう。しかし、これら新エネルギーのなかで特に最近注目を集めているものに燃料用

アルコールがある。アルコールはメタノールとエタノールに大別されるが、この両者が新しいエネルギーソースとして関心を集めている背景は、他の新エネルギーと比較して、第一に商業規模の生産に對して、既存技術をそのまま適用できることにある。すなわち、メタノールの場合天然ガスや石炭からの合成ガスによって生産されるが、その技術は古くから確立されており、現在、世界全体で約一〇〇万トンのメタノールが化学工業用原料として生産されている。一方、農産物を主たる原料とするエタノールの場合も発酵技術は、戦前にすでに確立されており、戦時中は燃料用として生産された実績を持っている。

第二は石油価格の高騰によってアルコールを自動車ガソリンをはじめとする石油製品に代替させた場合、国によっては十分経済性が得られるようになった点である。

第三は、アルコール生産に必要な原料が世界的にみて豊富に存在することである。つまりメタノールの場合、原料である石炭や天然ガスは石油に比べて遙かに多く賦存している。また、エタノール生産の原料となる糖質作物、でん粉質作物としては、砂糖きび、キャッサバ（マンジョカ、タピオカ）、スイートソルガム、フォードピート、さつまいも、小麦等々実に多様な原料が世界中に豊富に存在することである。

さらに、第四には将来の技術開発の方

向として木材資源を利用したエタノール生産が考えられる一方、アルコールから直接ガソリンへの転換も可能であると思われる。それらが実現すると代替エネルギーとしての有効性は飛躍的に増大する。

先頭を切る

ブラジル、アメリカ

このようにアルコールを燃料として利用しようとした場合、多くの長所があるが、ここでは燃料エタノールの問題に限定してその導入の具体的可能性についてみてみたい。最近、エタノールが世界的に注目を集めるようになった直接の契機は、ブラジルにおいて自動車ガソリンに混合して市販されるようになって以来である。ブラジルでのアルコール燃料利用の歴史は古く一九二二年から始まっているが、本格的に利用されるようになったのは、一九七三年の石油ショック以降である。

現在、ブラジルでは平均二〇%のエタノールをガソリンに混合しており、すでに公共用バスなどでは一〇〇%エタノール車も出現している。これに対してアメリカでも一九七八年一月に、イリノイ州スプリングフィールドで初めて、ガソノール（自動車ガソリンに一〇%の無水アルコールを混入したもの）が市販されて以来、昨年春のガソリンパニックも手伝

つてほぼ全州のガソリンスタンドでガス
オイルが販売されるに至っている。

こうした動きに対して、わが国でもエ
タノールを新しいエネルギー源として着
目しようとする動きがにわかに抬頭して
きている。政府・通産省は七八年八月に
発表した「エネルギー長期需給暫定見通
し」のなかで新燃料油としてメタノール
と合せて将来エタノールを導入すること
を打ち出している。しかし、エタノール
に関していえば、国産のさつまいもや米
を使用した場合、経済性が極めて乏しい。
たとえば国産のさつまいもからのエタノ
ールの生産コストは一リットル当り三百
円程度となり、米の場合五百円にもなる
と考えられる。こうなるといくらガソリ
ン価格が上がったといっても代替エネル
ギーとして利用することは難しい。

注目される 東南アジアの動き

そこで、比較的安価にしかも大量に原
料農作物を供給できる可能性のある地域
として東南アジア諸国が注目される。東
南アジアのエネルギー事情は、わが国と
は消費規模こそ違うものの石油への依存
度が著しく高いという点で非常に類似し
た面を持っている。このため、最近の原
油価格高騰の影響は極めて深刻なものが
あり、国内の石油製品価格も上昇の一途
をたどっている。たとえばガソリンの小

売価格を例にとると、フィリピンではす
でに一リットル当り百五十円近くの水準
に達しており、七月からは百八十円以上
に再度引上げられる予定である。また、
タイ、シンガポール、マレーシア等でも
百円〜百二十円の水準になっており、今
後も原油価格の上昇にスライドして、値
上げされることは明らかな情勢にある。

このため、フィリピン、タイなどの非
産油開発途上国の場合、自国の農産物資
源からのエタノール生産に対して大きな
期待をいだいている。その熱意の現われ
として、両国では昨年から今年にかけて
相次いで関係閣僚からなる「国家アルコ
ール委員会」を設置している。フィリピ
ンでは当面砂糖きびを原料として考えて
おり、タイではキャッサバからのエタノ
ール生産を計画している。一方、東南ア
ジア随一の産油国であるインドネシアも
農産物からのエタノール生産に対して強
い意欲を示している。

フィリピンの場合砂糖きびの生産量は
七九年実績で二〇〇万トンを超えてお
り、この地域有数の砂糖生産・輸出国で
あり、砂糖きびを原料としたエタノール
生産は十分可能である。これに対してタ
イのキャッサバ生産は、早ばつの被害に
あつた七九年でも一二〇万トンを超え
ており、このうち約六〇〇万トンが飼料
用でん粉としてヨーロッパに輸出され
ている。したがって、ここでも余剰のキャ
ッサバを原料としたエタノール生産は可
能といえる。また、インドネシアもスマ

トラを中心にキャッサバがタイと同じ程
度生産されている。インドネシア政府が
このエタノール生産に熱心なのはエネル
ギー問題の解決という側面より、ジャワ
島に集中し過ぎていた人口の分散化のた
めの移住政策への効果を期待している面
が強い。

そこで問題となるのは、上の三国にマ
レーシア、パプアニューギニアといった
供給可能性の高い国々を加えた東南アジ
ア地域における一九九〇年におけるエタ
ノールの生産量は一体どの位と考えられ
るかという点だろう。これについて各国
の見通しや原料作物の生産量などを基礎
に試算してみると、この地域で将来一〇
〇〇万klのエタノールを生産することは
十分可能である。このうち三〇〇万klを
国内でガソリン混合用として消費し、七
〇〇万klをわが国をはじめ各国に輸出し
たとすれば、その輸出代金は現在価格で
二〇億ドルを超えるものとなる。もちろ
んこれだけの量のエタノール生産が、実
現するかどうか明らかではないが、高く
なり過ぎた石油に代つて各国が自国の農
産物から得たエタノールを使用すること
になれば、原油価格高騰に対するひとつ
の大きな抑止力となることは明らかであ
る。しかも、太陽エネルギーの間接的利
用とでもいふべきこの農産物からのエタ
ノール供給は、南の国々にとつて最も可
能性のあるエネルギー源であり、それが
けに今後の東南アジア各国のエタノール
生産に大いに期待したい。

宮城県沖地震研究

都市のライフラインを災害からどう守るか

政策科学研究所

●都市のライフライン

一九七八年六月十二日、午後五時十四分に仙台地方を襲った「宮城県沖地震」は、仙台東方沖約一〇〇キロ、深さ四〇キロのところ、震源をもち、マグニチュード七・四、仙台市では震度五の強震だった。宮城県沖地震の災害の特質は、一言でいえば「都市型」と呼ばれる特性を持っている。地震による被害は通常、建築物の倒壊、崖崩れ、土砂崩れなどの「直接的被害」のほか、都市型震災では、地震火災や地震水害などの第二次災害が被害を大きくしているが、宮城県沖地震の場合、火災の発生が少なかった（仙台市内で八件）わりに、電気、ガス、水道の供給停止が地域によっては長期にわたるなど、都市型震災のもう一つの側面を大きくクローズアップした。

本研究は、宮城県沖地震を都市機能の面から点検し、とくに都市のライフライン（生命線）を中心とする都市機能サービス・システムが震災によってどのような影響を蒙るか、また地域社会や市民生活にどんな影響を与えるかを考察・分析したものである。

●そのとき市民は

地震による市民生活への影響をみるため、仙台と周辺三都市（名取・塩釜・泉）に対する市民アンケート調査を行い、①災害下における意識と行動、②被害の実態分析、③生活困難の構造分析を行った。まず「そのとき」市民はどう行動したか。地震でゆれている最中に「何もできな

かった」人を含めて「何もしなかった」人は約四分の一（二七％）にのぼる。とつさに「外にとび出した」人が一八％、「机・テーブル等の下に身を隠した」人は一〇％である。

地震が発生した時刻は午後五時十四分。火を使っていた人は全体の二〇％、のうち八二％の人が直ちに火の始末をした。都市型震災であるにもかかわらず宮城県沖地震で出火数が少なかったのは、住民の防火意識が高かったからといえる。

地震直後、四割の人が買物に行った。当日夜よく売れた商品は①パン類八七・〇％、②ロースクハニ・六％、③電池八〇・四％、④缶詰類七三・九％、⑤ラーメン類六九・六％、⑥牛乳など四七・八％と、地震後の生活維持に必要な品物が当然のことながら多い（市民アンケートと同時に実施した大規模小売店調査。薬局店頭では、メタノール・燃料アルコール（都市ガスの代替）、湿布剤・消毒薬、包帯・ガーゼ、バン類、栄養剤・ドリンク類（ドリンクは飲料水の代替）などがよく売れた。

地震後最も知りたい情報は家族・知人の安否で、六割以上の人がこれを一番目にあげた。ついて地震の大きさ・震源地情報一六％、津波情報・余震情報一一％、被害情報四％である。また、地震後の生活の中で、五割の家が隣近所と生活物資の交換、その他さまざまの相互扶助をしている。

●生活困難の中身

地震後の生活困難感をみると、第一に地震への不安感と停電が最も大きな影響を与えた。これは個人の属性に関係なく、市民全体に共通したものである。

第二に多いのは、ガスの停止や断水など都市のサービス機能にかかわるもの。仙台市の水道普及率は九四％だがそのうち五二％が断水被害を受け、二日以上断水が続いたのが二六％もある。ガスの普及率は四五％だが復旧に長時間かかった。最長のもので約一カ月、新聞にはガス復旧情報が定期的に載るくらいだった。直つても、あとで急にメーターが上るという笑えないような話もあった。第三は、家の中の後片づけと電話が使えなかったことである。

これらの生活困難感を構造的に把握するため、多変量解析した結果、生活困難を規定する要因を総合的に順序づけることができた。

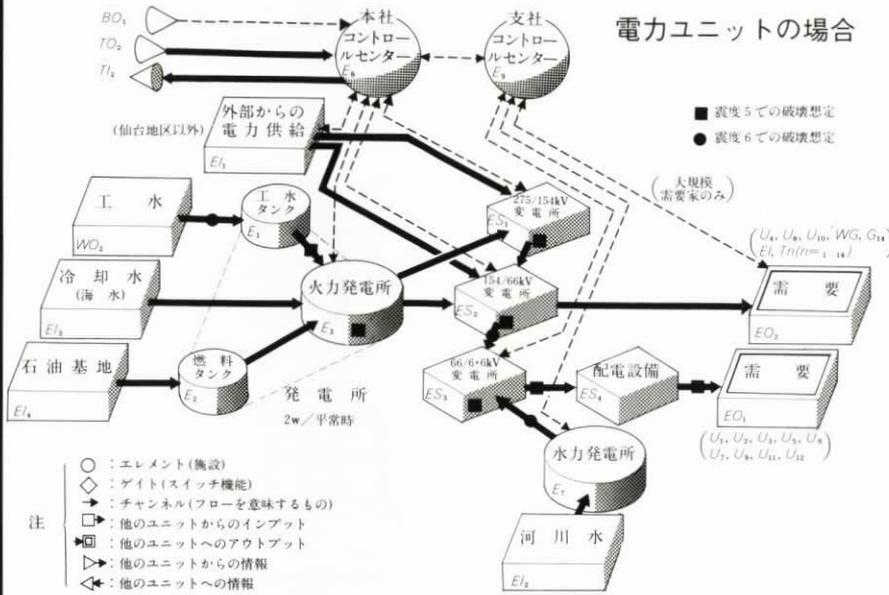
第一位／家族にケガ人が出た 第二位／断水 第三位／ガスの停止 第四位／品不足 第五位／電話の不通

●「医」食住

医療の対応はどうだったか。これを見るために、病院・一般診療所調査、薬局調査、医薬品卸売業調査を行った。

宮城県沖地震では、負傷者が多かった（死者二七人に対し、負傷者九三〇〇人、うち重傷一七〇人）。仙台市で人口の一・四％。ガラス片、落下物、転倒によるものが多い。ガラス片がタタミに食いこん

電力ユニットの場合



で、後々までケガをする例もあった。手当の多くは家庭でなされたが、三分の一近くは病院にかけこんだ。重傷患者の場合、市内の交通が渋滞して救急車が走れず、今後の救急医療体制のあり方に課題を提起している。

病院ではX線装置、保育器、手術台など予想されなかったものまで倒れており、また自動分析装置や顕微鏡なども破損し、地震による医療機器の被害は予想以上に大きかった。また地震による診療活動を大きく妨げたものに、電気、水道、ガスの供給停止があるが、非常時のための供

給体制に問題を残した。

病院（診療所を含む）、薬局とも、本調査では六割余が地震後も「開店」して診療・薬品販売にあたったが、食・住とつながって「医」の問題は今後にまっところが多い。

●複合破壊

以上のような実態分析を通して、本研究では、都市機能として電力、ガス、水、電話、放送をとりあげ、これらの都市機能のシステム構造を「ネットワークモデル」として構築した。一例として、上掲の図は、電力ユニットのフロー・ダイアグラムで、震度五または六での破壊想定を示したものである。

電力の場合、震度六ではまず発電所の停止が予想される。給水パイプ、燃料配管、石油供給基地そのものの被害が停止に結びつく。変電所では変圧器、遮断器等の破壊、周辺家屋の火災による被害も考えられ、その波及は下位の変電施設、大口需要者（鉄道・工業など）へ直接波及する。とくに都市の需要者に近いところでは、配電設備の破壊や送電線などの被害も出る。

電力停止の影響は他の都市機能全体に影響を与える。一つの都市機能サービシステムが破壊されると他のシステムにもそれが相互波及し、被害は複合化する。これらの影響波及はまた火災や水害を想定するとさらに幅広いものとなる。『複合破壊』はまさに都市利震災に特有の現象である。

●フォルト・トリ

都市のライフラインの破壊に対しては、供給の中心となる中枢機能の防御を十分行い、需要の末端に近いところではこわれることを覚悟して復旧しやすくすること、そして非常代替システムを用意し、一時対処することを考えることである。

以上のような意味で、本研究では「フォルト・トリ」(Fault Tree) Aという被害を生ずる原因にB、Cという被害があり、B、Cのどちらか一方が発生すればAに波及する場合「A」と、B、Cの両方が発生してはじめてAが起る場合「AND」の二つの組合せで事故の因果関係を示す)の考え方による、各供給システムの事故連鎖を表現してみた。

都市のライフラインを災害からどう守るかという関心は日本ばかりではない。このほどワシントンで開かれた日米天然資源開発会議でも日米共同研究の必要が合意され、実験研究を重ねたあと、少なくとも一九八三年度から実際の研究が始まると伝えられている。日本国内でも、たとえば愛知県ではライフラインへの対応を県の長期計画に組み込みもうという試みがあり、住民の手と足による「危機管理」のあり方が模索されている。

これまで電力、ガス等、各個別の分野でそれぞれの供給体制についてライフライン研究のストックはあったが、総合的な観点からそれをとりあげ、相互の関連性を追跡したところに本研究の特色があるといえるだろう。

長・江・治・理

●中国現代化の実相



松本重治氏

●出席者

松本重治

(国際文化会館理事長・松本重治部会)

茅誠司

(東京大学名誉教授・日本学士院会員・茅誠司部会)

下河辺淳

(総合研究開発機構理事長)

一級品の提供より 基礎づくりを

松本 21世紀フォーラムですから、話す内容としてすぐ考えられるのは、二十一世紀に中国はどうなるか、ということですが、私も、しかし私は、二十一世紀になるまでの二〇年間は、より大事ではないかと思うんです。

それで、今日は、この二〇年間に中国は何を得るか、何をやり得るか、それから、もしも日本が協力を求められるならば、何をなすべきか、というような問題を中心にお話し願えれば、非常にありがたいと思います。

茅先生は、最近も中国に行ってこられて、重慶から三峡の嶺、武漢まで三日間下られて、楽しかったらしいですね。向こうの物理学や数学などの学者……北京

大学の総長とか、復旦大学の総長じゃないかな、茅先生の親友なんですよ。今回、茅先生は、中国との研究協力ということで行かれたようですが、科学技術の近代化について、その教育はどうやっているのでしょうか。

それから下河辺さんは、経済の現代化を中心にして……副総理の谷牧さんが非常に下河辺さんを頼りにしておるので、そういう点で、これまで下河辺さんがおっしゃらなかったことでもあれば、ひとつ経済の現代化について、この二〇年間で中国が何をなし得るとお考えになつているか、そのところをうかがいたい。

さらに、日本側としてどういう点に注意したらよいか、やっちゃいかんこと何をやっているのか、やるべきことをなせやらないのかというようにことまでお話しできれば、非常にありがたいと思

ます。

茅先生は、最近はいつからいつまでしたかね、いらしたの。

茅 四月二十七日から五月十一日まで五日間行っていたんです。

いまのお話で、私は、中国でいちばん重要なのは、一般の水準を上げることじゃないかと思うんです。

というのは、日本の近代化というのが本当に軌道に乗ってきたのは、私は最近じゃないかと思うんですが、その意味は、日本の工業の水準が高まったことによつて、一層近代化に加速度がついたということなんです。

また、日本がどうしてそのように近代化を進めることができたかというところ、工業の水準が高くなったのと同時に、たとえば、いまや九二パーセントが高専学校を卒業しているというように、国民の教育の水準が非常に高いということが、工業の水準と教育の水準が相まって、これからの世界の水準を維持し、あるいは追い抜くことができるんじゃないかと思

います。

そういう点から言いますと、私は、あまり詳しく中国の教育の水準を知りませんけれども、おそらく一〇億にのぼる人達の教育の水準というのは、非常に低いんじゃないかと思うんです。その教育の



茅誠司氏

水準を高めないと、あるところでは近代化することができたとしても、周囲が低いために、抑えられて進まなくなってしまうんですね。

そういうことから見まして、中国に日本が何をなし得るかという場合、あまりに第一級のものばかりを、すぐに中国につくらせて、そのあと知らん顔をしていったって、中国では支え切れない。

たとえば、宝山製鉄所ですね。あれは君津製鉄所とか大分製鉄所のまねをしたわけですけども、自動設備なんですよ。

中国には人間がたくさんいるにもかかわらず、人間を使わない自動設備にしてしまった。しかも、そこで使う鉄鉱石や石炭は、中国にはない。日本は、現在の中国には非常に似合わないものを最初に勧めたと、私は思うんですがね。

日本は、やはりもう少し基盤をつくっていくということから考えてあげなくてはいけないんじゃないか、私は、この頃痛切にそう感じているんです。

「子々孫々」という言葉の理解

松本 下河辺さんが行かれたのは、今度は一月でしたか。

下河辺 今年は、一月と四月に二〇日ぐらいずつ、二回参りました。

松本 重慶へ行かれたのは……。

下河辺 重慶は去年だったですね。茅先生がおっしゃったとおりで、中国政府側も、先進国の先端技術をどうしようふう

中国の経済の現代化に役立たせるかというの、ここ一、二年、大論争だったと思うんです。結論としては、先端技術も必要であるけれども、先端技術だけが中国の現代化を進める原動力ではない、ということも明確にしたようです。ですから中国は、基礎づくりということに、だんだん落ちついてくると思いますね。

ですが、飛行場からの割合広い道に、殺物を乾してそれを棒で叩いているんですよ。その光景は、私が子供の頃に、私の郷里でやっていたことと同じなんです。それを見て私は、懐しくしようがなかったんですけど、すべての程度が、その当時の日本と比較できるような、そういう状況じゃなかったかと思うんです。

松本 原動力というのは……。

そういう光景を見つづく思ったのは、小学校、中学校ぐらいの科学教育から考え直さなければいけないんじゃないかということです。どうしようふう科学を教えていくか、というような問題ですね。

下河辺 たとえばさきほど茅先生がおっしゃった宝山製鉄所でも、ああいう宝山区の製鉄所は宝山以外にはつくらないという方針を明確にしたと思うんです。

この間、華国鋒首相がいらしたときに、いろいろお話をなさったなかで、「長期的戦略的」という言葉を非常に重要視しておられたという気がするんです。しかし、問題は、華国鋒首相が力説なさった「長期的戦略的」ということを、日本側がどれだけ消化できたか、どれだけ受け止めたかということです。友好関係をずっと進めてきたときには、両国とも「子々孫々」という言葉を非常に好んで使ったわけですけども、そのときからすでに、子々孫々という言葉の実態的な理解が、両国で少し違っていったんじゃないかと思

います。

とくに技術などについては、訓練のできていない年齢層ができてしまっているの、中堅幹部が非常に不足しているんじゃないかと思えます。だから戦前から活躍なさっている方が、依然として活躍しなければならぬ状況にあるんじゃないでしょうか。

茅 飛行場から四川省の成都のホテルまで車で行くときに、最初に目についたん

で、飛行場からの割合広い道に、殺物を乾してそれを棒で叩いているんですよ。その光景は、私が子供の頃に、私の郷里でやっていたことと同じなんです。それを見て私は、懐しくしようがなかったんですけど、すべての程度が、その当時の日本と比較できるような、そういう状況じゃなかったかと思うんです。

「長期的戦略的」ということを、これから日本人がどう理解し、対応するかというところが、いちばん大きな仕事のように思っているんですけども。

茅 飛行場から四川省の成都のホテルまで車で行くときに、最初に目についたん



下河辺淳氏

経済体制は 自治区的考え方

松本 先ほど下河辺さんから、宝山型のフランはやらないというお話があったんですけど、宝山をやらざるを得ない事情もあるのかも知れませんが、それに必要なインフラストラクチャーが欠けているというようなことで、それも宝山と一緒にやろうという気があるんですか。

下河辺 ご承知のように、中国というのは国土が広大ですから、上海に製鉄所を一つつくりましても、それが全中国の鉄鋼を供給する基地にはならないということがあります。上海から全部の鉄を輸送するとなると、二〇〇〇キロとか三〇〇〇キロという鉄道を敷設しなければならぬので、そういうことはちよつとあり得ないことだと思えます。ですから、鉄を供給するには、たとえば北東地域とか四川省、広東などで、その地域の経済力に合った製鉄所をつくる以外に、方法がないと思うんです。

それで、中国では、インフラストラクチャーとか経済体制を考えると、ある経済区画といえますか、経済的なエリアを意識して計画を立てようという気持ちが強くなってきていると思えますね。四川省などは、人口が約一億で日本と同じぐらいになってきましたから、そのなかで経済をどう運営するかということが、かなり重要になってきたと思います。

茅 最近聞いたところでは、たとえば旧

満州のような地方自治区を、一つの自治区的に考えてやっていこうというので、各地区ごとに今、考え方をまとめているそうです。

今も満州地区ですと、鉄は鞍山、石炭は撫順とかいう調子ですね。ところが、あそこにくら鉄や石炭があっても、それを他の地区に運ぶことは、ほとんど不可能です。この前廖承志さんが来られたときに、石炭を運んでしまったら人間を運ばせんと笑っていました(笑)。

松本 そんなに鉄道力というのは弱いんですかね。

下河辺 中国の経済について、ソ連と中国とが一緒に考えていた頃は、ソ連の指導者は、もっぱら鉄道を中心にした考え方だったやうですね。けれども今は、鉄道も敷設していますが、水路を見直した方がよいという考え方が、非常に強くなつてきています。揚子江でも黄河でも、まだまだ輸送力として利用できるということが検討されています。

問題は長江を いかに治めるか

茅 長江は、重慶から武漢までが三〇〇〇キロあるんですが、それを下ったとき中間ぐらいに景色のいいところがある。

そのなかの宜昌というところで、ダムをつくるという話があって、ダムをこしらえますと、二五〇〇万キロワットの発電ができるけれど、重慶のかんりの部分で沈むそうです。それで、実はアメリカ

からミッシェンを呼んで意見を求めたところ、二五〇〇万キロワットの発電というのほ他でもつくることのできるから、ここは、運搬のために水路として残すほうがいいという結論だったそうです。中国では、その結論について大変な議論が起こって、いまだに結論が出ないという話なんです。

三峡ではなんともいえないのかな景色を見たんですよ。山は高く、川幅はいちばん狭いところは一〇〇メートルぐらいしかないんです。

そこで漁師が魚をとっているんですが、そのとり方がまた呑気してね。魚をとるものは、直径一メートルぐらいの竹の輪っぱに柄をつけて、それに網を張ったものですが、それを流れにさかのぼって、こうすくつてばかりいるんですよ。どんな魚がとれるかと一所懸命見ている、一匹もとれない。だいたい魚がとれるのかと聞いたら、私達を案内していた人が言うには、やっていたらとれることがありますが、やらなきゃとれないと(笑)。非常にはつきりしている、中国人は。

私はね、二五〇〇万キロワットのエネルギーもさることながら、こんな景色は世界にないから、世界のために是非とっておくべきじゃないかと思いました。それで私は、方毅さんという科学技術担当の副総理に、ダムをつくるのを決定するのは中国の決定権だけれども、世界の人が重慶から三峡を下った人の全部と、揚子江の魚とは、ダムをつくるのに反対だ



松本重治氏

という意見を参考にしてくれ、と冗談を言ったんです。すると方毅さんは大笑いして、よくわかったと。

下河辺 中国側でも、長江の実態調査の報告書というのが、最近まじまりました。そのなかで、今、茅先生がおっしゃったようなことを一所懸命議論しております。このまま放っておくと、長江は黄河と同じような状態になると。第二の黄河化と言っていますけれども。それで、長江をどう治めるか根本的な議論をしようということ、経済の現代化のなかでもそういう仕事をしているわけです。

日本人が経済の近代化というと、重化学工業と高度成長が中心であるというイメージが強く、そういう理解になりすぎると思うんですね。

中国人の場合には、経済の現代化のなかで、長江の治め方というようなことを議論しております。非常にいい言葉だと思っておりますが「治理」という言葉があまり思いますが、これは、河川とか森林とか何でもいいんですが、理にかなってうまく治めるという意味で、長江をいかに治理するか、というような言葉が出ています。

日本でも、アセスメントとかエコロジーとか、横文字の言葉がたくさん使われておりますけれども、これらをアジア的に言う、「治理」という言葉かもしれないと思います。日本でも、治理という言葉を使うといいという気がします。

松本 下河辺さんは、中国でいちばんの問題は水だと言われたことがありました

ね。それは、水路とか水運のほかに、やはり農作物のための灌漑の問題ですか。

下河辺 長江というのは、チベットから発して上海まで流れてくる約六〇〇〇キロの河川で、流域の面積は日本の国土の四倍ぐらいありますが、いちばん根本的な問題は、その治理がうまくいっていないということ、西の地域からずっと砂漠化が進んできていて、それがどこまで進むかというのは、一〇〇年とか一〇〇〇年という長さの、非常に大きな問題です。

六〇〇〇年の歴史のなかで、人類が森林を全部使い果たしてきてしまつて、森林がないから水がない、水がないから森林が枯れる、動物もいなくなるという悪循環になっている。それをこのあたりでどう治めるかという問題は、世界のトップレベルの学者をみんな集めて、勉強する価値のあるテーマだと、私達も中国人も思っています。

二〇年、三〇年の問題ではなくて、一〇〇年という長さを必要とすると思いませんか。

松本 昔から治水事業といつてね、禹が聖人になってしまつたんだから、水の問題は、やっぱり三〇〇〇年の歴史にあるんでしょね。

茅 水を治める者は国を治める者なり、です。

下河辺 人口が大きくなりましたから、水との関係が、また一段と大変だと思つてですね。

汚濁の進む たれ流し長江

松本 電力は、石炭で、すなわち火力でやろうというんですか、あるいはダムをつくって水力をやろうとするんですか。どういう割合でやるつもりなんですかね。

下河辺 現在は、環境の問題を十分考えたらうえて、可能な限り水力を開発したいという方針が強いと思います。

松本 ダムはたくさんできるとは、あんな平地でも、ダムになるんですか。

下河辺 平地といいますが、かなりの起伏がありますから、ダムサイトは残されていると思うんですが、あまり超大型のダムは適当ではないと思います。

それに、さつき茅先生がおっしゃったように、水路に使うかどうかというようなことを一緒に議論しておかないと困ります。長江でもこれまで、鉄橋をだいぶ建設してしまいましたけれども、通る船舶の形との議論が少し抜けていたために、水路として使う場合、あとになって、橋梁の高さが問題になる可能性があると思います。

松本 長江の水の色というのはどうですか。

下河辺 長江というのは、実は非常に汚染が進んできている河川なんです。今まで河川は大部分たれ流しの状態で使われていて、重慶あたりからとんとんたれ流しの状態になっています。



茅誠司氏

上海の革命委員会は、重慶の革命委員会がもつと公害処理をしてくれないと、上海はポリユータータントで滅びてしまうというようなことで、だいぶケンカがあったという話を聞きました。これからは、長江のそういう汚濁の問題というのが頭の痛い大きな問題だと思えますね。

重慶なんかですと、狭窄部があつて狭いんですが、崖の上に工場があつて、その工場の裏の崖へ、要らないものを何でも捨てるような習慣ができていたんです。それで、河川の方から見ますと、崖のところに汚ないものを落としたり捨てたりした筋が、垂れ幕のようについています。私たちは、幔幕のようだと笑つて笑つたんです。

河川が大きいために、工場が流したものが、生産物によって色がみんな違いますが、でも、河川のなかで帯状に下流に広がっていて、まるで染め物でもしているようなんです。

茅 重慶というのは、人口七五〇万です。それで、工業地帯で土地は平らでなくデコボコなんですね。重慶が一番高い枇杷山というところへ、景色を見ようとして行きましたら、ちょうど満月で、重慶の町全体がきれいでしたね……そのデコボコなのが。

松本 唐詩なんかには、月がずいぶん多いです。日本の歌にも月は多いけれども、中国の月というのは、やっぱりきれいなかな。

茅 月落ち烏啼いて……。

下河辺 寒山寺ですか。

重慶は、おつしやる通りデコボコですから、自転車を利用できないんですね。だから中国の町としては、自転車が非常に少ない町として特色があると思えますね。

日本に欠ける 長期的総合的対応

松本 いままで日本から中国を援助しようという気持ちでやってきた人もたくさんいるでしょうが、日本としての反省とかが、どういふ欠点か考えられますか。気が短いですか、日本は。

下河辺 二つだけ非常に気にしていることがあります。

一つは、日本人というのは、今おつしやられたように、短期的な見方しかできないということがあつて、子々孫々とか長期的となると、それはどなたかお暇な方に、というような気運が出てきましたね。アメリカとかドイツ、フランスなどは、そういうことにずいぶん関係をつけてきていると思うんですね。ですから、先ほど申しましたように、華国鋒首相が長期的戦略的ということをかなり強調されたことに対して、日本がどう対応できるかが、問題点の一つだと思います。

それからもう一つの日本の欠点は、総合的なもの考え方です。中国につき合うということ、うまくできていないこと、学問のほうでも、産業でも、行政でも、個別にはかなり交流が深まってきて

いますけれども、総合政策のところでは、ほとんど皆無と聞いていいほど食い入ってはいないと思うんですね。

ですから、たとえば石炭政策ひとつりましても、中国の場合、その範囲が非常に広くて、世界のエネルギー問題から産業構造の問題、石炭の液化利用の問題、水路で運ぶか鉄道で運ぶかという議論もあります。それから、水で選鉱するため冬なんかは凍つたりしますから、石炭を選鉱するかしないかという問題もある。さらに、石炭を発掘する山の周辺で、人間が住めるようにするにはどうするかという議論もありますし、問題が非常に広くて、総合的な論争になるんですね。

そうすると日本では、たとえば通産省は生産で、運輸省は輸送で、建設省は都市でということになり、総合的にデイスカッションができない。そういうことで石炭政策だけではなくて、食糧政策なんかも、ちよつと心配しております。

長期・短期の話と、総合的な話というのは、日本の場合少し勉強しないと、中国と十分議論しきれないと思うんですね。松本 華国鋒さんが戦略的と言つたのはどういう意味なんですか。国内的に戦略的なんですか、あるいは総合的という意味で戦略的なんですか。

下河辺 非常にいろいろな次元があると、思います。

たとえば先ほど申し上げた石炭なんかですと、実務的な話し合いは、一九八一―八二年をどうするかということ、はた



下河辺淳氏

して中国が協定通り日本へ石炭をもつてこられるかどうか、という問題があるわけですね。もちろんそれも重要でしょうが、中国側は、一九九〇年代のエネルギー問題を議論しようということを言い出しており、そのなかで、中国の石炭が日本のエネルギーにとってどういう位置を占めるか、ということを議論したいと言っているわけです。

これは、単に輸送の問題だけではなくて、石油との関係とか原子力の関係のことも全部出てきて、しかもいろいろな国との関係も出てきますから、極めて戦略的な議論に発展すると思います。

そういう問題になると、私どもでは議論しきれなくて、まさに総理クラスがもっと深く研究なさる必要があるんじゃないか、そう思って大平総理にそこを申し上げようと思っている矢先に、ご不幸があったものですから、ちょっと困っていますけれども。

考えたい 中国人留学生への援助

松本 中国側の責任ある地位にいる人は、総合能力の必要があるからでしょうが、総合力がだんだん発達するでしょうね。
下河辺 中国の指導部には、総合力を非常に兼ね備えた方がおられるように思いますね。

松本 茅さんが会われた趙紫陽という人は、どういう人ですか。
茅 この人はね、四川省で食糧が足りない

くてかなり騒然たるときに、四川省の共産党の第一書記を勤めていたんです。彼の方針は、社会参加ですね。そういう思想を導入して、たとえば養蚕のうまい人には養蚕を全部任せちゃう。それで、これだけとれ、それ以上とつたらあなたの利益になると言う。養豚、養鶏なども、みんな同様に委託する。それから五パーセントだった自留地を一五パーセントに上げた。自留地の高く売ってほしいと。すると、いつでも自分のところで働けるというので、遊んでいる連中が減ったというんです。

趙紫陽さんは、そういう自分の利益になるものを、どんどん取り入れていった。そして働きがいがあるという境地をつくり出そうと努力したらしいですね。それで四川省が非常にうまくいきましたね。彼は、自分が行ったときはそうなり出していたんだと言って、大変謙遜していましたがね。

松本 いくつぐらいの人ですか。

茅 六十一歳です。外人とはあまり会わない人らしくて、私が初めて会った外人だと言っていましたね。

私ね、日本で青少年育成の問題をやったもんで、彼に、中国ではどういう人間像を頭に置いて人間をつくるか、と聞いたら、一九五〇～六〇年の中国の青年は、実に国のために自分を出し切って働いていたが、今の青年はそうではなくなった、とがっかりしていましたね。

下河辺 今、中国の教育のなかでは、外

国語教育というのが非常に重要視されてきたと思うんです。しかも、日本のように英語だけという教育じゃなくて、たくさんの方の言葉を教育するようになってきた。それも、子供のほうが選択して、やりたいものを希望してやれるような状態になってきたと思うんです。

中国語というのは、実は世界でいちばん発音とかアクセントの変化の多い言葉ですから、各国の言葉を覚える能力は、中国人がいちばん高いんじゃないかと思うんです。日本人には、とてもじゃないかありませんが、中国語を正確に発音することは、なかなか無理だと思います。

ですから、私は中国政府に、中国人がたくさんの方の国の言葉をしゃべれることを中国の資源にしたかどうか、それは、これからますます国際化が進むなかで、中国にとっていちばんいい仕事かもしれない、ということをお願いしています。

茅 私の感じですが、アメリカ人とか、ほかの国の人々が日本語を話すときには、いかにもアクセントがおかしくて、滑稽な感じがしますが、中国人が話す日本語というのは、全然おかしくないんですね。

下河辺 中国人というのは、音感が鋭いんですね。

松本 今、日本に来ている研究生とか留学生など、お金が足りないというのを聞いてるんですけど、日本側として何かやれることはあるんですかね。

茅 日本の政府の金で呼んだ学生は、む



しろ金は余るくらいなんです。

松本 一カ月にどのくらいもらっているの？ 日本の政府が呼んだ人は。

茅 一〇万を越しているんじゃないですか。たとえば研究生ですと、三〇万くらいあげているんですよ。非常に節約してやりますから、半分ぐらい余ってしまう人がいるんですね。けれども、向こうから私費で来る留学生、それが難しいですよ。

松本 中国の政府から来ている日本への留学生というのは、月六万円ぐらいというのを聞いたけど……。

茅 中国では大学教授の俸給は、日本円に直して欲しい三万円程度ですから、日本へ留学させるといふときに、六万円というの、中国としては踏ん張ったほうですね。ですから、なるべく日本で呼ぶのをふやす方向でやるより、仕方がないんじゃないでしょうか。

松本 三〇万円もらっている日本政府の留学生ですが、中国の大使館でお金をプールして、六万円しかもらえない生徒に横に流すということ聞いたことがあるんです。それは本当ですか。

茅 よく知りませんが、私の知っている人が、使っても一五万円ぐらいのもので、残りは大使館の方へ行ってしまおうと言っていた。それがどう使われるのかわかりませんが、あるいはそういうことになっているのかもしれない。しかし大使館では、それはちよつとまずいというので、直そうと努力しているという話

は聞きましたね。

現代化の 意味の理解から

松本 最後に、茅先生、下河辺先生が、いちばんおっしゃりたいことがあったら、一言ずつ話してくださいませんか。

茅 やはり私は、最初に申しましたように、第一級のりっぱなものをつくるより、まず基盤となるものをつくっていくことが大事だと思います。たとえば理科の問題なんかでは、日本では理科教育をどういうふうにしてやっているのかを参考に、それから次第に科学技術の発展とすることを考えていただいて……。科学技術を発展させるために必要な基礎的なものを考えていないんじゃないか、困ると思いますかね。

下河辺 言葉のうえで、唐から学んだ言葉の多くが日本の言葉になったんでしょうけれども、そのときに、唐の時代に伝播したままのものというのがたくさんあって、中国のほうは、その言葉の意味とか概念が非常に変わってきている。一三〇〇年たった今日でも、同じ漢字が日本と中国で違った意味をもっているというものがたくさんあります。

日中の友好関係で、漢字が同じだからということ、非常に大きなプラスであると同時に、実は非常に大きな危険をもっているという感じがするんですね。その点をこれから少ししていねいに両国間で理解し合い、話をしていくことが必要で

はないかと思えます。

たとえば、経済の現代化という言葉も、日本語で「近代化」と訳したというのは、私は相当疑問があると思うんです。中国語では、近代化という言葉はなく、現代化と言っている。それじゃ現代化というのは何を意味しているかというと、日本人には、ちよつとわかりづらいんじゃないかと思えます。そういう言葉をみても両国間の深い歴史と、何回かすれ違ってしまった歴史が蓄積されているという感じが、非常にありますね。

松本 略字というのか、漢字を簡易化する運動があつたけれど、三〇〇〇字ぐらいで止めたという話を聞いたんですが、本当ですか。

下河辺 それは文章が終わつたあとですね。中国では、日本人というのはカタカナとひらがなを発明したことによって発展した、ということを力説していた時期がありまして、中国も進んで略字をつくっていったんです。けれども最近では、行きすぎていくという批判が強くなりましてから、もうあまり略字化しないんじゃないかと思えます。

茅 簡略化しすぎて、中国の人が自分にも読めないと言っていましたよ。

松本 何時間やってもお二人のお話は尽きないと思うんですが、時間がきましたので……。今日はどうもありがとうございました。

追悼 中山伊知郎先生



昭和53年4月15日、21世紀フォーラム中山部会にて



高峰秀子さんとテレビ対談



お孫さんの道生さんと



大好きなゴルフ。豊岡コースにて



中労委会長時代。夜食で徹夜交渉



東畑精一先生、田中耕太郎先生、横田喜三郎先生と。いずれも著者



有澤廣巳先生も著者



軽井沢で。松本重治先生の顔もみえる

巨星隊ちりて淋しさひとしお



◆ 大来佐武郎

（外務大臣・中山伊知郎部会）

おおきた さぶろう

中山伊知郎先生とのおつき合いは、終戦直後から始まる。私が外務省調査局に籍を置いて、戦後日本の経済再建問題の研究会で書記をつとめていた当時、中山先生もその研究会に参加され、活発に意見を開陳された。この研究会には大内兵衛、有澤廣巳、東畑精一、稲葉秀三、土屋清、その他有力な学者、エコノミストが参加し、昭和二十一年の春に「日本経済再建の基本問題」という報告書を作成し、戦後日本の経済政策のあり方を示す重要な指針となった。また先生は当時の吉田茂総理の昼食会のメンバーで、私は書記としてその会のお手伝いをしたこともある。

昭和二十二年夏から、三十八年秋まで経済安定本部、経済企画庁にあって、私は経済白書、経済計画の作成などを担当したが、中山先生は経済審議会の総合部会長として、所得倍增計画作成などの実質的な指導者として、たいへんお世話になった。また経済企画庁参事会のメンバーとして、あるいは物価政策懇談会、そのほか各種の審議会の委員として、先生と一緒に参加する機会も多かった。

また仕事をはなれて、朝日新聞社の幹部と、学者先生方のゴルフ懇親会（ジャーナリストとプロフェッサーの会ということでJPC会と称する）には、十数年来メンバーとして年に何回かのゴルフ会を

ご一緒に楽しんだ。その関係もあって、梅子夫人と私の家内も親しくしていた。年をとるとあれやこれや走馬燈のように、先生との出会いの場を思い出すが、つねに積極的で、明るく、問題解決に具體的に提案される先生の姿勢は印象的であった。戦後の日本が順調な経済発展をとげ、いまでは世界の大国として、先進国のサミットにも参加するようになったが、それには、先生の経済政策、労資関係などにおける建設的な献策が大きな力となったことは疑いをいれない。

かけがえのない人を失う



◆ 滝田実

（アジア社会問題研究所理事長・中山伊知郎部会）

たき た みる

戦後日本の経済復興と高度成長の「鍵」はなにか、EEC諸国でも、発展途上国でもよく話題になる。要因はいくつかあるが、そのなかで最も重要な項目の一つ

にあげられるのは、日本の労働者の質と労使関係の良好なことである。中山先生は学問の分野で偉大な存在であり、功績の大きかったことは何人も認

めるところだが、経済学者であると同時に労働経済や労使関係についても造詣が深かった。その強みが中労委会長として労使紛争解決に当る第一人者の地位を不

動のものにされたと思う。鋭い感覚と絶妙なタイミングをみての判断には海千山千の労使関係者は脱帽するしかなかった。三十年余にわたる長いおつき合いだったが、その間の先生は労使の代表的な人たちと直接話し合い、学問的分野から人間社会の現実問題の処理に当ることによって人間的に丸味をもたれ、一層磨きがかかったようだ。もし日本の労使関係が

独自の存在



つつみせい い じ
◆ 堤清一

(西武百貨店会長・中山伊知郎部会)

力と力、階級的対立に終始していたとするなら到底今日のような経済発展はなかったであろうことを想うとき、中山先生は日本経済発展の大恩人であるといつて過言ではない。

はあっても、勝敗を超えての談笑する時間が楽しかった。二十一世紀フォーラムの中山部会の今後について、「この部会、どうしたものだろう」と気にしておられたが、とにかく淋しくなってしまった。いや、この部会だけではない。かけがえない人を失って日本が淋しくなったような気がしてならない。いままあの笑顔が蘇ってくるようだ。

中山先生とはいろいろな会合でお目にかかった。その多くは、互いに異なった立場に立っている人が一堂に会するという種類のものだった。産業労働懇話会とか社会経済国民会議というのがそれである。今になってそれは何故だったろうと思う。先生がおっしゃることだと、皆は納得をする、ということがあった。これは大変珍しいことである。国会などでもそうだけれども、日本の場合、会合に出て来る人は、もう見解が決っていて、議論の結果、自分が所属している党派や社会的立場を超えて、場合によってはその利害に反しても、正論につく、ということが

全くないのだ。だから、立場、利害の相反する人が集まるとすれ違いの議論か喧嘩になってしまう。それが厭なら、とおり一遍のタテマエ論でお茶を濁すということになるのだ。

その点で、中山先生は、全く独自の存在だったと私は思う。それは先生の学問的な達成の結果ばかりではない。それもあつたろうが、常に、先生は自由な立場で、正しいと思われる意見に心を開いておられた、ということがある。それは、常に異った意見の一つ一つにその正しさと歪み、主観的な誇張や見落しを見抜いておられたということでもある。

それでいて、先生は温かさを失わな

った。

冷徹な判断と認識はしばしば秋霜人を斬る厳しさを雰囲気として醸し出す。しかし先生の場合、どんなに烈しい議論の席上でも、個人的にお目にかかっている際にも、常に変らぬ温顔に微笑を断やすることがなかった。

この先生の行動が先天的な徳によるのか、後年の自己鍛錬、修養によって形成されたものかを私は知らない。ただ私に分ることは、先生のような方にはもうお目にかかれないだろうということ、しかし先生のような人でなければ、これからの変動の時代にコンセンサスを作っていく作業は出来ない、ということである。



中山伊知郎先生に接して

◆ 中根千枝

(東京大学東洋文化研究所所長・中山伊知郎部会)

友人とか直接御指導を頂いた先生というような自他ともに明らかな個人的なおつき合いが殆んどないにも拘らず、どうかすると、人間的に大変親しさと信頼をもつことのできる方々がある。中山先生は私にとっては、そうした方々のなかで最も大きな存在であった。「大変御尊敬申し上げていた」という表現よりも、失礼ではあるが「大好きな先生」という方がしっくりする。

いつ頃から先生とお知り合いになり、楽しくお話するようになったのか、どうしても思い出せない。少くとも十数年以前のことである。はじめは何かのシンポジウムで御一緒に講壇に並んで意見を披露したときかと思う。有名な経済学の先生でいらつしやることは知っていても、私自身経済学を専門としていない気易さから、そのときの討論のなかで、私は先生に向って、「経済学者でいらつしやるのに、その頃(当時から十数年前)どうして今日の日本の経済(当時は高度成長期に入りつつあった)の予測がおできにならなかつたのでしょうか」といたずらな質問をしたりした。それに対して先生は、

例の包容力のある笑顔で大変すなおに、予測できなかつた経済学者のいたらなさを説明され、私を納得されたことを思い出す。そのときの素晴らしい先生の飾らない反応がとても気持ちよかつたが、それにもまして私が先生に魅力を感じたのは、フロアから出された質問に対して示された先生の一つの対応の仕方であつた。

その質問者は相当片よつた考え方をもつていて、また、学問的素養もないうらしく、質問の内容も貧しく、攻撃的で本当にひどい発言であつた。私は先生の横にいて、先生がこうした発言にどのような答えられるのかと、そのことに大きな関心をよせていたところ、先生はその発言が終るや否や、質問者の方を全く無視して、正面に向かれ、間髪をおかず「次の質問、どうぞ」とはつきりしたお声で言われた。その瞬間の水ぎわだつた切れ味！くだらないものには容赦しない冷たさ、私は心から胸のすく思いがすると同時に、なるほど、こういう方法があるんだな、何と頭のよいスマートな先生だろう、とすっかり感心してしまつた。

それから十数年の間、先生が会長や座

長をつとめられた会議やシンポジウムにぜひ出席した。会議自体よりも先生にお目にかかるのが楽しみでといった感じで。とりわけ先生の座長ぶりは私が知る限り日本で、むづかしい問題につき出たときや、意見がまとまらないときに示される先生の手腕にはとても多くのことを学んだ。私の出席した多くの会議では、先生は御自分のお人柄をきわめて自然にお出しになり、大変愉快そうに笑われたり、御自分の意見を遠慮なくお出しになったりするのが常であつた。一見、磊落にみえたが、本心は大変心のキメのこまかい、そしてきびしい方であつたと思う。会議の出席者の意見、気持を間違ひなく察知し、事務局の意向を理解し、問題の真相をみきわめ、ベストに向って推進されるお力は見事なものであつた。

先生はときどきいたすらすらに、私をからかわれたりした。先生のあたたかさや自由なのびのびとしたお人柄が偲ばれる。もつともつと先生に学びたかつたのに……。

天国で「二十世紀フォーラム」を

松山幸雄

（朝日新聞論説委員兼編集委員・中山伊知郎部会）



「門下末流」という言葉がある。何千、何万といる中山先生のお弟子さんたちの中で、私は恐らく、いちばんびりつけつの人だろう。親しく警咳に接するようになったのは、先生の晩年、わずかこの二年余のことにすぎない。

期間は短かったとはいえ、先生の私に与えた影響は強烈だった。何故ならば、実力、貫録がつくことと、気さくさ、知的好奇心を保つことが二律背反になりがちな日本の社会にあつて、先生は稀有の例外だったからだ。

世の中には、碩学とあがめられるには、何よりも、気むすかしく、晦渋であることが先決、と錯覚している人がいかに多いことか。中には、学識も十分でないくせに、まず気むすかしさ、晦渋さだけ身につけようと努力しているようにみえる人さえいないではない。

その点先生は、威張らず、もったいぶらず、話は常に明快で、私のような学のないものにも、劣等感や反発を感じさせない不思議な魅力を持っておられた。先生とおつきあいしている限り、日本の先

輩、後輩の関係にとかくありがちの、うつつうしい、ドロドロしたものに触れずすんだ。知的な、醒めた会話だけしていればよい、という人間関係が、日本の社会ではいかに貴重であることか。

あれほど功成り、名遂げた人が、どうして私などに興味をもたれ、向うから積極的に接近してこられたのか、いまだによくわからない。恐らく、齢をとるに従つて、知的好奇心が衰えるどころか、逆に時代を先取りしようとの精神が旺盛になる、という特異体質だったのであろう。あるいは、自分と全く縁のない世界に住む男と言葉を交わすことで、老化を防ぐうとされたのかもしれない。

人生、どつちをみても難しいことばかりだが、私はこのごろ「齢のとり方」ぐらい難しいものはないのではないかと、思うようになっていく。老いてますます熱心に若い世代の意見に耳を傾ける、というのには、一見簡単なようであるが、実際にはなかなか出来るものではない。先生は（松本重治さん、茅誠司さんといった二十世紀フォーラムの大先輩と並んで

私に、いかに齢をとるべきか、のすばらしい見本を示してくれた。

亡くなられる少し前、私は「いちど中山部会をハワイか香港でやりましょう」と提案した。茅部会のエネルギー問題現地見学会に、九州、北陸と、二回続けて参加させていただいた私は、そのお返しとして、茅部会のメンバーを、中山部会の旅行に招待する義理を感じていたからだ。

中山部会のメンバーなら、ハワイであろうと香港であろうと、地元の大卒や在留邦人向け講演会を手分けしてこなすことが出来るから、費用はかなり浮かせるのではないかと——そんなことまで考えていたのだが、ついに具体化の話をするこ

となく、先生は逝かれてしまわれた。二十世紀になってしばらくすれば、今の中山部会のメンバーも全員天国に勢ぞろいするであろうから、その時はもう一度中山先生をキャプテンとした「二十世紀フォーラム中山部会」に参加させていたきたい、と期待している。

ある秋の午後の口答試験

◆ロベール・J・バロン

(上智大学経済学部教授・中山伊知郎部会)



「先生」という敬称は、いろいろな意味で日常茶飯事に使われているようですが、誰にでも、感謝と敬慕の念で、心から離れない真の意味での先生を一人か、二人持っているはずです。

お名前は、たびたびお聞きしたことはあったのですが、私が始めてDr. Nakayamaにお会いしたのは、昭和三十八年でした。その最初の会合を、今でもはっきり憶えています。それはある秋の午後場所は、上智大学の隣の福田家でした。日本の労使関係を話合う座談会に招かれ、その時の他の二人の出席者の方が、中山伊知郎先生と大河内一男先生でした。この座談会の後、中山先生は、何年もの間機会をとらえては、「バロンさんの日本の労働」と、その折私が言及した事に関して、私をからかわれたものでしたが、その会合は、私にとって労働というよりは、労苦というべきものでした。その頃、日本の労使関係に大変興味を持っていました。座談会への出席を承諾したのも、その研究の権威であられたお二人に、生徒として学ばせていただくという気持が

らでした。中山先生にこの気持が通じたらしいのです。そこでまず、私に厳しい試験をしてやろうと決心されたようでした。(生徒に試験をするのは、先生の特権ではあるのですが……)

長い残暑の後のほつとするような秋の午後、福田家の一室に通され、私は、床の間の前にすわるようにいわれました。

そこには、菊が活けてあったと思うのですが、鑑賞のゆとりなどありませんでした。開けはなれた窓からは、秋風に、木々のそよ音が聞こえていたのでしょうが、耳に入ってくる状態ではなかったと思います。床の間の前の席を与えられた代償を、それ相様に払うように要求されていたのですから。お互いの挨拶がすばやく交され、突然中山先生が、「仕事にかかりましょう」というようなことをおっしゃった。少々、驚き、怖れ、自分が、無情な立場におかれたことを知りました。私が最初の学位を取ったベルギーのルーバン大学では、試験は全て、口答で行われました。いくつかの試験には落ちましたが、まあまあ学位をもらえる程度にはパスすることができました。ですから経験はあったのですが、この時のような

口答試験は始めてのことでした。座ぶとんの上に坐らされ、日本茶を前に、話される言葉といえは、十数年たった今でさえ、また完全にはなじめないでいる日本語でした。少し譲歩をいただいて、専門用語等、難しい場合は、英語を使ってもいいことになりました。これも、試験をされている立場の者には、あまり大きな助けとはなりませんでした。

議論が白熱化してきた頃、生徒としては生意気にも、戦後の日本の労使関係は、「日本的」という言葉に集約されると強く主張したのです。また、再確認の意味もあって、続けて「Japanese-life」と英語におきかえました。これが、火に油をそぐ結果となりました。「日本的」という表現は、その頃はまだまだあまり使われていなかったようです。私としては、日本の労使関係力学、その制度をマルクス主義や米国用語で説明することに、少々賛成しかねていました。その事もあって、日本の(労働組合)というかわりに、日本的(労働組合)という表現に固執したのです。

この機をとらえられて、中山先生の攻撃が始まりました。攻撃を受ける身、そ

れも言葉が日本語ということもあって、息がつまりそうになりました。時折、すきを見て、「英語」に逃げこもうとするのですが、「日本語」のやりが絶えまなく、追いうちをかけるのです。この生徒は完全に試験官の掌中にありました。この状態の中で、一時的休止を、大河内先生の助けによって与えられました。この攻撃の合間をぬって、ご自分の意見を述べて下さったことに大変感謝しました。しかしながら、またもや、試験官の声がとんできました。「バロンさん、総評の行動が日本的であるとは、どういうことですか」「どうして、日本の企業が日本的で、本的に行動してるといえるのですか」こ

れが三時間あまり続きました。途中、コーヒーがだされたのですが、休憩の意味ではありませんでした。「ご苦勞様、食事にしましょう」と中山先生。それがあまり突然でしたので、落着きを取りもどすのに、少し時間がいました。いつの間にか、障子が閉められていて、その上に、庭の木の枝の動きが写っていました。少し日本の美を鑑賞するゆとりが戻り、出された食事が大変おいしかったことも憶えています。すでに暗くなった通りへ出た時、中山先生が私の方を向かれ、始めて冗談をいわれました。「バロンさん、福田家の日本的・霧囲気、日本の料理は、どうでしたか」

この一言に私は元気づけられました。座談会で、かなり幼稚なこと、ばかげたこと、あるいは失礼にあたることを述べたかも知れないとかなり気弱になっていましたから。この著名な方の心の片隅に、私のために小さな場所をあげてもらえたような、そして、私の先生になっていただけのような気がしたので。暗記力のあまりよくない私が、不思議にも覚えていた俳句が一つだけあります。この道や
くる人なしに
秋の暮
福田家の前を通る度に、この秋の午後を思い出します。



中山先生 ゴメンナサイ

笠井章弘

(政策科学研究所理事長・21世紀フォーラム事務局長)

◆ 大失敗の出会い

「君、名前は何というの」
これが中山先生から小生に声をかけられた最初の言葉であった。
これだけでは、初対面の何の変哲もない会話のパターンだ。会話のバックにはある状況が存在する。つまりT・P・Oによって、あたりまえの会話が、時に極

めて珍妙なものとなることがあるらしい。

Tは昭和二十一年四月某日、Pは一橋大学本館二階、Oは三年生(当時最上級生)の中山ゼミ。そのとき小生は高島善哉ゼミの学部新入生。新入生である小生は、先生の顔を知らない。しかも遅刻したので、あわてて間違った室へ入ってしまった。そこが中山ゼミの室であった。三時間にわたる報告、討論のあと、「他

に質問は」となって、よせばよいのに小生は中山先生に質問をした。先生は懇切丁寧にお答え下さった。

そして「ときに、君、名前は何というの」という冒頭の会話となるわけだ。正に赤面の至りというべきである。しかし小生は、このとき赤面しながらも、心の片隅で大変感激していたことを今でもはっきり思い起こすことができる。という

のは、普通ならば、小生が質問したとき

に、当然見慣れない顔だから、「君、名前は何というの」とくるはずなのに、小生のつたなき質問にご親切にお答え頂いた上で、名前を聞かれたことに、深い感銘をおぼえた。この感銘は、大学の先生というものは、大変偉い人なのだと思うと同時に、中山先生の教え方の中に心の温かさをしみじみと感じたことであった。

その後二十数年、先生のご推薦で身にあまる仕事の機会や会合にお呼び出しを頂いた。そして偉い方々の前で時折り、ここにいる笠井君というのは、昔は面白い学生で、と、冒頭の話を持ち出された。時がたつにしたがって諸先輩の中には、小生が中山ゼミ出身だと誤解される方々が実に多くなってきた。

「人間の出会い」というものは、人生のドラマのはじまりだといわれる。小生の場合、大失敗をしたお蔭で、中山先生という大先生にお会い出来、その上その後二十数年に亘って——より正確に申し上げれば、ご逝去の直前まで（つまりこの二十一世紀フォーラムの運動で）ご指導頂いたわけである。中山ゼミの友人は「笠井君は、中山ゼミのものより中山先生にご厄介になっているよ」と言われ、わが悪友どもからは「お前の大失敗は、失敗は成功のモトという方だ。ただし、中山先生だからよかった。中山先生に感謝しろよ」と忠告される。そして小生は両者のいい分を素直に聞いている。

「宝くじ」と「熱いおしるこ」

中山先生が小生のことを「面白い学生だった」といわれるのには、実はもう一つの理由がある。小生は大学二年生のときから、「雇われマダム」ならぬ、「雇われ編集長」のアルバイトで平凡社にご厄介になった。昼間、大学で中山先生の講義を聞き、夜は小生が編集長で先生に厄介な仕事を押し付けていた。「オイ、笠井君あんまりコキ使うなよ」などといわれながら、中山先生には親身も及ばぬご協力を頂いていた。編集委員会などで、議論が紛糾して時に小生が遠慮した発言などすると、大勢の大学教授の先生方の前で、中山先生が「昼間はわれわれが先生で笠井君は学生だ。しかし夜は君が編集長でわれわれは外部からの参加者にすぎない。意見はいうが決定は君だから、遠慮なくやり給え」といって下さる。この一言は小生にとって大変有難かったと同時に、仕事のきびしさを教えて下さったものと感じ入った次第である。

寒い冬のことであった。

夜の編集委員会が終わって先生方を車で送ったときのことである。昭和二十年代の中頃のこと。したがって車といっても木炭車である。中山先生が車の窓をあけて一緒に乗れよと誘って下さった。その頃先生は東北沢に住んでおられた。小生は上北沢なので、先生をお送りしてから小生が帰るのには極めて都合が宜しい。「渡りに舟」で同乗させて頂いた。

先生は車の窓から街並みを眺めながら、

「笠井君、君、ボクの統計学の講義をとったの？」

「ハイ、去年単位をとらせて頂きました」

「成績はどうだった？」

「お蔭さまで優を頂きました」

「ホントカネ。では、今窓から見える宝くじの確率はどの位か知ってますか？」

「……………」

「優をやったのは間違ってたな」

これは第一回の宝くじの広告が始まったばかりの頃のことであった。試験が終われば、直ちに忘れてしまうような勉強の仕方をしてきた小生にとっては、痛烈な一撃であった。そのあと「学問と現実」あるいは、学説の「内在批判」と「超越批判」などの視点についてやさしく教えて頂いた。その後、余りに政治的・社会的な中労委の会長の職をご立派に果たされ、あるいは、池田首相の所得倍増論の根拠となった「月給倍増論」などに見られる、現状認識の深さを、小生は、この「宝くじ」問題を通して寒い木炭車の中で、はからずもご教示頂いたことになった。

日本の経済学の基礎をつくれ、しかも、理論経済学の泰斗が、このように現実の問題について、深い認識と対策をもっておられたことは、稀有のことと云べきであろう。

冬の夜をトコトコと走る寒い木炭車の車内で、中山先生のお話に酔いしれているうちに、東北沢のお宅へ到着した。

追悼中山伊知郎先生

「君、ちよつと上がつていけよ」

玄関からすぐ右の応接室に通された。

応接間もとても寒かった。当時も石炭の傾斜生産などというエネルギー問題が存在し、国民すべて寒い生活の中にあった。先生は着替えもせずにご自身で火鉢を運んでこられ、それにつづいて奥様が「熱いおしるこ」とお茶をもつてきて下さった。

当時「おしるこ」は貴重品中の貴重品であった。そして寒い時間を過ごしてきたものにとって、この「熱い」ということは何ものにもかえがたい価値があった。いまやアルコール党でネコジタの小生だが、そのとき確かに熱いおしるこをこんなうまいものはないと感じた。それはおもてなし下さった中山先生と奥様の心のあたたかさではなかつたかと想っている。

◆ 世界にたった一つの事典 ◆

平凡社時代のある日のことであった。

中山先生と東畑精一先生からお呼び出しがかかった。

「われわれの友人に、南亮三郎君というのがある。今度長年つとめた小樽商大から中央大学へくることになった。彼はわれわれと同じ頃ヨーロッパへ留学していたが、人口問題では日本一の権威者だ。彼の業績をこのへんでまとめたい。そこで君に人口問題事典という本をつくってもらいたい。どうだ平凡社の下中社長に頼んでみてくれないか」というお申し付けであった。

しかし、小生はハタと困った。

「先生、わたしは寡聞にして、人口事典とか、人口問題事典とかいうものを、

日本でも外国でも出版されたということを知りません。そんなものがあるようでしたら、教えて下さい」

中山先生は、そのとき一瞬ほほえまれた。このほほえみは実はクセモノなのである。そして、世にもニツクキことをいわれた。

「そんなもの知らんよ。しかし君が編集した事典は出版賞をすべてとつたし、ユネスコの図書展覧会へ日本の代表的出版物として出品されただろう。ボクは君の編集に協力して一つだけわかったことがある。それは君がモノマネしないということだ」

これをコロン文句といわずに何をコロン文句というのであろうか。当時の小生は二十代後半の編集長であった。マンマと乗せられたわけである。しかし、このような乗せられ方は、いうまでもなく気分が悪いものではない。特に若いときには……。早速、下中社長にお伺いを立てた。

「笠井君、人口問題事典は売れると思うかね」

「全然、自信ありません」

「まあ、いいだろう。つくってみたまえ」

「どうですか」

「君には将来百科事典の編集長を、やってみてほしいと考えている。だから、

中山、東畑両先生のいうことを聞いて、君も今から勉強し給え」

中山・東畑両先生の出版趣旨と、下中社長の出版意図は、このように違っていたが、どうやら人口問題事典は誕生のはこびとなった。

これには後日談がある。

人口問題事典が出版されてから二〇年ほど経過した頃、東畑先生はわが政策科学研究所の理事長になられた。東畑先生は終戦直後、東大から一橋大へ講師でみえられていた。小生は一橋大における戦後第一回の教え子ということになる。

東畑先生の初代の秘書が、東畑先生に「先生、笠井さんはどんな学生でした」と聞いたとき、東畑先生は、「あいつはケシラン奴で、昼間オレの講義を聞き、夜はオレに仕事をさせた。ただ一つあいつとオレはいいコトをしたことがある。それは現在まで世界にたった一つしかない人口問題事典をつくったことだ。これだけは今でも世界中誰れもマネしたヤツはいないよ」といわれたという。

それからもう一つ。
平凡社の下中社長のいわれたように、小生は戦後最初の百科事典の編集部長の榮に浴した。もちろん、中山伊知郎先生と東畑精一先生を、百科事典の編集顧問としてお迎えしたことはいうまでもない。

◆ 先生はすべて著敵 ◆

その後小生は下中平凡社社長のご紹介で故松永安左エ門氏と会い、電力中央研

研究所の主任研究員となった。入所して間もない頃、電力中研の職員録をながめてみると、顧問の中に中山先生のお名前を発見した。

「アッ、中山先生はこの顧問でもあったのか」

と、驚いて声を上げてしまった。そのとき、折り悪しくというべきか、折り良くというべきか、故堀義路理事に小生の驚きの声を聞かれてしまった。堀先生は部屋のボスである。堀先生は東大工学部出身

「君、そういえば大学は一橋だったね。オレ中山さんを知っているよ」

「どういってお知り合いですか」

「一緒に吉田首相の顧問だったからね。そうだ、中山さんの技術論はシユムペーターだったね」

実はこの短い会話は、大げさにいえば、その後の小生の人生に大きな変化を与えてしまった。というのは、堀先生に向坊隆東大総長を紹介され、科学技術マンパワー問題の幹事を担当させられるハメにたち至ったからである。今を去る二〇年前。そしてその後の小生の仕事はもっぱらこの堀・向坊両先生のご指導に従った仕事に限定されたからである。エネルギー問題、原子力問題、科学技術政策、環境問題等々のプロジェクトがそれに当る。経済出身の小生が総理大臣の諮問機関である科学技術会議の専門委員、経済審議会の科学技術委員会の委員をはじめ政府の科学技術委員会の委員の殆んどすべて、

そして国連の科学技術に関する会議の日本政府代表等々になったのは、向坊先生のご推挙によるものであった。

中山先生と堀先生がお知り合いでなければ、あるいは小生のひとり言を堀先生が聞かれなかったならば、向坊先生にお会いするチャンスは生まれなかったし、小生のその後の人生は変わっていたかもしれない。「人と人の出会い」は「人生のドラマのはじまり」と前にも述べたが、小生の半生にとってこの言葉は、身につまされる一言である。

一言付け加えさせて頂くならば、中山先生、東畑先生、堀先生、向坊先生は碁仲間、いや碁敵であるらしい。落語の碁敵のひそみにならつていえば、碁敵は「憎さも憎し、懐しい」ということであるか。碁を打たない小生の先生方がこのようなご関係にあるということとは、小生にとつてプラス・マイナスさまざまな影響があつたようである。いいことも悪いことも小生に関する情報はすべて先生方にツツスケであるという意味において。

◆ シンクタンクの本質は体力？

政策科学研究所に東畑先生が来られて数年たった頃のことである。ある会合で中山先生にお会いする機会があつた。その折、

「君、筑波大学の大学院の先生になつたぞうだね」

「非常勤講師で、環境科学の集中講義をやればよいということ、お引受けし

ました。いうまでもなく政策科学研究所はあくまで本域で……」

「あたりまえだ。君がもし筑波へ行つてしまえば、東畑君がおこるよ」

筑波大学の件は、わが友人誰一人知らないときのことであつた。中山先生が小生のことを遠くからいつも見守つていて下さつた。そのことが胸にジンときた。忘れることができない言葉であつた。そして、中山先生と東畑先生のかの有名なご友情の一端を、そのときかいま見る想いがした。

この辺までは無難であつたが、そのあとがいきなかつた。またまた大失敗をやらしたのである。

「ときに、笠井君、シンクタンクのミニマム・エッセンシャルなエレメントは何かね」

「それは、体力です」

「コラッ、」

ということにあいなつた。びっくりして小生は顔を上げると、中山先生の眼は笑つておられた。そのあと、一生懸命マトモにご説明申し上げても、「フン……」とした顔をされているばかりであつた。

こんな困つたことはない。「甘え」や「つけあがり」を猛省せざるを得ない心境になつたことはいうまでもない。

◆ アウンの呼吸

中山先生に二十一世紀フォーラムの発起人をお願いしたときのことであつた。二十一世紀フォーラムの前身は「プロメ

追悼中山伊知郎先生

テウス・クラブ」といい、エネルギー問題の勉強会であった。したがって、初めて中山先生に発起人をお願いに上ったときは、「プロメテウス・クラブ」の趣意書を持参した。

その趣意書の冒頭に、「社会のオピニオン・リーダーでエネルギーの非専門家とエネルギーの専門家が共に一緒に会合をもち」という文章があった。

中山先生はそれをご覧になりながら、小生に質問された。

「ここであるエネルギーの非専門家とは誰のこと？」

「中山先生のことです」

「それではエネルギーの専門家とは誰のこと？」

「それはわたくしのことです」

これは間髪を入れぬ対話であった。一瞬部屋の中はシンと静まりかえった。その場にはわが政策科学研究所の山田主任研究員と、機関誌の編集担当の博報堂の社員が二人いた。この人達はこのあと部屋を出たとき、あの対話で九分九厘、中山先生は発起人をお断わりになるものと思ったと言った。

しかし、そのとき先生はニコツと笑った。息をつめていた小生は、この笑いでやっと呼吸が出来た。この瞬間、このお願いは了承されたものと思った。

「笠井君、またモノマネでない新しいアイデアを発見したな」

「いえ、とんでもない。何をどうやるかは、先生がテーマを設定し、いままで

と一緒に研究会をやられていないけれど設定されたテーマについて初めて一緒にやりたい方を選んで頂ければ、それで結構です」

「何が結構だ。やっばり新しいタイプの研究会ではないか」

「はあ、そのようです」

そのあとは、経済出身のエネルギー問題の日本の権威の説に関する小生のコメントをしゃべらされた。

しかし最後の最後まで引受けたとおっしゃらなかった。次の訪問客が見えて、われわれは席を立った。そのとき、

「笠井君、ボクはまだ引受けたといわないよ」

「わたくしは引受けて頂いたと思って帰ります」

「しょうがないやつだ」

これでおしまい。

しかし、その後問題が起った。

第一回の中山部会の当日、研究所の仕事を小生は欠席せざるをえなかったため、代理を出した。その代理が、「これは大変だ」という報告をもたらした。それは、出席された方々が中山部会長に対して、会の性格、金の出どころ、その他モロモロの疑問を提出されたとき、中山先生は「すべて悪いのは笠井というやつだ」と言われたという。それで代理は大変心配して小生に報告したというわけである。

小生はそのとき心の中でシメタと思っただ。申すまでもなく、中山先生が「笠井は悪いやつだ」と言われたとき、すでに

この部会は成功だと思った。このときすでに小生は冒頭の中山先生との出会いから三十数年たっていたのである。また中山先生と部会のメンバーの方々とおつき合いも幾歳月もかかっていると思われる。そこには中山先生ならではの「アウソンの呼吸」というものがあるはずだ。代理はそのことを知らなかったにすぎない。そして、その後の中山部会は、小生がそのとき想像した如く、すばらしいメンバーの参加をみて、きわめて活発な活動を展開した。これはまさに中山先生のすぐれたリーダーシップとご人徳のおかげであることはいうまでもない。

◆ ◆ ◆
そして、静かに最後の時が近づいてきた。本年一月から二月にかけて、中山部会の今後の運営について打合せのため、幾度か時間をとって頂いた。そしてそのつど、体のおかげが悪く延期を重ねた。そして次の期日というときに、先生は永い眠りに入られた。最後の最後まで小生は先生にご迷惑、ご厄介をお掛けしたことになる。

「中山先生、ゴメンナサイ」

中山ゼミ出身でもない小生が、三十数年間、言葉では言い尽くせないご指導ご教示を頂きながら、何一つご恩に報いることが出来なかったことを今しみじみと後悔しております。

「中山先生、ゴメンナサイ」

21世紀フォーラム・部会メンバー

発起人

内田忠夫 東京大学教養学部教授

加藤秀俊 学習院大学法学部教授

加藤芳郎 漫画家協会理事

茅 誠司 東京大学名誉教授
日本学士院会員

小松左京 作家

東畑精一 東京大学名誉教授
政策科学研究所顧問

中山伊知郎 (故人)

松本重治 国際文化会館理事長

向坊 隆 東京大学総長、国連・開発への科学技術適用諮問委員会(AOCAST)委員

加藤秀俊 学部

加藤秀俊 学部

宮本常一 武蔵野美術大学名誉教授
日本観光文化研究所所長

米山俊直 京都大学教養学部助教

加藤芳郎 学部

金森久雄 日本経済研究センター
理事長

木元教子 放送キャスター

五代利美子 評論家

斉藤志郎 日本経済新聞アジア総
局長

三枝佐枝子 評論家、商品科学研究
所所長

高原須美子 評論家

富舘孝夫 日本エネルギー経済研
究所研究部長

中村 貢 朝日イブニングニュー
ス社代表取締役社長

永井陽之助 東京工業大学教授

橋口 収 公正取引委員会委員長

深海博明 慶応義塾大学経済学
部教授

伏見康治 名古屋大学、大阪大学名
誉教授、日本学術会議会
員

松根宗一 大同特殊鋼相談役、経
済団体連合会常任理事

村田 浩 日本原子力研究所顧問

小松左京 作家

河合秀和 学習院大学法学部教授

中村隆英 東京大学教養学部教授

中山伊知郎 学部

堤 清二 西武百貨店会長、西友
ストア社長

中根千枝 東京大学東洋文化研究
所所長、国際人類学民
族学会副会長

林雄二郎 未来工学研究所副理事
長

松山幸雄 朝日新聞論説委員兼編
集委員

ロバール・J・パロン 上智大学経済学部教授

松本重治 学部

イーデス・ハンソン
タレント

千 宗室 裏千家家元

堤 清二 (中山伊知郎部会の欄
に同じ)

富田 勲 シンセサイザー作曲・演
奏家

服部克久 作曲家

松原秀一 慶応義塾大学文学部教
授

三村忠良 日本国有鉄道職員局労
働課長

事務局

笠井章弘 政策科学研究所理事長

生田豊朗 日本エネルギー経済研
究所所長

依田 直 東京電力企画室室長

山田 嗣 政策科学研究所主任研
究員

比田井和子 (株)二十一世紀企画

村野京一 (株)二十一世紀企画



A POINT OF VIEW

關係



〈表紙のことば〉 水井一正

二つの力が引く張り合い、歪みながら、緊迫した
バランスを保っています。

二つの輪は融合と分離を繰り返す細胞に似て、
人と人との共生を連想させます。

私の〈白のレリーフ〉作品の一つです。